妖しろ

見舞坂歩里丸

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
妖しろ

【Ｎコード】
Ｎ８９４９Ｉ

【作者名】
見舞坂歩里丸

【あらすじ】
冬の山で遭難しかけたり、変な仕事『代わり人』を押し付けられたり、親の会社が潰れたり、学校を辞めざるを得なくなったりする不幸な元・女子高生（みやしろしろ）御社代。そんな彼女の前に山の神様が現れたり、役所の人が現れたり、悪霊に体を乗っ取られそうになったり。はてまた、これからどうなることやら。
白山神社を中心に渦巻く妖怪ストーリー！

※とりあえず読みやすいように一話から手直ししました。

どたばた就任！（前書き）

小説初公開でございます。

作者は文才無いので、暖かな目で見ていただきたいのであります。

尚、誤字脱字等発見したら、ご指摘願いたいのであります。

もしかしたら、修正するかもしれないのであります。

どたばた就任！

このお話の主人公、御社代（みやしろ　しろ）は、高校一年の冬休みに、ひょんな事から山で遭難してしまった！暗闇の中、道無き道をさまよい続け、時には猪（こんな時期でもいるのかな）に追われたり。そうこうしているうちに、何と光る物を発見した！その光に向かって全力疾走、途中で木の根に足を取られて転んだ先が開けた石畳だった。「何だここ？」と思いつつ立ち上がると、そこはとても大きく、古びた神社だっりして！

「痛ぇ～…」

周りを見回しながら、小さくそう言った。どうやら手のひらを擦りむいてしまったようだ。

「ここって……神社？」

拝殿らしき建物には明かりがともっているようだ。心なしかテレビの音も聞こえる。

「人…いるのかな？」

淡い期待を胸に、代は拝殿に向かった。賽銭箱の脇を通り、幾段かの階段を上った。

代は今、引き戸の前まで来ている。中には人が居るようなのだが、戸を開けて声をかけるのに躊躇していた。

「……よしっ」

代は覚悟を決めて、戸を引いた。

「ごめんくださ～い…」

中では、見た感じ六、七十の老人がテレビの前に座っていた。

「あの～…」

代がもう一度声をかけると、老人はやっと代の方を向いた。

「おやおや、こんな時間にお嬢さんが何の用かな？」
老人（多分神主じゃないのかな）がゆっくりと代の方に近寄ってきた。
「あの…実は山で」
「そんな所じゃ寒いだろう。兎に角中へ入りなさい」
代は老人に話を遮られた。

「……と、こういう訳なんですよ」
代はさっきまでの出来事を事細かに話した。
「ふむ……。狸にでも化かされたんじゃな」
老人はそう言うと台所の方へと行ってしまった。
「…うっ！もう三時だ…」
代は携帯の時計を見ていた。
　少しして、老人が皿を持って戻ってきた。
「若いのに大変だったろう。さ、これを食べなさい」
老人はそう言って代にお粥を出してくれた。
「あ…いや…でも」
「いいから食べなさい。元気になるから」
代は、一応遠慮したが、そう言われたので素直に食べることにした。
正直、今の代にはこのお粥はとても有り難かった。

「…御馳走様でした」代はそう行って箸を置いた。
「お嬢さん、食べるときに『いただきます』を言わなかったね」
老人がそう言った。
「あ…すみません…」

代は何だか申し訳なくなってきた。確かに、『いただきます』『御馳走様』を言うのは当たり前のことだ。
「まあ、兎に角今日のところはここに泊まっていきなさい。確か布団があったはずだから…」
老人はそう言うと、今度は隣の部屋へと消えていった。この神社、意外と広いようだ。
「（お父さんとお母さん、きっと心配してるだろうな…）」

そう思っていると、今度は老人が布団を抱えて戻ってきた。
「あったあった。この布団でよければ使いなさい。前に死んだ神主さんのだけど」
老人は聞きたくない情報を布団と共に提供してくれた。
「あ、いや…申し訳ないんですがそれはちょっと…」
「そうだよなぁ…。じゃあ、失踪した巫女さんが使ってたやつとかは？」
「あ…ですから…」
代は顔が引きつった。
「冗談じゃ。これは多分何ともないだろうから、これ使いなさい」
「あ～…何か、ほんとにすみません」
代は深々と頭を下げた。
「気にすることはないさ。じきにここは君の物になるのだから」
老人はそう言った。
「えっ？」
代は、老人の言葉の意味が、この時点ではさっぱり分からなかった。
「まあ、今から気にすることはない。ではお休み」
そう言うと老人は部屋と部屋とを仕切る襖を、ゆっくりとしめた。
「……私の物？…どういう意味だろう」
少し考えようとしたが、布団に入った瞬間、さっきまでの疲れが一気に押し寄せたのか、代はすぐに寝息をたてた。

「んん……」
どこからか差し込んでくる朝日が代の顔を照らす。
「もう朝か……あっ！」
寝ぼけていたので暫く分からなかったが、よくよく考えてみたら昨日は災難にあって、今家にいるわけではないのだ。なのに代はすっかり自分の家に居るように感じていた。
「そうだ！おじいさんにお礼言わなきゃ！」
代は隣の部屋を見たが、もう布団は片づけられていた。
「どこいったんだろ…？」
代は少し不安になってきた。その時、この建物の玄関の方（昨晩代が入ってきた場所ではない）から物音がしたので、急いでその方向へ向かった。　そこには私服の老人がいた。靴を履いている途中のようだ。脇にはやたらと大きな鞄がある。
「どこかお出かけですか？」
代がそう尋ねる。老人は
「いや、代わり人が現れたから、私の役目はもう終わりだ。今まで四十五年、長かったようで短かったなぁ…。では、頑張ってくれ、代わり人よ。もう少ししたら役人が来るだろうから、その人から話を聞きなさい」
と返すと、戸を開けてどこかに行ってしまった。代は、訳が分からずその場に立ちつくすしかなかった。

「私が…代わり人？」
まだよく理解出来ていない。そんな時、寝る前に聞いた言葉が蘇っ

てきた。
『じきに君の物になるのだから』
「そう言うこと…だったの…？」
代は力なくその場に座り込んだ。訳が分からず、暫く座り込んでいると、戸の向こうから砂利を踏む音がする。だんだん近づいてきているようだ。
「（もしかしたら、おじいさんが戻ってきてくれたのかもしれない）」
代はそう思って立ち上がった。戸の前まで来た人影は、戸を二回ほどたたくと
「失礼します」
と言って戸を引いた。代の目の前に立っていたのは、お役所の人だった。
「この度は、『代わり人』をお受けいただきありがとうございます」
お役所の男性はそう言って頭を下げた。
それに対し、代は
「あ、いや、受けてないんですけど…」
「と言っても、ほぼ強制なんですけどね」
代の言葉が終わる前に、男がそう言った。
「ここに来てしまったのが運の尽きと思ってください」
「いや、でも私には家族とか学校とか…」
「あなたのお父様は、事業に失敗し、家族で失踪しました。学校の方は、こちらで連絡しておいたのでご心配なさらずに」
男はニコニコ笑顔でそう言った。
「お…お父さんが事業に失敗！？何でまた急に！？」
代は驚いた。
「詳しくは話せませんが、あなたが『代わり人』の役を受ければご家族の安全はこちらで保証します」
「……『代わり人』って、具体的にどう言うことをすればいいんですか？」

代は取りあえず仕事内容を聞いて決めようと思った。変な仕事だったら絶対に断ってやる！
「する事ですか…。まあ、強いて言えば、ここに一人で住むことと、あとは来る人に差別なく接してあげることですかね」
男はメガネを定位置に戻しながらそう言った。
「……それだけ？」
「ええ。これだけです」
悪い話ではない。住む場所に心配せずに居られるのだし、客は適当に対応しておけばいい。しかし……
「そうそう。光熱費はこっち持ちで、しかも給料もでますよ」
「やります」
代は即答した。
「そうですか。では、また後で伺います。あ、そうだ。身長を伺っても？」
「百六十一ですけど…」
「どうも。それじゃ、また後で来ますね」
男はそう言うと神社から去っていった。

「ほんとに逃げてんのかなあ…」
試しに代は母親に電話をかけてみた。

プルルルル　プルルルル
プルルルル　プルルルル
『お掛けになった電話番号は、電波の届かない…』
「…ほんとに逃げてんだ……」
代の心は暗くなった。

代はしばらく畳の上で寝転がっていたが、はっと気付いたように起き上がった。
「そう言えば私、昨日お風呂入ってない」

思えば昨日は必死だったので、それどころでは無かったのだ。手のひらやズボンの膝の部分にはまだ土汚れが付いていた。
「お風呂って……どこにあるんだろ？」
代は建物内を歩き回った。途中で気付いたのだが、この神社には、拝殿はおろか本殿すら無い。一体何を祀った神社なのだろうか？
「あ、あった」
適当に歩いていると、まるで宿のような脱衣所を見つけた。一気に二十人は入れそうな広さだ。奥の方に磨り硝子の引き戸を見つけた代は、早速開けてみることにした。
「わあ！広ーいっ！」
これまた一度に二十人は浸かれそうな湯船があった。
「この神社……一体どれだけ広いんだろ？」
不思議に思った代は、外にでてみることにした。

外は気持ちいいくらいに晴れていた。冬なのだが時折吹く風がまた冷たくて気持ちいい。境内はずいぶん広く、小さな夏祭りをやるには十分な広さだった。だが…
「ん～……おかしい…」
外から見る限り、建物は決して大きくはない。この狭い建物にあんな風呂と脱衣所があったとは思えない。
「これは……非科学的な力がこの建物に働いてるとしか思えないわっ！」
代は、そう言うオカルト的なものが大好きな少女だった。
「…にしても、気味悪い森だなぁ」
森は、神社を取り囲むようにあった。まだ昼にもなっていないと言うのに、森の中はまるで夜のように真っ暗だった。

神社の中に戻った代は、流石にこの汚れた服のままはいやだっ

たので、着れそうな着替えを探すことにした。
「巫女さんみたいな服とか無いのかな～？」
代は、実はそれを内心着てみたいと思っていたのだ。
「あっ……なんだ、たすきか…」
泥棒さながらの荒らし具合でタンスを漁っていた。すると玄関（お役人さんが朝居たところをそう呼ぶことにした）の方で、聞き覚えのある声がした。
「あ、お役人さんだ」
代は漁るのを止め、玄関に向かった。

「はい、これ」
役所の男はそう言って大きな紙袋を二つ、渡してきた。これがまた重い。
「これ……何入ってるんですか？」
片手で渡される袋を両手で受け取りながら、代はそう聞いた。すると男は
「ん～……何つーのかな……まあ、兎に角仕事着とでも言っておきましょうかね。そうそう。因みにここにいる間は朝も夜もそれ着て下さいね」
と言って、紙袋を指さした。
「あ…分かりました…」
代はそう返事をすると、ちょっと気になっていたことを聞いてみた。
「あの……」
「何ですか？」
「お名前、なんて言うんですか？」
「あれ？言いませんでしたっけ？」
どうやら男はすっかり名乗った気になっていたようだ。
「僕の名前は、大宮光貴と言います。以後よろしく」

二人はその後少し世間話をした。大宮はそれからしばらくしてから自分の職場へと帰っていった。
「さーて、何が入ってるのかな～♪」
代は大宮が帰ったのを確認すると、紙袋を居間（囲炉裏がある部屋をそう呼ぶことにした）に運ぶと、早速開けてみた。
「おおお～♪」
片方の袋には白い和服が、もう片方には朱色の袴が入っていた。それと手紙のような物も。
「手紙……違った。巫女さん服の着方か。どれどれ……えっ！普通の下着は駄目なんだ～…。ま、いっか」
服を畳んで、しまったりしているといつの間にか日が暮れかけていた。
「そう言えば、今日は朝から何にも食べてないなぁ……」
ぎゅるるる～
「お腹減った……」
生まれてこの方、代は料理など一切してこなかった代。やったと言えば、学校の調理実習だけだ。
「くーっ……こんな事になるならもっと料理の勉強しとけば良かった…」
代は居間の畳の上に大の字に寝転がった。天井板の年輪のが、だんだんバームクーヘンの断面にに見えてくる。その時
「まったく、今度の奴はヘタレなのね！その上女だし…」
誰かの声がして、代は飛び起きた。声からすると、代と大して歳は違わないだろう。
「誰か……居るんですか…？」

「居るんですか？じゃないわよ」
「うわぁっ！？」
背後からした声に代は驚いた。
「だ…誰でしゅか！？」
いけね！こんな時に噛んじゃったよ…
代はそう思ったが、視線を後ろにいた少女から離さなかった。
　少女の見た目は、ちょうど代と同じくらいだろう。見慣れない感じの着物を着ている。若干振り袖気味だ。
「だ…『誰でしゅか』って……。くーっ！あんた達がそう言う男を引きつけるような事を平気で言うから私は見向きもされなくなったのよ！」
うがーっ！、と言うように、頭を抱えながら少女はそう言った。何だか悔しそうだ。
「あー……今のは噛んだだけなんだけど…」
代がそう言い訳をした。
「か…噛んだ……？噛んだって言ったの？」
「まあ……一応は」
「ぐあーっ！そうやってお茶目な一面をさらけ出して男を引き寄せようっていう魂胆なんでしょ！許さんーっ！」
突然少女が飛びかかってきた。代はそれを

さっ

と、難なくよけた。代の動体視力はとても良いのだ。
　しかし、代がよけたせいなのか、少女が飛びかかってきたせいなのかは分からないが、さっきまで代は柱の前に立っていたのだ。
少女に特殊な能力でもない限り、柱に激突するのは免れない。

　代がそれに気づいたときには既に遅かった。

ゴンという鈍い、本当に鈍い音をたてて少女は柱に激突した。

＊＊＊＊＊＊＊

「……っ」

目を覚ますと、自分が布団に寝かされているのに気付く。

「うっ…」

起きあがろうとしたとき、頭に痛みがはしった。

「痛っ……」

パタンと布団に倒れ、頭に手をやる。

「……ん？」

頭には何かが巻いてあった。どうやら包帯のようだ。

「何か……あったのかな？」

頭を打ったせいで、記憶が混乱しているらしい。

「あ、気付いたんだ」

目の前に少女がやってきた。その顔を見て、だんだんさっきの出来事を思い出す。

「あっ！さっきはよくもよけたな！」

そう言ってつかみかかろうとしたら、少女に頭を抑えられた。

「こら。怪我人は寝てないと駄目だって」

そんな事、初めて聞いた。

「そう言えば、名前はなんて言うの？」

いきなりそう聞かれた。答えようか迷ったが、特に黙っておく理由もないので教えることにした。

「私の名前は、山神白っていうの」

「うそーっ！奇遇だね！私も代って言うんだよ。御社代。代理の代って書いて、しろ」

妙に馴れ馴れしいなぁ。……でも、女なのにこんなにしゃべってくれる人間は初めてだった。

＊＊＊＊＊＊＊

「山神かぁ……。良い苗字だね。何だか山の神様みたい」
代が冗談混じりにそう言った。すると白は
「そうだよ」
と言った。
「えっ？」
代は聞き返してしまった。
「だから、私はこの山の神様なの」
寝ている白の目は真剣だった。どうやら冗談では無いらしい。
「聞いたことあったけど……山の神様って、本当に女の子だったんだ」
「大体は、そうだね」
あった当初とは全く言葉の感じが違う。怪我をして弱っていると言葉のとげも取れるのだろうか？
「ねえ」
白が話しかけてきた。
「ん？」
「台所から何か聞こえるんだけど……」
それを聞いた代は、台所の方を振り返ってから
「あっ！忘れてた！」
と言って、駆けていった。
「…囲炉裏使えばいいのに」
白はそうつぶやいた。そのとたん、言いようのない眠気が白を襲った。

「焦げちった……」
代は土鍋の蓋を持ちながらそう言った。

どうやらお粥をつくろうとしていたらしい。
「……他に何か無いのかなぁ」
代はそうつぶやきながら冷蔵庫の中を漁った。

「あ！良いものみーつっけた！」
五分ほど冷蔵庫をがさがさやり、冷凍のうどんを発掘した。賞味期限は……今日だ。
「これぞまさに天の助けってやつね」
代は鍋に水を入れ、火にかけるとすぐにうどんを投入した。
「え～っと……このまま十五分ほど待つのね」
代は時計を見た。
今は七時半なので、四五分にタイマーをセットした。ちなみにタイマーはそこら辺にあった。居間に戻ると、白はぐっすりと眠っていた。
「……神様、か」
代は白の寝顔を見ながらそうつぶやいた。
その後代は、また台所に戻った。
料理初心者なので箸で突っついたりかき混ぜたりしないと気になって仕方ないのだ。

ぴぴぴぴぴーっ！

うどん引き上げの時間をタイマーが知らせる。
代は適当な箸を使ってうどんを二つの皿によそった。
「よっし！」
代は皿を両手に持つと、居間へと向かっていった。

居間に戻ると、白が布団から上体を起こしている途中だった。
「あ！まだ一応寝てなくちゃ」
代がそう言うと、白は
「大丈夫。もう治ったから」
と言うと、頭に巻いてあった包帯を解いた。
確かに、さっきまであったはずの傷口が無くなっている。
「すごっ！さすが神様」
代はそう言うと、箸とうどんの皿を白の脇に置いた。
「……これは？」
白は自分の脇にある皿を見ながらそう言った。
「これって……それは白の分のうどん」
代は当たり前のようにそう言った。
「白って……神様をいきなり呼び捨てすんの？」
「いいじゃん別に～。名前同じなんだし、外見は同い年位なんだからいいじゃん」
「外見は？」
「だって、神様なんだから実年齢はもう五百歳くらいでしょ？」
「……」
「それくらいしか違うとこ無いんだから、呼び捨てでもいいじゃん。背も同じくらいだし」
「胸は私の方があるわ」
白は代の胸を見ながらそう言った。
「……」
代はぐうの音もでない。確かに見た目で違いが分かる。白の方が大きいのだ。三、四倍ほど。
「……でも、今まで話してきた巫女さんの中で、代が一番一緒にいておもしろいよ（現時点では）。初対面なのに私にこんなに優しくしてくれたの、代が初めて」
白は囲炉裏の、小さな火を見ながらそう言った。
「……ありがとう。（現時点では）がなければもっと嬉しかったけ

ど」
代も、囲炉裏の、弱々しい、しかし優しげな炎を見つめながらそう言った。

「いただきまーす」
白は早速白が茹でたうどんを口へ運んだ。
「……固い」
白はそう言って代の方を向いた。
「え？そんなはずは…」
代もうどんを一口食べてみた。
「……不味い」
「一体どうやって茹でたの？」
白がそう聞く。
「お鍋火にかけ十五分」
「沸騰してから入れて、十五分じゃないの？」
「……そう言えば、そんな風に書いてあったかも…」
虚空を見つめながら、代はかじかじと端をかじっていた。

「御馳走様。あー不味かった」
白はそう言った。それを聞いた代が
「せっかく茹でてあげたんだから、少しは感謝しないの？」
と言うと
「別に私は茹でてくれとも何とも言ってません」
と返してきた。
「え？じゃあ寝言で『お腹すいた～……』って言ってたのは何だったのかな～？」
代が白の顔を見ながらそう言う。……もちろん嘘である。

「えっ…？」
しかし、それを聞いた白は顔を赤くして俯いてしまった。
「ねえ、何だったのかなぁ？」
代がさらにそう言う。すると
「私は寝ている間に一体なんて事をーっ！」
白はそう言って頭まで布団をかぶってしまった。
「（おもしろい！！）」
代は心の中でそう叫んだ。

「その話、誰にも言わないでください……」
暫くして、白がかぶっていた布団から頭だけを出してそう言った。
「え～…どうしようかな～？」
代はわざとらしく指を顎に当ててそう言った。
「お願いしますお姉さまーっ！」
白がそう言って抱きついてきた。
「しょうがないなあ。じゃあ、私に約束してくれるならいいよ」
「約束？」
「まず、トゲトゲ言葉を止めること。それと、私と仲良くすること」
「仲良く…？」
白は、そう言われるのも初めてだった。
今までの巫女さんとは皆仲が悪かったのだ。
「……いいの？」
白が代を見つめながら聞く。
「いいのって…何が？」
「その……仲良くして…」
「当たり前じゃん。人間だろうが神様だろうが男だろうが女だろうが、仲良くするのは当然の事よ」
代の言葉を聞いた瞬間、白の目から涙がこぼれ落ちた。

「あっ……私、何か悪いこと言った？」
少し焦った代がそう言って近寄ってくる。すると白は、代に抱きついてより一層激しく泣いた。

＊＊＊＊＊＊＊

何故だか涙が止まらない。
今までで、こんなのは初めてだった。

優しくて、おっちょこちょいで（現時点では）。
元来、白は山の神。女性とは上手くいかない体質なのだ。
今まで出会ってきた女の人とは、たった数分で皆険悪ムードになっていた。そのせいで失踪する人や、中には自殺してしまう人も居たのだ。

なのに……

御社代は違った。彼女だけは違ったのだ。他人とどこが違うのか、何が違うのかは分からない。
でも、違ったのだ。

嬉しかった。

＊＊＊＊＊＊＊

「泣き止んでよ～…。仮にも神様でしょ～？ほら、しっかり！」
代はとりあえずなだめていた。
と言うのも、こんなパターンは人生史上初だからである。

「ちょっとー……」

「あ〜…疲れた」
白はそう言って布団に寝転がった。どうやらもう泣き止んだようだ。
「ねえ、さっきまで何で泣いてたの？」
代が心配そうに白の顔をのぞき込む。
「別に。何でもいいでしょ。それよりさ、お風呂いかない？」
と、白はそう返した。
「え……まあ、いいけど、沸かしてないよ？」
代はそう言った。
「大丈夫。ほら、行こ」
白は立ち上がった。
「あ、今着替えとタオル用意するから待って」
代は紙袋を漁り始めた。

二人は廊下を並んで歩いている。
「あのさ…」
代が言葉を発した。
「ん？何？」
「この神社、昼より広くなってない？」
代はキョロキョロしながらそう言った。昼間より広くなっているのは一目瞭然だった。
「そりゃ、日の光が当たらなくなるんだから広くなるのは当たり前だよ」
白は特に何でもないように答えた。
「ほら。着いたわ」

「やっぱり…広くなってる」
戸を開けた代は、我慢できずにそう言ってしまった。
「まあまあ。風呂が広くて悪いってことは無いんだから、気にしない気にしない」
白がそう言う。白はすでに一糸纏っていなかった。
「脱ぐの早っ！」
代がそう言い終わった時、白はすでに風呂場への戸をあけていた。
「よっしゃあーっ！一番乗りぃー！」
そんな声が聞こえる。
「何だか……楽しそうだなぁ」
代がそうつぶやいた途端
「ふわぁっ！？」
「あれ、こけた？」
代が風呂場に行くと、白は床から立ち上がろうとしている所だった。
「痛ぇー……あ、代！遅い！」
白はそう言った。ふつうの声なのだが響いて大きく聞こえる。
「白が早いんだって」
「そう？」
「うん」
「へー……自分じゃさっぱり分からないなぁ」
「他の人からも言われたりしなかったの？」
「他の人って……私が人間の女と一緒にお風呂入るの、今日が初めてだからわかんない」
「……そうだったんだ…じゃあ、男の人とは？」
「それはしょっちゅう」
「えーーっ！？」
「嘘～ん」

白は悪戯っぽく笑った。どう見てもこの山の神様とは思えない。
二人はささっと体を流すと湯船につかった。冬なので、少し熱いくらいがとても気持ちいい。
「あのさ」
と代。
「さっきから質問が多いなぁ」
白は代の話をぶったぎった。
「何でそうわかるの？」
「あのさ、がついたらほとんど質問じゃん（代の場合は）」
「……（代の場合は）がついたせいで、私が何だか単純馬鹿みたいに聞こえるんだけど…」
「じゃあ、あのさ、で始める言葉、他にある？」
そう言われた代は、しばらく考えてから
「あのさかなは美味しそうだね、とか？」
と言った。白は
「何か飢えてるなあ…」
と苦笑いした。

「で、本題なんだけど、何でお風呂こんなに大きいの？」
代がそう言った。
「そりゃ、みんなが使うからよ」
やはり白は当たり前だというように答えた。
「多分、もうそろそろしたらみんな来るんじゃないかな」
白は格子窓（ガラスは無い）から外を見た。

しばらくすると、脱衣所の方が騒がしくなってきた。いろんな人の声が聞こえる。
「あ……何だか今、男の人の声が聞こえたようなきが……」

代は不安そうに白の顔を見た。白は何ともないようにしている。
「まあまあ。どうせ人間は代だけなんだから、気にしない気にしない」
白はそういって手をひらひらさせた。

そうこうしているうちに、ついに風呂場に誰かが入ってきた。
「！？」
代は開いた口がふさがらなかった。
入ってきたのはなんと…
「よう、山神よう」
狸人間（！？）だった。後ろには猿人間と狐人間がいた。
「あ、銀次さん！昨日は何で来なかったの？」
白はそう話しかけていた。
「ああ、昨日は仲間と呑んでてな」
猿人間がそう答えた。
「ときに、隣の人間のお嬢ちゃんは？」
銀次がそう話しかけてきた。白は
「ああ、この子は今日から『代わり人』になった御社代。みんな仲良くしてやってね」
と説明した。
「で、あっちにいるのが、右から狸さん、銀次さん、幽司さん」
白は代にそう説明した。
「あ……はじめまして」
代は三人に頭を下げた。どうやら、狸人間が狸、猿人間が銀次、狐人間が幽司さんのようだ。

「あっはっはっは！そうかそうか。そりゃ悪いことしたのう」
幽司が大笑いしながらそう言った。

「ありゃわしだ。…にしても、まさか代ちゃんを追っかけてたとはなぁ」
「ほんっと、びっくりしたんですよ！？」
代はもう打ち解けたようだ。普通に話している。
「すまんすまん。森のくまさんという話を知っとるか？」
話題が突然変わった。
「幽司さん、それ前にも聞いた～」
白が少し笑いながら言う。
「山神が聞いとっても、代ちゃんが聞いとらんじゃろ。……この山にはな、熊さんっつー妖怪熊が居るんじゃ。ある日な、熊さんが山ん中歩いとったらな、真っ白い服着たお嬢さんが、向こうの方におったんじゃ」
代は真剣に聞いていたが、他三人はすでに笑っていた。思い出し笑いだろう。
「でな？たまたま熊さんの目の前に白玉の耳飾りが落ちとったんじゃ。熊さんは、それが白服のおなごのもんじゃと思うてな、追っかけたんじゃ。そしたら、そのおなごがそれに気づいてな、走って逃げてくん。それが速い速い。このままじゃ追いつけんと思た熊さんはな、話にあるとおりに『お嬢さん、お待ちなさい。ちょっと、落とし物！』と、叫んだそうな。そしたらおなごがこっち向いたらしいんじゃが、そのおなごの顔が真っ黒に膨れ上がっとってな。つまり、おなごは自殺したもんの幽霊やったんやなあ。熊さん仰天して、しっぽ巻いて逃げ出したんじゃとさ」
代にはいまいちおもしろさがわからなかったが、他三人は大笑い。白などは水面を叩いて大笑いしていた。
「それからと言うもの、熊さんは人を見る度に逃げ出しちまうようになったんでぃ」
幽司はとても楽しそうに話していた。いつの間にか風呂には酒瓶の乗ったお盆が浮いている。

「話は変わるんですが、何で酒瓶が？」
代が首を傾げる。
「酒は風呂で呑むのが一番ダカラ～」
化け狸はそう言うと一番に酒瓶を手に取った。
「ちょっと～、たまにはお酒控えたら？」
白がそう言って狸から酒瓶をひったくろうとした。狸はひょいと瓶を動かし
「自分が飲みてぇからってそう言うのは止めい」
と言った。
「（なんだか、普通の人間の会話みたい）」
代はそう思った。
「お、そうだ。就任祝いに、代ちゃん。一杯どうかな？」
狸はそう言って代に酒の入ったコップを手渡した。
「あ……じゃあ、一杯だけ」
断るのも悪いと思った代は、一応飲むことにした。ちなみに彼女は未成年だが。
「ちょびっと強いかもしれないけどね」
白が笑いながらそう言った。
とにかく、飲まないことには始まらない。
「……いただきます」
「ぐっといけ、ぐっと」
幽司がそういう。
コップを傾け、酒を口に流し込む。すると、頭がかなりクラクラした。
「…やっぱ、人間には強すぎたか」
その言葉を理解する間もなく、代はお湯の中に沈んでいった。

「うぅ……頭痛い」

代はさっきまで白が寝ていた布団に寝かされていた。衣類はきちんと身につけている。
「まさか、人間にとってあれほどあの酒が強いとは思わなかったよ」
白が液体の入ったコップを渡してきた。
「これは……？」
またお酒？という目で代が見つめてくる。
「今度はただの水。ほら、飲んで」
代は、言われた通りにそれを飲んだ。味はしないのだが、頭がまたくらくらする。
「『水』って言うお酒なんだけどね」
白はにやにやしながら代を見下ろしていた。
代はまた意識が遠のいていった。

「ふう……。こんな悪戯するのも久しぶりだわ」
白がそうつぶやいて、立ち上がろうとしたとき

がしっ

と、足首を何かに掴まれた。
「ん？」
足元を見ると、手があった。手は布団から延びている。
「まさか……！？」
そう言ったとき、足をものすごい力で引っ張られ、白は畳にたたきつけられた。
「…っ……！！」
倒れている白の目の前には、気絶したはずの代が立っていた。目が虚ろになっているので、自分の意識はないのだろう。手にはそこら辺にあった。一メートル物差しを持っている。
「あ……あ……」

白は恐怖で言葉がでなかった。
「（まさか、こんな風になるなんて！）」
白がそう思っていると、突如代が持っていた物差しを振り下ろしてきた。
「うわぁぁぁっ！」
白の叫びが山にある森に響きわたった。

「どうやら、飲ませちまったようだな」
狸が焚き火に当たりながらそうつぶやいた。
「どうやら、そうみてぇだな」
銀次が返事をする。
「ま、たまにはこういうのもいいんでないですか？」
幽司が神社の方を見ながらそう言った。

どたばた就任！（後書き）

アサユウ

カァー　カァー

「……ん？」
代わり人、御社代はカラスの鳴き声で目を覚ました。
「ったく、朝っぱらからカラスが鳴くのか、ここは」
眠い目をこする。すると、ふと自分が畳で寝ていたことに気づく。
「…ありー？確か昨日は布団で……」
周りを見回すと、近くに昨日知り合った神様、山神白が倒れていた。
体中痣と擦り傷だらけだ。
「白！どうしたの！？大丈夫！？」
代は白を強く揺すった。
「うう……」
気がついた白は、まだ虚ろな目で代の顔をみた。そして
「うわぁっ！」
と叫んだかと思うと、向こうに敷きっぱなしになっていた布団に潜り込んでしまった。
「ど、どうしたの？」
代が心配して近づくと
「ごめんなさいごめんなさい」
と言う声が聞こえる。どうやら、何かに怯えているようだ。
代は布団の脇にしゃがみ込むと
「どうしたの？」
と、優しく問いかけた。

しばらくすると、布団にくるまっていた少女は恐る恐る布団から出てきた。
「代……なの？」

突然質問された。
「そうだけど……どしたの？記憶喪失？」
「あぁ……よかった」
白はそういうとバタッと倒れてそのまま眠ってしまった。
「何が何やら……」
代はそうつぶやいて立ち上がった。早速朝食の支度をしなければならないからだ。

「さて、何にしようかな。……と言うか、何があるんだろ…」
台所に向かおうとして、代は一歩前に踏み出した。足は、畳ではなく何か筒のような物を踏みつけた。
「……何これ？」
踏んだのはどうやら瓶のようだ。ラベルは「水」となっている。
「これ……昨日の！」
代は眠っている白をにらんだ。そう言えば、白は何であんなに傷だらけなんだろうか。昨日、あの部屋にいたのは二人だけ。そして今朝の白の怯えよう。
「……」
代は瓶のラベルを読んだ。

「水」は、お酒です。このお酒は効き目が強いので、一日に飲む量は一合までにしてください命に関わります。
尚、人間には絶対に飲ませないでください。暴れ回る危険性があります。

「白の傷を作ったのは私だったか」

代は少し申し訳なくなった。が
「うどん……固い…」
という、白の寝言を聞いた途端そんな気も失せた。
「ギャグが少ない……」
「寝言の割に痛いとこ突いてくるなぁ……ホントに寝てんのかな？」
代はそっと白に近付いた。そして、ほっぺたをつねろうとした時
「ごめーんくーださーい」
大宮の声がした。
「はっ！光貴だ！」
白ははっと起きると、その場でくるっと一回転した。
すると、不思議なことにさっきまであった痣やら擦り傷やらがきれいになくなった。
「うおっ……すごっ」
代は驚いて目を丸くした。そんな代の手を取り、白は
「ほら、急いで急いで！」
と急かした。代は立ち上がると白に引っ張られるように廊下を移動した。
「（急ぐんなら、先に行けばいいのに……）」
代は心の中でそう思っていた。

「おお！山神と代わり女が一緒にいるなんて！……こりゃ、明日は雪かな？」
二人を見た大宮は戸の外に広がる快晴の空を見た。
「あ、山神。これお土産」
大宮は大きな紙袋を白に渡した。
「……これって、もしかして？」
白は目を爛々と輝かせている。
「その通り。ひよっこさ」
ひよっこ、とは、ひよこの形のお饅頭である。

「やったー！」
白はひよっこを持ってどこかに行ってしまった。大方一人で食べるつもりなのだろう。
「……で、代ちゃん、ちょっと良いかな？」
そう言うと大宮は境内に出て行った。ついて来いと言う意味なのだろうと解釈した代も、後に続いて境内に出た。

「それにしても、代ち」
「この間までは敬語だったのに、いきなり変わりましたね」
代がそう言って大宮の話を乗っ取った。
「あ～……」
大宮はしばらく考えてから
「あの時はまだ受けてもらえるか分からなかったから、慎重にしてたんだ」
と言った。どうやら、先に代からの話を片づけた方が得策だと思ったようだ。
「え……でも、昨日は強制だって…」
代は少し戸惑った。
「ああ、あれね。あれは嘘」
「嘘ォーっ！？」
「でもまあ、自分でやるって言ったんだから」
「……」
「で、話は変わるけど」
大宮は本題に入った。

「君はどうやら山神と上手くいってるようだね」
大宮は空を見ている。代は空を見ている大宮のことを見ていた。
「彼女から、なんか聞いたりした？巫女さんの話とか」
それに代は
「ああ……何か、今までの女の人とは上手くいってなかったみたい

です」
と答えた。
「ふ～ん……。それ、何でだかわかる？」
「……あの性格だから？」
「昔、山には女の人は行ってはいけなかったんだよ」
「あ、知ってますそれ。確か女の人が居ると嫉妬しちゃうとか」
「分かってるじゃん」
「分かってるって……上手くいってなかった理由、ですか？」
「そ。……じゃあ、何で自分は大丈夫なのか分かる？」
「……さあ」
代はそう言って首を傾げた。大宮は、適当に拾ってきた木の棒で、境内の土の部分に字を書き始めた。

「これ……私の名前」
地面には『御社代』と書かれていた。
「みやしろのしろ。多分これのおかげで上手くいってるんだと、僕は思う」
大宮は真剣な表情でそう言った。
「字には力があるって、知ってる？それが、今の円滑（に見える）な状態を創り出しているんだと思うよ」
「それにしては、一人でひよっこもってっちゃったけど……」
代は本殿をみながらそう言った。すると大宮は
「そりゃ仕方ないよ。生贄の方が大事だもの」
と言った。
「い…生贄！？じゃああの中には本物のひよ……」
「いやいや。あれはただのお菓子、代用品。生き物を象ったものなら代用品になるんだ。食べたら分かるけど、饅頭とかひよっこには皮があって、その中に色々入ってるでしょ？」「ははあ、皮と身って言うとこは同じだから、生贄の変わりになると」
「まあ、そんな感じ。じゃ、戻ろう。ノロノロしてると全部喰われ

ちゃうよ」
そう言って大宮は代の背中を押した。

二人が居間に着くと、ちゃぶ台の前で白が座って待っていた。ご丁寧なことにお茶まで入れてくれたようだ。神様のくせに妙に人間臭いな。
「早く食べよっ」
白がそう言った。二人は適当に座った。
「じゃ、頂きま～す」
大宮がお茶を飲み始めた。
「ん～……このお茶美味しい」
このほうじ茶は白がいれたものだ。
「でしょ～。毎年出雲でこれやらされてるから、もうお手のものになっちゃった」
白はニコッと笑ってそう言った。
「毎年出雲って……？」
代が不思議そうに聞く。それを聞いた白は
「代。十月って、なんて言う？」
とヒントを出した。
「えーと……神無月。あ、そーか」
代はどうやら納得したようだ。

「……さて、お茶もごちそうになったことだし、そろそろ役場に帰るよ」
大宮はそう言って立ち上がった。
「えーっ……もっとゆっくりしてけばいいのに～」
白がそう言う。
「仕事残ってるから。またお茶ごちそうになりに来るよ」

三人は玄関に移動した。
「そんな大したことじゃないから見送りなんていいのに」
大宮が苦笑する。
「いいじゃんいいじゃん。気にしない気にしない」
白は何だかテンションが高い。男好きだからか？
「あ、そうだ。大宮さん。……さっきの名前の意味って……」
代が思い出したように言った。
「ああ、あれね。あれは噛み砕いて言うと『神社の代わり』って事。じゃ」
大宮はそう言うと足早に神社の敷地から出て行った。
それを見た代が
「何であんなに急いでんだろ？」
とつぶやくと、それを聞いた白が
「ああ、前に強引に泊めたことがあって、それからなんか急ぎ足になっちゃった」
と言った。
「何とまあ積極的……いやいや、何でもない」
代は居間に戻った。

「寒い」
辺りはすっかり暗やみに包まれ、向こうの山の空は茜色に染まっていた。
「まったく、何でこんなに寒いの…」
白はこたつの中でぶつぶつ言っている。ちなみに代は食材の買い出しに行った。
「こたつのくせに全然暖まらないなあ……壊れてんのかな？」
白はこたつをしきりに叩いていた。もちろん、彼女にはこたつから

延びるコンセントなど見えていない。
「全く、かがくってのに頼りすぎるから最近は逆に不便なのよ！あ～寒っ」
いやいや、君が分かってないだけだから！

その頃代は、少し離れた（徒歩で３０分くらい）麓のスーパーにいた。
「人参は……」
代は人参売場の前で立ち止まっている。すると突然、知らないオバチャンに話しかけられた。
「あら、ほんとに交代したのね！」
オバチャンは馴れ馴れしかった。
「まっさかほんとに代わり人やるなんて、お嬢ちゃんも変わり者ねー……。まあでも若いんだから頑張ってね！」
オバチャンは言いたいことを言い尽くしたのか、代から離れていった。

「……何で分かったんだろ？」
代は首を傾げた。
「こんな服着てるからかな？でも、コスプレとかって可能性もあるのになぁ…」
代はやはり首を傾げていた。しかしながら、普通秋〇原でもない地方のスーパーでそんな格好する人いないから（多分）！
「これで大体……あ、やべ、肉忘れてた」
代はこれからまた肉売り場の前で、二十分考えることになった（広告の品とか、らしい）。
「こっちの方が安……くないか…」

白は電源の入っていないこたつで寝ていた。何だかもうどうでも良いようだ。
外はもうすっかり暗くなっていた。空からは粉雪が降り始めた。

「あ～……まさかほんとに降っちゃったよ…」
大宮は役場の窓から空を見ていた。
「こら、大宮君！さぼらない！」
大宮はある女性（上司か？）に怒られた。
「へーへーやりゃいいんでしょ」
大宮はそう言って渋々机に向かった。
「お前はガキか！」
上司がそう言うのを大宮は耳をふさいで受け流した。

キィィン
自動ドアが開いて、スーパーから代が出てきた。手には買い物袋（神社からエコバッグ持参）。
「うわ、さびぃ……」
代の赤いマフラーが寒風でたなびいた。
「さっさと帰んないと……。白多分凍っちゃうだろうな…」
そう。白は今まで色々（料理やら洗濯やら暖房器具やら）代わり人に任せっきりだったらしい。そんな人が（神様だけど）あの科学技術の結晶、電気こたつを使えるはずがない。
「どーせ風呂にでも入って、暖かくしてんだろーなー…。いいなー…」
代は歩きながらそうぼやいていた。

御社代には千里眼でもあるのか、山神は湯船につかっていた。
「あったかー……いんだけれども…」
白は大変なことに気づいた。
この風呂場は格子戸がある。つまり、風呂と外が隔離されていないため、外の凍えるような寒気が風呂に入ってきているのだ。例えるなら冬場の露天風呂といったところだろうか。
「あがるのがつらいんなら、春まで待てば？」
河童が湯船の中を泳ぎながら言った。
「もう、そんな適当なこと言わないでよ～。私は河童さんたちと違って一年中冷水で暮らしてるわけじゃないんだから」
白は風呂の電球を見ながらそう言った。

アサユウ（後書き）

やっと1．7話まで完成！
次は2．5話まで行こうかななんて思ってたり。

温かい目で見てやってください（^__^；）

カレー、そして首

代は買い物袋片手に雪降る夜道を一人、歩いていた。
「そう言えば……何であの山に迷い込んだんだろ？」
自分では覚えていないのだろうか？
「まあいいや」
いいのか。
代は神社を目指して歩いていた。
少し歩くと、見知った顔が向こうからやってきた。
「あ、狸さんこんばんは」
代がそう言うと狸は
「おや、奇遇だね」
と驚いたように言った。
「こんな時間にどうしたんですか？」
二人（？）は並んで神社に向かって歩いていた。
「いや、ちょっと酒を買いにね…」
狸はそう答えた。しかし今狸は神社に戻るように歩いている。
「でもまあ、今日はいいんだ。それより、代わり人を神社に返す事の方が重要だからなぁ」　　狸はそう言った。
「返すって……来た道くらい分かりますよ？」
代はそう言って辺りを見回した。見覚えは……無かった。
「あら？」
代は辺りをキョロキョロした。しかし、やはり見覚えはなかった。
「見覚え無いじゃろ。こんな時間になるとな、妖怪に化かされるのはよくあることじゃ。……ところで」
狸は代の顔を見た。
「代ちゃんは何でわしらが見えるんで？」
代は少し考えた。
「さあ……」

が、答えは結局こうだった。
「もしかしたら……代ちゃんは妖視ができるのかもなぁ」
狸はそう言った。
「なあ、今までに妖怪とか、見たことあるか？」
「さあ……多分無いかと」
「じゃあ幽霊」
「それならちょっとだけ」
「やっぱり、代ちゃんは妖視する力があんのやな。妖視する代、略して『妖しろ』ってとこか。ハハハハハハハハ」
狸さんの笑いはうるさかった。

その後、世間話やらをしているうちに、神社に続く階段の前に着いた。
「じゃ、わしはこれで。頑張りや、妖しろ」
狸は森へと消えていった。
「……何か、変なあだ名付けられた気がする」
代は少し立ち止まっていたが、寒かったのでさっさと神社に戻ることにした。
階段を登り切った先には、石造りの大きな鳥居がある。そこには『白山神社』と掛かれた板がかけられている。
「へ～……。白山神社って言うんだ」
代は神社の名前を今まで知らなかった。と言うのも、きちんと神社の敷地に足を踏み入れるのはこれが初めてだからである。
「……ってことは、ここは白山っていうんだ…」
代は気付いた。白の名前はここから来ているのか。

「ただいま～」
「おかえり～」
居間から白の声がする。

「あら、こたつの使い方分かったんだ…」
代は驚いた。
居間に行くと、白はこたつで震えていた。髪が濡れていたのでどうやら先に風呂に入ったようだ。
「このこたつ壊れてんじゃないの～？」
と白。それに対して代は無言でこたつのコンセントを差してスイッチをいれた。
三分ほどして
「おお……おおおお！」
どうやら暖かくなってきたようだ。
「こりゃぁ便利！さっすが、かがくってのは凄いねぇ」
白は何だか上機嫌だ。が、こたつには恐ろしい欠点があるのだ。

それは、こたつ中毒である。

説明しよう！
こたつ中毒とは、入ったこたつから抜け出せなくなることである（物理的に、ではない）。

こたつ中毒を心配した代は
「あ、気をつけて。こたつに長く入ってると足焼けちゃうからね」
と言っておいた。白は
「はいはい」
とだけ返事をした。
「それよりさ」
と代。
「ん？」
白はそう反応した。
「夕食作るの手伝って」
「ん？ああ、別にいいよ」

白は意外な返事をした。絶対に手伝わないと思っていたのに。

「じゃあ、玉ねぎを縦に切って」
代がカレーの箱の裏を見ながらそう言った。
どうやら夕飯はカレーのようだ。まあ、カレーの箱を見ながらカレー以外の物を作るというのはあまりないのだが。
「えーっ…ヤダよ。だって玉ねぎって切ったら『目がァーッ！』ってなるんでしょ？」
白はそう言って目を押さえた。
「あはは～。そんなにはならないよ～」
「じゃあ代がやって」
結局、代がタマネギを切ることになった。

「むむ……難しい」
白がジャガイモの皮を剥いていた。皮むき機を使っているので楽なはずなのだが。
「しっかりやってね」
そう言う代の包丁さばきも危なっかしい。切った玉ねぎの大きさがいびつすぎる。
「あっ……」
突然代の包丁が止まった。
「どしたの？指でも切った？」
白が心配そうに代をみた。代の目には涙がうかんでいた。
「代……いったい」
「うがあぁぁぁ！目がァーッ！」
代はそう叫んでどこかへ行ってしまった。
「……玉ねぎって、怖いねぇ」
白が切り刻まれた玉ねぎの山を見ながらそう言った。

にしてもカレーなのに玉ねぎ切り刻むって……ドライカレーじゃあるまいし。

五分ほどして、やっと代が帰ってきた。
「これは泣けるよ」
代はそう言った。
「後は、人参だけだよ」
白はそう言って人参を渡した。
「え？」
代は少し戸惑った。
「私がやるの？」
「そ。その間に私玉ねぎ炒めちゃうから」
「炒めるって……できるの？」
「炒めることなら、前にいた代わり人に教えてもらった」
「切るのは？」
「教えてもらってないよ」
「何で第二段階（炒める）は教わって第一段階（切る）は教えてもらってないの？」
「さあ……」
二人の妙な会話はこれから少しの間続くことになる。

「お、何だかいい感じになってきましたよ」
白がそう言った。台所中にはカレーの匂いが漂っている。
「ん～……いいんじゃないかな？」
と代。
「意外と簡単だったね」
白は笑顔でそう言った。

「玉ねぎさえなければね」
代は苦笑いしながら言った。
「……よし、完成！」
そしてついに、カレーが完成したのである。

二人は居間に移った。
「それでは……いただきまーす！」
二人は早速カレーを口にした。
それとほぼ同時に二人の表情が険しくなった。
「この人参……固い。何か生で食べてる感じ」
代がそう言った。
「一体何分煮込んだの？」
その後、代には思いがけない返事が来た。
「え？煮込むって、なに？」

「アハハハハ！何、そんな事が昨日あったわけか」
大宮は大笑いした。
「あの時はほんとにびっくりしましたよ」
代は呆れ顔でそう言った。
「で、その張本人は？」
「あそこに」
代は居間の隅を指さした。そこには、白が足を抱えて壁を向いて座っている姿があった。白のまわりの空間が黒く変色している。
「うわっ！……ぜんぜん気づかなかった」
大宮は驚いていた。

「なんか、昨日の晩からあんな感じなんですよ…。話しかけても『うん……』しか言わないし」
代は白を心配そうに見ながらそう言った。
「こりゃ、相当きてるな…」
大宮はそう言うと鞄からひよっこを取り出した。
「こう言うときは甘いもので釣るのが一番」
そう言うと、白のそばまで歩いていき、ひよっこを手渡した。
「ほら、これで元気出せよ」
「……ありがと」
白は小さくそう言うとひよっこを受け取った。

それから少しすると、白のまわりの黒くゆがんだ空間が普通に戻った。そして白は立ち上がり、くるっと半回転してこちらを向くと
「ふう。やっぱ落ち込んでるときには甘いものが一番ね！」
満面の笑顔でそう言った。
「……うわぁ、単純」
代がそうつぶやいた。
「なんか言った？」
白は代をギロッと睨んだ。どうやら聞こえていたらしい。
「あ、いや、何でも」
「単純な奴だって言ってたよ」
大宮がそう言った。
「ちょ、大宮さん！」
代はあわあわと慌てた。
「ハハハハハハ。面白いね。いい風景だよ。実に微笑ましいね～」
しかし、大宮はとても嬉しそうだった。
代は不思議な気持ちで大宮を見ていた。すると突然
「代っ！覚悟！」
「え？」
振り向いた代の顔に白の回し蹴りが直撃した。

代はそのまま畳に倒れこんだ。
「……いくら何でも、やり過ぎじゃないの？」
大宮が気絶した代を覗き込みながらそう言った。
「う…うん……。もしかして、死んじゃった？」
白が何だか後味悪そうにそう言った。激しく瞬きしている。どうやら動揺しているようだ。
「多分、生きてはいると思うけど……。お～い、代ちゃ～ん」
大宮は代の頬を軽く叩いた。代は起きない。
「……ま、とにかく寝かせとこう。山神、布団しいて」
「う、うん…」
白は直ぐに言われたとおりに布団を敷き、代を寝かせた。
「もしかしたら、首の骨おれてるかもな……」
大宮が真剣な表情でそう言った。
「えっ！」
白は少し叫んでしまった。かなり驚いたようだ。
「嘘。折れてるわけ無いでしょ」
そう言うと大宮はクククと怪しく笑った。
それを見た白は
「大宮さん……何だか怖い」
といった。

「んん……」
代は目を覚ました。何だか目を覚ますのは本日二度目でございますみたいな気がする。
額には濡らした雑巾……雑巾！？…違った、濡らした布がおいてある。
代が起きあがろうとしたとき
「うっ……！」
首に鋭い痛みがはしった。

「あぁ……痛って～」
代はまたゆっくりと横になった。
「うううう…白の奴……」
「あ、起きた！良かったー死んだかと思ったよ」
どこからともなく白がやってきた。噂をすれば何とやらってやつか？
「下手したら死んでたよ」
代は苦笑いでそう言った。
「とにかく、今お医者さん呼んだから」
白はそう言った。
「医者って……まさか妖怪の？」
「人間の！里見先生っていうの」
「ふーん……。あ、そう言えば大宮さんは？」
「里見先生を迎えに行った。車で。……首、大丈夫？」
白が心配そうに言った。
「いや……残念ながら大丈夫じゃないみたい…」
代は冗談抜きで言った。
「これで歩けなくなったりしたらどうしよう」
代がそう言うと、白は
「まあ、何かあったらちゃんと埋めてあげるから心配しないで」
と、純粋な笑顔で言った。
「まあでも、もうそろそろ先生来るはずだから心配しないで」

「ほら、急げこの藪医者！」
「なによ！来てやってるんだから少しは感謝しなさい！」
玄関の方でそんな言葉が聞こえる。代は心配になった。
「（なんか……逆に殺されそうな気がする）」
代は真剣にそう思った。
ドタドタ足音が聞こえる。
「あ、彼女がそう？」

女性の声がした。
「こんにちは。お嬢さん。私は里見律子よ。これからよろしくね」
黒い、ストレートの長髪、適当な服の上から羽織った白衣が印象的な女性が代の顔をのぞき込んだ。美人である。白が嫉妬しそうなくらいに。
だが、代は心配になった。医者の腕と美しさは関係ないのだ。それにさっき、藪医者って呼ばれてたし。

カレー、そして首（後書き）

今回は急いだからあんま面白くなかった。

反省反省。

次回からは気をつけます。

と言っても、何を気をつけるんだか（笑）

お首様（イ）

「話は一通り聞いたわ。あなた、回し蹴り喰らったらしいわね」
里見先生はそう言った。
「私だったら一発でしとめるのに……」
「え？」
代は何を言ったのか分からず聞き返した。
「あ、いやいや、何でもないわ。それじゃ、聞くけど首はどんな風に痛いの？」
「えっと……何というか、首を動かしたら痛いですね」
代はそう答えた。里見先生はそれを聞いて
「はは～ん。それでさっきから目だけしかこっち向いてなかったわけだ。それにしても可哀想だね～あんなに雪積もってるのに」
と、境内の方を見ながらそう言った。
「えっ？雪つもってるのにどうやって車で？」
代は驚いたような目でそう言った。それを聞いた大宮は
「ハハハ。道路に積もった雪をそのまま放っておく人はここら辺にはいないよ。ちゃーんと、雪かきしてあった」
と答えた。その時、遠くから聞こえるお寺の鐘がお昼を伝えた。
「あ、いかん。もうこんな時間か。じゃ、俺はこれから部署対抗雪合戦があるから、これで失礼するよ」
大宮はそう言うと急いで玄関に向かった。
「あ、ちょっと！私はどうやって帰ればいいのよ！」
里見先生が慌てたように聞いた。
「車置いとくから後で役場に来い！送ってやる！」
向こうの方で、そんな声が小さく聞こえた。

「……里見先生って、足が悪かったりします？」
代がそう聞く。

「……どうして？」
里見先生はそう聞き返した。
「さっき廊下を歩いてくるとき、ドタドタって音とドッタドッタって音がしたから…」
「……あなた、洞察力が凄いわね。医者向きよ」
里見先生はそう言った。
「私ね、十六歳の時に交通事故に巻き込まれてね、左足を悪くしたの…」
「それで、まあ歩けるまでに治してくれたお医者さんに感動し、自分もお医者さんになった、と」
代はそう口を挟んだ。
「あなた……読心術でもできるの？」
里見先生は少し気味を悪くした。
「多分お首様が憑いてるのよ」
どこからともなく白が現れた。
「お首様…？何それ」
里見先生は首を傾げた。
「そんくらい名前で察しなさいよ」
白はツンツンしている。やはり、女性は嫌いなようだ。
「お首様って、何？」
代は白に聞こえるように聞いてみた。すると
「お首様ってのは、首塚の周りに怨念とかが集まってできる悪霊のことよ」
白は誇らしげに答えてくれた。
「へ～」
と納得の里見先生。
「あんたに話した訳じゃないわよ」
白はやはり冷たい。ツンデレみたいになってきたな…。
「多分蹴られて気絶してる間に寄ってきたのね…」

白は一人で納得していた。
代が
「取り憑かれてるなら、早くとってほしい」
と言うと、白は
「分かった」
と言ってどこかに行ってしまった。

しばらくして、白が戻ってきた。手には何故か小豆の入った袋がある。
「じゃあ、祓うから目瞑っててて。ちょっと痛いけど我慢してね」
白はそう言うと小豆を一掴みして
「うりゃっ」
代に向かって投げた。
「痛っ」
「とりゃっ」
「痛いって」
「うりゃぁぁぁぁ！喰らえ！小豆アターーック！」
「あ痛っ！何だよ今の！必殺技！？」
代の顔やら首やらには小豆の当たった痕が残っていた。
「よし。もう目開けていいよ。お祓いは一応終わったから」
白は投げた小豆を拾い始めた。
「え？一応ってどういうこと？」
目を開けると代は白の方を向いてそう言った。その時
「あ、首治った」
と気がついた。

一時間後、小豆を全部拾い終えた白は代の目の前にやってきた。ちなみに里見先生は縁側で昼寝をしている。
「さっき、どうして一応なのかって聞いてたっけ？」
白はそう聞いてきた。

「うん」
と代。
「一応ってのは、祓いきれなかったからよ」
「……？」
「どうやら今回のお首様は大層代のこと、気に入ったみたいね。ぜんぜん離れようともしないもの。ほら、今も代の肩の後ろに」
「そう言うのやめて！」
「フフフッ。流石に方の後ろに…は嘘よ。でもそれまでは本当」

白は急にまじめな顔つきになった。
「え……じゃあ私は一体どうなるの…？」
代の顔が急に心配そうな顔つきになった。
「下手すりゃ死ぬわ。でも、上手く共存してけば何とかなるかも」
「……例えば？」
「例えば……そうね。代の中にお首様を取り込むとか」
白は指で宙にくるくると何か書き始めた。
「と……取り込むとどうなるの？」
代はやはり不安なようだ。
「外見的には変わらないけど、お首様によっては体を乗っ取られるかもしれない」
「ののの……乗っ取られるの！？」
「取り込むってのはそういう事よ」
「じゃあ……もし乗っ取られなかったら？」
「うーん……よくわからないけど、多分お首様の力を貰えるんじゃないかしら？」
代は悩んだ。このまま死ぬのは何か嫌だが体を乗っ取られると言うのも嫌だ。だが、うまく行けば特殊能力、エスパー的な何かが身につくかもしれない。
「んー……」
代がそう唸っていると白は
「まあとにかく、天狗の奴にでも聞いてみようかしら？」

と言った。
「天狗なら私みたことあるけど」
突如里見先生が口を挟んできた。
「うわっ！いつの間に起きてたんですか！？」
代は驚いていた。少しオーバーだな。
「天狗ってアレでしょ？羽生えてて狐のお面してるやつ」
「狐のお面……」
それは違うだろ、と代は思った。その時
「あら、あなた純人間のくせに天狗の奴に会ったことあるのね」
白がそう言った。
「えー！？天狗なのに狐のお面してるの！？」
代はそう言った。
「あれ？狸さんたちに天狗の話聞いてなかった？」
「いえ、全く」
代は首を横に振った。その時

グキッ

「あうっ！」
代はまた布団にパタンと倒れた。
「代ちゃんどうかしたの！？まさかまたそのお首様って奴に？」
里見先生がそう聞くと
「違うわね。今のは単に変な風に首を振ったから痛めたのよ」
と、白が答えた。

お首様（ロ）

白は玄関にあった誰かの長靴（以前の代わり人が置いていったらしい）を履くと、雪が十センチほど積もっている境内に出た。
白は山の頂上を見ると
「山嵐ーっ！！」
と叫んだ。すると、山の頂上から強い風が吹き下ろしてきた。風は境内のまわりの木の枝を揺らし、残っていた葉を全てさらっていった。
「あっ！」
白がしていた（代の）マフラーも、木の葉と一緒に飛んでいった。

「徒歩で参上、山嵐～」
しばらくしてから、そう言って天狗が境内に現れた。頭には狐のお面。
「山嵐のせいで赤いマフラー飛んでったんだけど」
白がそう言った。
「……言いたいことはそれだけ？」
山嵐は足下の雪をかき集めて丸くすると、境内の中で転がし始めた。
「違うわよ。代わり人がお首様に捕まっちゃって」
「ふーん……」
「で、あなたに何とかしてもらおうかなーって…」
「ふーん……」
「何とかしてくれたりする……？」
「ふーん……」
「……いい加減転がすの止めろ！」
「えーいいじゃん別に。話ちゃんと聞いてるんだからさ」
山嵐はそう言うと二つ目の雪玉を転がし始めた。
「聞いてなかったろ！全部生返事じゃん！」

白は怒ったのか、出来上がっている方の雪玉に近づいて、右足を高くあげた。
「この雪玉に踵落としてもいいわけ？」
白がそう聞いた。するとものすごい速さ、すなわち電光石火で山嵐は白の背後に回り込むと、雪玉を抱えて消えてしまった。
「……速い…」
白は少し焦った。まさかこんなにも速かったとは夢にも思わなかったのだ。
こう言うときの山嵐は背後から攻撃してくる、と風の噂で聞いたことがある。
白は思い切って後ろを振り返った。
「……っ！？」
白の目に映ったのは、雪だるまを完成させた山嵐の姿だった。
「よし、満足。じゃ、本題を聞きましょうか」
天狗はそう言った。
「つ……疲れるわ……」
白はそう言うとガクッと肩を落とした。

二人は居間にやってきた。居間では里見先生が代の首を触っていた。
「あ、やっぱりあの時見た天狗だ！」
どうして気づいたのかわからないが、里見先生が突然振り返ってそう言った。
「……誰？」
天狗は里見先生を指差してそう言った。
「指さすなんて酷いなあ。ほら、昔交通事故で弾き跳ばされた私を空中で受け止めてくれたじゃん」
「……ああ！あの向こうの交差点の事故か！やたらと軽かったから覚えてるよ」
山嵐はそう言った。どうやら覚えているらしい。

「それより代わり人の方を早く」
白がそう急かした。

山嵐は横たわっている代と、その周囲を見回している。
「……どうですか？」
代は心配そうに聞いた。
「んー……ナイスバディって訳じゃないなぁ…」
と、山嵐。
「いやいや、体型の事じゃなくて」
「お首様のことでしょ？」
「分かってるんなら遊ばないでくださいよー……」
「コイツはねー……もっしかしたらいけっかもなー…」
山嵐はそう結論づけた。
「まあ、ナイスバディじゃないんだけど、器がかなり容量あるみたいだから大丈夫でしょ」
「いつまでナイスバディにこだわってるんですか……」
代は少し不機嫌になった。
「それに比べてそこの女医さんはナイスバディですなぁ」
山嵐は里見先生を見ながらそう言った。真剣な顔で。

「よし、じゃあ思い切って代に取り込んじゃうか。山嵐、準備してくれる？」
白は立ち上がってそう言うと、本殿に向かっていった。
「はいよ」
山嵐もそれに続いた。

「何か……やばそうだから私は帰るね」
そう言うと里見先生は帰ってしまった。
居間には代一人。後、見えないがお首様もいる。そう思ったとたん、代の顔から血の気が引いた。

しばらくして、代は布団ごと本殿に連れてこられた。何が始まるのかドキドキしていると
「すぁて、始めますか」
山嵐が筆をとり、代の額に何かを書き始めた。
「丸〜書いて〜ぐ〜るぐる……」
そんな言葉を口ずさむのが聞こえた。
「ちょっ……何書いて」
しかし代は、最後まで言い切らないうちに強い睡魔に襲われ、眠ってしまった。

「眠らせた。じゃ、やるか。……ホントにいいのか？」
山嵐はそう言って白を見た。白は山嵐と目を合わせると、小さくうなずいた。
それを見た山嵐は、部屋の畳にも筆で字を書き始めた。

しばらくして、代を中心にして円形に文字が書き終わった。
「……では、始めます」
天狗はそう言うと何かをぶつぶつと唱え始めた。
すると、代を囲んでいた字が赤く光り出し、ゆっくりと移動して円を小さくしていく。

白はそれを少し不安げに見ていた。実は一昔前にも、白は同じ事をしたことがあったのだ。
その時の儀式は失敗し、代わり人の体がお首様に乗っ取られてしまった。
そう言う場合、乗っ取られた肉体は破壊しなければならないと決められている。白は規則に則ってその肉体を破壊した。
だが、今回。万が一のことがあった場合、白はそれが出来るのだろ

うか。
今回の代わり人、御社代は、自分を初めて受け入れてくれた代わり女なのだ。そんな特別な人間を破壊する、つまり殺すことが出来るのだろうか。

白がそう思っている間にも、儀式はどんどん進んでいった。
ここまでは順調だ。
代を囲っていた文字円は代の鳩尾(みぞおち)に集まった。
山嵐はその上に筆で一滴、墨を垂らした。そのとたん

バチッ！

と激しい音がした。それとともに本殿の障子が全て吹き飛んだ。山嵐も少し弾かれたようだ。
「……まずいっ！」
代の鳩尾に集まっていた文字が真っ赤に光り、どんどん消えてゆく。
「どうしたの！？」
白が山嵐に駆け寄る。
「お首様が思ったより遥かに力が強い……。これはまずいことになった」
そう話しているうちに、どんどん字は消えてゆく。
「代……っ！」
白は代のことを、ただ悔しそうに見つめることしか出来なかった。

代は夢を見ていた。

真っ白な世界に、自分一人だけふわふわと浮かんでいる。
「これ……夢なのかなぁ…？」

真っ白な世界はとても気持ちがよかった。しかし、突如体中に寒気がはしり、白かった世界だんだん黒い部分が現れ始めた。
黒い世界は代の前で止まった。代は今、白い世界と黒い世界の境目にいる。
「何……これ」
代がそうつぶやくと、黒い世界の方からゆっくりと誰かが近づいてきた。
「誰だろ……」
よくよく目を凝らした。しばらくして、正体がわかった。代自身だった。

今、二人の代が向かい合って白い世界と黒い世界に浮いている。
正確に言うと、代に向かい合っているのは代の形をした『何か』なのだが。
「あたな、誰かを恨んでない？」
『代』が話しかけてきた。
「ううん。恨んでないよ」
代はそう答えた。
「ほんとに？本当は勝手に代わり人押しつけてきた人とか、逃げている両親とか、恨んでるんじゃないの？」
「そんなことないよ。確かに……最初は嫌だったけど、今は代わり人楽しいし。それに、お父さんとお母さんも色々頑張ってるんだし」
「心のどこかでは恨んでるんじゃないの？」
「恨んでないよ」
「許せないこととか、あるんじゃないの？」
「それは……」
確かに代には、許せないことが多々ある。
「ほらね。やがてそれが恨みになるのよ。……ねえ、私にあなたの体くれない？そうすれば、恨みを消すことができる」
「消すって、どうやって…」

「殺すのよ。恨んでいる人間を」
「そんな事したって、今度は別の人に自分が恨まれるだけだよ」
代は少し力を込めて言った。
「他人に恨まれようが、私には関係ない。自分の恨みを消せればそれでいいのよ」
『代』はそう答えた。
「そんな事したらいたちごっこじゃない。恨んでる人を殺したら、別の誰かから自分が恨まれるわ。そしてまた自分に恨みが戻ってくるだけだよ」
「……じゃあ……だよ」
「え？」
「じゃあ私はどうしたらいいんだよ！」
『代』は代につかみかかってきた。
「うわっ！」
代は浮いているはずなのだが、つかみかかられたせいでよろめいた。
「人を恨んで、悪霊にまでなって……それなのにお前は私に何もするなって言うのか！？」
「な……何もするななんて言ってないよ」
「じゃあ何をすればいいんだよ！復讐するしかないだろ！」
『代』は代の首を絞めてきた。
苦しい。夢のはずなのに。
「何だよ！何か返してみろ！」
「…許せば……許せばいいんだよ…」
「えっ……」
『代』が首を絞める力が弱まった。
「そんな事……今更できる訳ないでしょ」
「今までに、相手を許そうと思ったことある？」
「……」
「ただ自分で許そうって思うんじゃなくて、相手とちゃんと話して、謝ってもらって、それで許してあげればいいんだよ」

「……」
「ただ恨んでるだけじゃ、何にも始まらないよ」
「でも、もう会えないわよ」
『代』は代から少し遠ざかると悲しげにそう言った。
「恨んでる奴らはもうとっくの昔に成仏したわ。私にもうあいつらに会う手だては無いのよ……」
「そんなの簡単だよ。あなたも成仏すればいいのよ」
「そんな簡単な話じゃないわ。私が成仏するには、怨念をすべて浄化する必要があるわ。百年二百年じゃ消えないくらいの怨念を、ね」
「きっと大丈夫。時間はたっぷりあるんだから。そう焦らずにゆっくり頑張って」
代はそう言った。
それを聞いた『代』の顔は、少しほほえんでいた気がする。
「……ありが」

目を覚ますと、本殿の天井が目に映った。
代はゆっくりと身を起こした。首は動くようになっている。
「代……なの？」
後ろから白の声がした。代は座っている白の方を振り向くと
「そうだけど……どしたの？」
と聞いてみた。
「いや、あの、儀式が失敗しちゃったから、もしかしたらお首様に乗っ取られてるかなーって思って」
代わりに山嵐が答えた。
「まあとにかく、無事でよかった」
「私、夢の中でもう一人の私に会ったの」
代が突然そう言った。
「そりゃ、多分お首様だな。器の形で対話してくるって事は、そこ

まで凶悪じゃなかったんだな」
天狗はそう言って自分でうなずいている。
「でも、何か向こうは白黒立ったんですよ。私はカラーだったんですけど」
「あ、白黒かぁ……結構強い奴かもなぁ」
「でも、話し合ったら何とか分かってくれたみたいです」
「そうかな……」
山嵐は疑わしげな表情でそう言った。
「そうかなって……何か疑問な点でもあるんですか？」
代は首を傾げた。それに対して山嵐は
「ま、何はともあれ今夜になればわかるかな」
と言うと、本殿がら出て行ってしまった。
「……今のって、どういう意味かな…？」
代は白を見た。
「いや、そのままの意味だと思うよ」
白はそう返すと
「じゃ、私はちょっと眠らせてもらうわ」
と言ったかと思うと、畳に倒れて動かなくなった。
「もうそんな時間なのかな……？」
本殿には時計がない。辺りが暗いので多分夜だろうと思ったが、一応居間の時計で確認することにした。
時計を見て代は驚いた。何と、時刻は午前三時だった。

お首様（八）

「こんな時間……なんだ」
代は驚いた。そこまで長くない夢だったのにこんなに時間がたっている。
「……にしても、暇だなぁ」
正直なところ、暇だ。昼過ぎから寝ていたので、今からは寝られない。
「（仕方ない、ラジオでもつけるか……）」
代はラジオに近づいていった。本当はテレビでもよかったのだが、今はラジオな気分なのである。

カチッ
『ガーガガ……キュィキュルル……すね。ですからやっぱ冬と言ったら』
やっと周波数があったようだ。
『冬と言ったら鍋でしょうね。あ、ここでお葉書を一通。ラジオネーム、ぐるぐる目玉さん。えー、妖界ラジオ、毎週楽しく聞いています』
「ようかいラジオ？」
代は少しつっかかった。
『最近は人間の町も明かりが増えてきて、人を驚かすことができなくなってとても退屈です。でも、妖界ラジオがあるんだ、そう思うと一週間頑張れます。なので、これからも頑張ってください応援しています。……いや～、嬉しいですね～。こんな番組でも聞いてくれてる人いると思うと、何だか私も頑張れますね～』
「一体どこの電波拾ってるんだろ？普通の世界じゃないみたいだけど……」
『……と、ここで時刻は午前三時半を回りました。そろそろ、この

コーナーもお終い。それでは、第二スタジオのミカちゃん、あと宜しくねーっ！……はい、幽司さんありがとうございました。それでは妖界ラジオ、午前三時半より引き続き私ミカがお送りいたしまーす』
「へーっ……幽司さんって、ラジオやってたんだ…。知らなかったなぁ」
代は驚いた。身のまわりには意外と有名人がいるらしい。
「さて、……お散歩でもしようかな」
代はそうつぶやいて、ラジオのスイッチを切ると、玄関に向かった。

まだ雪の積もっている境内に出た。昨日雪を降らせた雲が嘘のように消え去り、空は星で満たされていた。
「わあ……きれい……」
ついそうつぶやいた。この前まですんでいた住宅街では、夜中じゅう点いている街灯や休みを知らないゴルフ場などのせいで、夜空が見えなかったのだ。
星を見ていると、何だか不思議な気持ちになってきた。
「私……何でここにいるんだろ？」
ふとそう思った。思えば、前まですんでいた所とここはかなり離れている。
「何でこの山に迷い込んだんだっけ……？」
思い出してみる。確か、冬休み最初の日、ふらっと出かけたくなった。駅に着き、いつもなら上るはずなのにあの日は下ったんだ。それで、ここら辺の駅について、気づいたら山に迷い込んでいた。
「あら？所々記憶喪失なのか？私」
代は自分で自分に聞いてみた。もちろん、返事はないが。
「それにしても……ホントにきれいだなぁ……」
代が感動していると、向こうの空がだんだんと色づいてきた。
「あれ……確か夜明けは六時半頃じゃなかったっけ？」

代は時間を確かめるために居間に戻った。居間の時計はしっかりと午前六時三十二分を指していた。
「まさか……星を見てるだけで三時間も過ぎてたなんて」
代は、驚きを越してあきれていた。それにしても、よくこんな寒空の中三時間もボケーッとできたものだ。
「……仕方ない、朝ご飯でもつくろ」
代はだるそうな足取りで台所へと向かった。
「そう言えば……昨日のお昼から何も食べてないなぁ……」

台所に来た。昨日作ったカレーがまだ残っているので朝食には困らないだろう、と思った矢先
「ぐ……ご飯が無い」
そう、カレーには付き物のご飯がなかったのだ。
「んー……ナンなんてある訳ないしな……。仕方ない、炊くか」
米櫃のふたを開ける。米は二十粒ほどしかなかった。「ひーふーみーよーいつむーなー……。全部で二十六粒か……。あーどーしよ。お店が開くのは九時だしなぁ……。仕方ない、お風呂にでも入ってこようかな」
朝食をスパッと諦めた代は、着替えとタオルを持つと風呂場へ向かった。

「うぅ……寒っ……」
白は寒さで目を覚ました。まあ、布団なしで寝ていたので仕方のないことだが。むしろ今まで寝ていられたことが凄い。
「あー……もう朝か」
白はゆっくり起きあがると、これまたゆっくり居間に向かった。
「んー……結構な時間だなぁ」

居間の時計は午前六時四十七分を指していた。
「あ、そうだ。……代ーっ……代ーっ……」
返事がない。どうやら近くにはいないようだ。
「……まあいいや。朝ご飯にしよ」
白はそう言うと台所へ向かった。

「うーん……カレーはあるのにご飯は無いのか……。仕方ない、炊こう」
白は米を炊くために米櫃のふたを開けた。そしてすぐにふたを閉じた。
「確か、お店が開くのが九時か……。かといって米なしカレーはアレだしなぁ……。ナンなんてある訳ないしなぁ……。仕方ない、お風呂にでも入ってこよう」
白もまたそう言うと風呂へ向かった。どうやら白と代の思考回路は一緒の作りなようだ。さすが、名前（の読み）が同じなだけある。

「うーん……。ああ。お風呂は気持ちいいなぁ～」
風呂場を占領している代。明け方になると、妖怪は皆撤退していくようだ。
「あったかー……。やっぱ、冬はお風呂が一番ねぇ～」
「何だかおやじ臭いこと言ってるわね」
「あ、白。もう起きたんだ」
白が風呂場に現れた。
「まあね。そろそろ正月だから、いろいろと準備もあるしね」
白はささっと体を洗うと、湯船につかった。
「毎年ね、この時期になるとうちに疫病神が来るの」
白は天井を見ながらそう言った。
「ふ～ん……え？疫病神？」

「そ。疫病神」
「それってけっこうまずいんでないですかね？」
「大丈夫よ。疫病まき散らす訳じゃないから」
「……だよね。まき散らしたらバイオテロみたいになっちゃうもんね」
代は少し安心した。
「それにしてもさ、もっとまともな神様友達にいないの？」
代が左を向いた。代の左には白がいる。
「ん？ん～……まあ、いなくはない」
白は今にも寝そうな雰囲気を漂わせている。
「どんな神様？」
「死神様」
「……！？」
「後は、雷様とか」
代は言葉がでなかった。まともな奴が一人もいないではないか。
「ちょ……幸福の神様とかいないの？」
「うん。後は、近所の山の山神様くらいかな」
「……もしかして、友達少ない？」
「妖怪の友達ならわんさかいるけど」
「妖怪かい！……あっ、今の駄洒落じゃないよ」

「あーお腹減った」
いつの間にか風呂から上がり、居間でごろごろしている二人。明日は大晦日だと言うのに気楽なものだ。
「今何時？」
白が寝転がったままそう聞いた。
「今くじら～」
代も寝転がったままそう返す。

「本当は？」
「八時十五分ら～」
「う～ん……困ったなぁ……代に買い物頼むにもまだお店開いてないし…」
「人任せかっ！」
「代わり人なんだからそれくらいするのは基本よ」
「たまには自分で行ったら？どーせ今まで自分で行ったことないんでしょ？」
「あんた……キテレツ知らないの？嫌なことは全部手下の……ホラ、何だっけ……そうだ、コロ助だ。コロ助にやらせてるじゃん」
「いや、たぶんそれ違う番組だと思うよ」
そんな他愛もない会話をしているうちに、時計はいつの間にか九時を指して……いなかった。
「うわ、さっきから五分しかたってないじゃん」
白はそう言ってついに立ち上がると、どこかへ行ってしまった。代はそれを寝転がりながら見ていた。

代は居間で一人、寝転がって天井とにらめっこしている。
まあ、天井なので木目しか無い。しかし、よくよく見ていると木目が人の顔に見えなくもない。
「……？あんなとこに顔みたいな木目あったっけ？」
さっきまではそんなもの、無かったはずだ。いや、間違いなく無かった。

しばらくその木目を見ていると、じわりじわりと恐怖がわき出てきた。
「……」
代はできるだけ耐えてみた。しかし、木目の顔がニヤッと不気味に笑ったとたん

「わあぁぁぁぁぁ！」
と叫び、居間から走って出て行ってしまった。

廊下を走る代。何故かかなり長い。走っても走っても突き当たりにぶつからない。
しかしそんな事を理解する暇もなく代はひたすら廊下を走っていた。が、ちょっとした弾みで足がもつれた。
「うわぉっ！」
勢いよく床に倒れる。
「……痛ぁ……」
代は体を起こして額を押さえた。どうやら転んだ拍子に床にぶつけたようだ。
代は突然はっとして今まで走ってきた廊下を見た。よかった、さっきのは追いかけてきていない。
「あー……なかなか怖かった」
代はそう言って起きあがろうとした。その時、廊下の床板の木目が目に映った。
「ま……まさか……」代は木目から目を離さないようにゆっくりと立ち上がった。すると突然背後から伸びてきた手が代の肩に触れた。
「うわぁぁぁぁっ！！！！！！！」
代の、今年一番になるであろう声量の叫びが山に響いた。そして代の後ろには、ひっくり返った白がいた。
「なんだ……白だったのか……。も～…驚かせないでよぉ～…」
しかし白は何も言わなかった。それ以前にぴくりとも動かない。
「あ……あれ？ちょっと、白。白さーん。白ちゃーん…」
どうやら、白は先ほどの悲鳴を聞いて失神したようだった。

「……はっ！」
白は意識を取り戻した。さっきまで別の部屋にいたはずなのだが、今は居間にいる。
「あら……何かあったんだっけか？」
白は、自分の記憶を追ってみることにした。

「（確か、寝転がってて、あきたからウィキペディアでも見てようかなと思ってパソコンのある部屋に移動して、色々と読んでたんだ。で、しばらくしたら何か代が廊下を爆走してて、うるさいなぁって思ってたら、何か転んだみたいな音がしたんだったか。ちょうど私の居た部屋の前らへんだったから、どうしたのかなって様子見に行ったら、立ちあがるのがやけにゆっくりだったから、どこか痛めたのかなと思って代の肩叩いて……叩いて何があったんだっけ？）」
白の記憶がそこから今まで無いと言うことは、代が何かしたに違いない。白はそう考えた。
「代わり人に聞かなくても、ウチが教えてさしあげますのに」

背後からした声に、白は一瞬戸惑った。この声は確実に代ではない。この声は……
「朱祢、ね？」
白はそう言ってゆっくりと振り向いた。後ろには、天井から逆さまにぶら下がっている少女が居た。
「一年ぶりですね。山神さん」
朱祢（あかね）と呼ばれた少女と白は知り合いな様だ。
「うん……そうなんだけどさ、いい加減普通に戻ったら？逆さまは疲れるでしょ」
白がそう声をかける。
「いえ、結構大丈夫です」
「大丈夫じゃないでしょ」

白はそう言って朱祢の髪を軽く引っ張ってみた。すると
「きゃっ！」
朱祢は畳にどしゃっと頭から落ちた。

お首様（二）

「くっー……」
朱祢は首のあたりを抑えながら立ち上がった。
「そうそう、今日は山神さんにおもしろい話をしようと思って来たんですよ」
「おもしろい話？」
白は朱祢の方を向いて、布団の上に座った。
「さて、御社さんはいったいどこに行ったのでしょうね？」
朱祢が意味深な事を言った。確かに、いつもなら目を覚ますとなぜかすぐに代が駆け寄ってきた。
が、今回は来ない。何故か。
「アンタ、まさか……」
「ええ。どんな反応をするのか楽しみだったので、御社さんは私が預からせて頂きまし」
「ただいまー」
朱祢の話が終わる前に、玄関の方で代の声がした。
「ん？」
白は朱祢の方を見た。朱祢は
「ぐぁぁぁぁぁ！ウチの計画が台無しですぅぅぅ！」
と叫び、頭を両手で抱えていた。

ドタドタ廊下を走る音。異変に気づいた代が急ぎ足で居間にやってきたのだ。
「白！目、覚めたんだ。よかったー……。で、この方は？」
代は頭を抱えながら畳の上でフリーズしている少女を指さした。
「ああ、彼女は朱祢っていうの。ちなみに死神さん」
白はそう軽く説明した。
「ん？今、死神って聞こえたような気が……」

代は白にもう一度聞いてみた。白は黙って頷いた。
「……お友達？」
代が小さな声で白に尋ねると、しろは首をぶんぶんと横に振った。
「じゃあ、他人以上お友達以下？」
白は首を縦に振る。
「何で喋らないの？」
「あ、いや、特に意味は無いよ」
二人の会話が終わっても、朱祢はさっきのポーズのままだった。
「まあ、お客さんに変わりはないんだしお茶でもいれてこよ」
代はそう言って台所に向かった。
「安いのでいいわよ」
白は布団を畳みながらそう付け足した。

「あ、何かお茶までいれていただいてありがとうございます」
朱祢は代に軽く頭を下げてから湯飲みを受け取る。
「熱っ！」
朱祢が湯飲みから口を離した。
「ちょっと代、足邪魔」
「私の足何にも触れてないよ」
「じゃあ朱祢の足か」
「大正解～。山神さんに十ポイント差し上げま～す」
「いらないわよ。大体、ポイントなんか貯まったところで何の役に立つわけでもあるまいし」
白はそう言うとゆっくりお茶をすすった。
「いやいや、ありますよ。百ポイント貯まると天国に行けなくなって、地獄で暮らすことになるんですよ」
朱祢が笑顔でそう言った。白の方は、えっ？と言うような顔で固まっていた。
「にしても、こたつっていいモンですねぇ。うちの職場こーゆーの

無いんですよ」
朱祢がこたつをとんとん叩きながらそう言った。
「へぇー……。朱祢さんの職場って、どこにあるんですか？」
代は何となく聞いてみた。
「ウチの職場ですか？異空苑にありますよ」
「い……いくうえん？」
「あら？山神さん、代さんに異空苑の事教えてないんですか？」
「えっ？……ああ、まあ、教えてないけど……」
白がやっと動き出した。どうやら、神様の類は何かあるとすぐにフリーズしてしまうようだ。
「説明してあげてください」
「自分で説明すればいいじゃない」
「いや、なんかホラ、自分の職場のこと話すのって、恥ずかしいじゃないですか」
「そう？」
「それに、私話し下手ですし」
「あ、そーいやそーだ」
そう、朱祢はものを説明するのが下手なのだ。
「しょーがないなー……」
白は横目で朱祢を見ると、代の方を向いて説明し始めた。
「えっとね、異空苑と言うのは、この世界とある一点で繋がっている別世界のことよ。異空苑は冥界、天界と繋がってるの。で、彼女は冥界にある閻魔邸に勤めてるのよ」
「ふ～ん……。じゃあ、異空苑にある、じゃなくて冥界にある、の方がいいんじゃないの？」
代が首をかしげる。
「この世界、いわゆる人界ね。人界からは、冥界に直接行けるんだけど、冥界から人界には直接これないのよ」
白はそう言い終わると残っていたお茶を一気に飲み干した。
「代、今何時？」

「今？えーっと、十時十五分」
「もうそんな時間なんですか！？大変！帰らなきゃです」
そう言って立ち上がる朱祢の足を、白の手ががしっと掴んだ。
「タダじゃ帰さないわよ」
白はのそっと立ち上がると、朱祢の両肩を笑顔で掴んだ。
「ひ……ひえぇぇぇぇ」
朱祢は早くも何かを察したようだった。

「じゃあねー」
白が笑顔で見送る。朱祢は疲れた顔で
「はい……お邪魔しました」
と言うと、ふらふらした足取りで境内から出て行った。
「朱祢さんって凄いね。たった三十分で、あれだけのこと出来るんだもん」
代は感心していた。
「ま、彼女はそんくらい速く動けるのよ。多分今まであの力、仕事にしか使ったことなかったんだろうけど、さっきので掃除洗濯炊事を一気に出来ることが明らかになったわけだ」
白がにやけながらそう言った。そう、朱祢は三十分の間、掃除洗濯炊事をほぼ同時にやって（やらされて）いたのだ。
「ま、朱祢が来たおかげで朝御飯も食べれるんだから、その点は感謝しないとね」
白はそう言い終わると、台所へと移動し始めた。代もその後に続いた。

朱祢がさっきまで料理していた鍋のふたを開ける。中にはビーフシチューが入っていた。
「あら、いい匂い。朱祢結構料理うまいんだ……。次来たらご飯作

らせよっと」
白はまた何か考えているようだった。
「とにかく、ご飯にしよ」
二人は朝食にしては遅く、昼食にしては早い、ブランチのような食事をとることにした。
「あ、美味しい！……けど、昨日はカレーじゃなかったっけ？なんだか、煮込み料理が多い気が……」
代がそう言った。
「そう言えば……そうね。一昨日の夜カレーで、昨日の朝も残ったカレーだったなぁ……」
白も同感な様だ。
「でもまあ、材料買ってきたの私だし、仕方ないか」
「ふーん……、そうだ。首の調子はどう？」
白が聞いてきた。
「首？大丈夫。でも、山嵐さんは今夜が山だとか何とか……」
「何で今夜かわかる？」
白は聞いてみた。代は首を傾げた。どうやら分からないようだ。
「代がもう一人の代……あー、つまり、お首様と初めて会ったのは夢の中なんでしょ？」
「うん」
「ってことは、山嵐は代の中にいるお首様が代と接触してくるのは夢の中だと思ったんじゃない？」
「でも、それじゃあもしお昼寝とかして夢見たら、山は夜じゃなくて昼になるんじゃ？」
「馬鹿ね～……。妖力や霊力は夜間の方が強いの。力の弱まってる昼間に接触しに行く奴なんて誰もいないわよ」
「なーるほど。だから山は夜なんだ」
パッと笑顔になる代。どうやら納得したようだった。
「山……ヤマ……どっちだろう？ま、いいや」
白は食事を再開した。

二人はまったりしている。食事はどうやらとうの昔に終わったようだ。
「うーん……まずい」
代が時計を見ながらそう言った。
「何がまずいの？」
白はこたつの上にみかんを積み重ねている。
「何か、今日も一日を無駄にしてるなーって」
「仕方ない仕方ない。それも代わり人の仕事のうちだから。と言うか、ここにいること自体が職務なんだけどね」
白はみかんの一つを代に向かって放り投げる。代がそれを華麗によけると、みかんは畳に叩きつけられた。
「何で避けるのよ」
「あ、いや、何か飛んできたからつい」
代は畳に着地したみかんを拾い、皮を剥いたかと思うとそのまま一口。
「行儀悪いわね」
白はそんな代の姿を見てついそう言ってしまった。
「ん～……このみかん、まあまあ」
代はさっきまで口をもごもごさせていたが、どうやらもう飲み込んだようだ。
「ま、そうだろね。このみかん、この山に生えてる木からとった奴で、その木のまわりは自殺者多いからね」
白はさらっとそう言った。
「ふ～ん……この山って、意外と大変なんだ」
代は至って冷静だった。
「あ、見て見て。ほら、このみかん人の顔の形してるよ」
白がそう言って代にみかんを向けた。

「うわ、いいよそんなの見たくないよ」
顔を逸らす代。
「自殺したんだけど、無念の思いがみかんに取り憑いたんだね～……」
「へぇ～……みかんにも怨念こもるんだ……って、食べるのそれ！？」
「当たり前よ。みかんなんだから」
白はみかんの皮を荒く剥くと、口へと運んだ。
「こういう風に、食べ物に取り憑いたやつを浄化するには食べちゃうのが一番よ」
白はみかんの皮をまとめて掴むとゴミ箱に向かって投げた。みかんの皮はゴミ箱の縁に当たり、畳の上にみかん皮が散らばった。

お首様（ホ）

「み……みかんなんて一生食べるもんか……」
顔面蒼白の白。こたつに頭を乗せている。
「お腹でも痛くなった？」
代が白の顔をのぞき込む。
「いや……何か気分悪い」
あんな危険なみかんを食べたのだから当たり前だ。
「得体の知れないもの食べるからだよ～……」
「うん……。でも、前に食べたときもこんな感じになったし……
…」
「前にも食べたんだ……」
「とにかくお茶入れて……」
こんな時にお茶は如何なものかと思ったが、取りあえず用意した。
「ほい、お茶」
「ああ、ありがと……」
白は熱いお茶を一気に飲み干した。
「っー……。よし、治った！」
「熱いお茶には悪を払う力があるのか！？」
「熱いお茶かけられたら何だって逃げ出すわよ」
白はそう言って立ち上がると、うーんと伸びをした。
「さて、じゃあ私は先に風呂にでも入ってくるわ」
「あれ？もうそんな時間だっけ？」
代は壁掛け時計を見た。四時半過ぎだ。
「いやいや、昨日入れなかったから今日二日分入ろうと思ってね」
白は居間から出て行ってしまった。
「私はどうしようかな……。そうだ、境内の掃き掃除やったらお
風呂行こっと」
代も立ち上がる。

居間には誰もいなくなってしまった。まあ、二人しかいないので当たり前なのだが。

代は境内にでると、箒を取りに本殿裏の倉（倉庫）に向かった。
古い木の引き戸を開ける。
「うっ……。まったく、いつ来ても埃っぽいなぁ、ここ」
代はそう呟いた。
「……あら？」
いつも置いてある場所に箒が無い。
「おかしいなぁ……あ、あんな所に……」
箒は倉の奥にあった。多分いたずら好きの妖怪か何かが移動させたのだろう。
「ったく……色々邪魔だなぁ。今度掃除しないと」
得体の知れない壷をどかしたり、訳の分からない箱を跨いだりして、やっとの事で箒を手にした。
「……ふう。よし」
代は出入り口に向かって歩き出した。
すると突然、目の前に逆さまの顔が現れた。
「あわっ！……ん？山嵐……さん？」
「その通り。うん。正解正解」
山嵐はどうやら天井から逆さまにぶら下がっているようだ。
「……そんな風にしてて大丈夫なんですか？」
「いや……かなりきつい。頭に血ィのぼってきた……」
山嵐はそう言うと、トンと着地した。
「あー頭痛ぇ」
山嵐はそう言って頭を押さえる。
「見た感じ、まだ大丈夫そうだね」
山嵐は頭を押さえながらそう言った。
「まだ大丈夫って……何かあるんですか？」

代はちょっと心配になってきた。
「いやいや、特に言うべき事はないよ。それより、万が一の時のことなんだけど……」
「……と言うと？」
「どんな死に方したい？」
山嵐は真顔でそう聞いてきた。
「どんな死に方って……一体何でですか？」
代はますます不安になってきた。
「いや、だから、万が一お首様に体乗っ取られたときにどう始末してもらいたいかって」
「な……え、縁起でもないこと言わないでくださいよ！怖いじゃないですか！」
すると山嵐は右手の人差し指を顔の横にたて
「ところがどっこい。万が一とは言うものの、実際乗り移られる確率は六分の一なんだよね」
と言った。
「えーッ！？」
「さらに、君の場合はちょっと不具合があったから三分の一くらいになってるんだよね」
山嵐は他人事のようにさらっと言った。
「ちょ、そんな他人事みたいに言わないでくださいよ……」
代の元気はほぼゼロになった。
「ま、安心してよ。いざとなったらこの刀でそのかわいい頭をスパッとね……」
と、山嵐は代の首を見ながらにやにやした。
「乗っ取られる前から切る事考えないでください！」
代は箒の柄で山嵐をつっついた。
「ま、今から心配しても何も変わらないから、普通に過ごすことをおすすめするよ。ま、最後の日になるかもしれないけどね」
そう言い残すと、山嵐は消えてしまった。

「最後、か……」

代は上の空ですっかり暗くなった境内を掃いていた。頭の中にはずっとあの言葉が再生されている。

『ま、最後の日になるかもしれないけどね』

「はぁ……」

境内を無意識のうちにうろつく。その時

「うわぁ！」

ふと我に返る。周りがスローモーションになったように見えた。目の前には長い階段がある。が、何かおかしい。いつもなら階段の下の道を見るときは顔を下げるのだが、今は見上げるようにしている。

（あ……ああ。落ちてるんだ。しまった、不用心だったかな～……）

代はそんな事を考えた。

次の瞬間、白山に妙な、何かが階段を転がり落ちるような音が響いた。

代はまたあの真っ白な空間に漂っている。

「またここか……」

辺りを見回すと、まだ『代』がいた。

「あれ？何やってんの？成仏への道を進んだ方がいいんじゃないのかな」

代はそう話しかけてみた。すると『代』は

「あ、……うん。そうしたいのはやまやまなんだけど……」

と言って、代から目をそらした。

「やまやまなんだけど？」
「あんたの中から出られなくなっちった」
『代』は、突然悪戯っぽく笑った。
「え？それって……」
「じゃ、しばらくあんたの中でお世話になるとするわ」
「えっ！？それって、まさか私がにじゅ」
「二重人格にはならないわ」
「じゃあ私の体があなたにのっ」
「乗っ取らないわよ！！あんなナイスバディでもないものを」
「ナイスバディでない……！？」
「昨日も言われてたでしょ」
その言葉を聞いた代は、少し考えてから
「……やっぱり、あの時私の近くにいたの？」
と『代』に聞いてみた。答えは
「もちよ」
だった。
「……と言うか、私の中から出れないってどう言うこと？」
代は一番の疑問点を口にした。
「どう言うことって、あんたらが私をあんたの中に封じ込めたんでしょ？」
『代』はそう返す。
「で、出られなくなったと」
「そゆこと。瓶に詰められたトカゲ状態よ」
「トカゲは瓶に詰めるものじゃないよ？」
「閉じこめられたって言った方がよかったかしら……？」
『代』は首をかしげた。
「まあいいじゃない。中で悪さするって訳じゃないんだし」
「ん～……何か心配だなぁ……」
代は手を口に当てた。
「まあまあ、タダで居座る訳じゃないんだからさ」

『代』はそう言った。
「そうなの？何かくれるの？」
代がそう聞くと、『代』はニヤッと笑って消えていった。
「あ！ちょっと！」
代は何もいなくなった空間に右手を伸ばした。

「……！……ろ！……よ代！」
自分を呼ぶ声がして、代はうっすら目を開けた。白の顔と夜空が見える。どうやら代は仰向けに寝ているらしい。
「……ったく、驚かせないでよ！心配したじゃない！」
強めの口調でそういう白。どうやら少し怒っているようだ。
「ご……ごめん」
代がそう言った途端、全身に強い痛みがはしった。
「痛っ…！」
階段の一番下にいることから、どうやら転がり落ちたらしい。
「っー……。でも、どうしてここって分かったの？」
「俺が教えたから」
代の問いに答えたのはなんと山嵐だった。
「い……いたんですか！？」
「落ちる瞬間もばっちり見てた。ま、だからすぐに山神呼べたんだけどね」
「すぐ……？じゃあ、私はさっき落ちたんですか？」
「うん」
「じゃあ……そんな短時間にあれが起きてたんだ……」
代は煌々としている月を愛おしそうに見ながらつぶやいた。
「あれ？あれって……まさか、『対話』とかじゃないよね？」
山嵐は興味津々で聞いた。
「分からないけど、多分お首様と話しました」

「何て言ってた？」
「確か、私の中から出られなくなっちったとか何とか」
「……と言うことは、お首様の取り込みは一応成功したわけだ。よかったよかった」
山嵐はとたんに笑顔になった。
「ひとまず大丈夫そうだし、今日の所は神社に帰るか」
「そうね。明日の朝、あの医者でも呼ぶとするわ」
白もそう言って立ち上がった。
「立てますか？お嬢さん」
山嵐が右手を差し出す。代はその手を握ろうとするが、痛くてあまり体が動かない。
「あ……ちょっと無理です」
代は申し訳なさそうにそう言った。
「ふーん……じゃ、仕方ない。運ぶか」
そうつぶやくと、山嵐は代の背中とひざの裏に腕を回し、いわゆるお姫様だっこをした。
「うわっ！ちょっと！あ……あいててててて！」
「ほら、我慢我慢～」
「無理です！」
月明かりが、階段を上る三人を照らしていた。

お…お兄さまであらせられますかっ！

「んー……ふう。あー気持ちいい」
この山の神様、山神白は神社の境内でひなたぼっこをしていた。
「もうすっかり春ねー……」
白はくるっと回って山の木々を見回した。すると視界の片隅に、階段を上ってくる人物が映った。
「あら、お客さんなんて珍しい。しかも若い男」
白は顔が少しにやけた。まあ、これは山の神様の特性上仕方のないことなのだが。
階段を上ってきた男に、白は妙な感覚を覚えた。何か、知っているような感覚を……。

「あの～、ここに御社代はいますか？」
男はそう聞いてきた。よく分からなかったが、背は白よりも高い。多分代よりも高いのだろう。手には紙切れを持っていた。たぶん、ここまでの道でもメモしてあるのだろう。
「あの～」
「あっ、はい。何でしょうか？」
「御社代はここにいますか？」
代の知り合いなのだろうか？しかし、何かこう……言葉では言い表せない雰囲気がある。
「ええ……。たぶん、中にいると思いますけど……」
そんなわけで、白は男を神社にあげたのだった。

「オゥ、マイプリティーシスター！！」
男は代を見つけたとたんガバッと抱きついた。
「うわっ！！！」

急な事態に少々戸惑う代。
「えっ！」
白も小さく叫んでしまった。
「お……お兄ちゃん？」
代は恐る恐る聞いてみた。すると、男は代から離れ、こう一言
「久しぶり」

代は、とりあえず兄を座らせ、お茶を出した。こたつには代の兄と白が向かい合うように座っている。
少し落ち着いてから、代は兄を
「この人は、私の実の兄で、要っていうの」
と、白に軽く紹介した。
「ほ～……みやしろのかなめか」
白は何だか感動しているようだ。
「……で、聞きそびれたんだけど何の用でここに？」
代は少し首をかしげた。
すると要は驚いた表情で
「そりゃ、行方不明になった妹を心配するのは兄として当然だろ」
と返してきた。
「え？なに？私は行方不明扱いになってんの？」
代も驚く。
「ああ。父さんと母さんが失踪する一日前に」
「へー……。そりゃ大変だぁ。でもどうしてここだって分かったの？」　「ん？俺の彼女に教えてもらった」
要は少し胸を張った。
「ええ！？お兄ちゃんに彼女が！？あの『顔とかスタイルとかは最高なんだけど挙動不審なのが残念』って言われて二十年のお兄ちゃんに彼女が！？」
驚愕事実に代は固まった。

「代……お前兄だからってそこまで言う必要ないだろ……。ってか、そんなこと言われてたとは……」
一気に要のテンションが落ちた。話が切れたのを察知した途端、白が気になることを言った。
「あのさ、何で要さんの彼女はここに代がいるって知ってたの？」
「あー……なんか、妹の友達から聞いたとか言ってたよ」
要は顎に手を当てながら答える。
「じゃあ、その彼女って……人間？」　「いや、違う」
要がそう返した途端、代は自分の両手で自分を抱きしめると
「そんな！お兄ちゃんが妄想世界の彼女とつきあってたなんて！」
代は要から一歩退く。
「いやいやいや！そうじゃないから！」
要は必死に否定する。その間、白は黙って何か考え事をしていた。

「要さん」
白が口を開いた。
「んぃ？」
「今、どこに住んでる？」
「東京」
「……彼女の背はどのくらい？」
「代足す五センチくらいだね」
「髪は？」
「長い」
この妙なやりとりを代は黙って聞いている。
「歳は？」
「さあ。妖怪だから分からないくらい生きてるって言ってた」
「じゃあ、最後に……名前は？」
「名前？御社要だけど」
「違う違う。彼女の名前」

「神谷くろ」
「やっぱり……」
白はまた手を顎に当てた。何か考えているようだ。
「……知ってるの？神谷って人」
代が居ても立ってもいられずに聞いた。白は
「うん……。神谷くろは、私の姉だわ」
と答えた。
「お？おお？おお。じゃ、くろちゃんの妹さんか」
要は白に顔を近づけた。
「でも、大して似てないなぁ……。白ちゃんはカワイイ系で、くろちゃんは麗しい系だな、うん」
代の驚愕事実二号。兄は妖怪と付き合っていた。さらに、その相手は白の姉だったという。
「ちょっと待ってて。本当に姉上なのか確認してくる」
白はそう言うやいなや、どこかへ行ってしまった。
「いや、でも代が巫女さんやってるなんて全く知らなかったよ」
要はお茶をすする。
「巫女じゃない。代わり人とか言う変な仕事」
こたつで暖まりながら、代はそう答えた。
「かわりびと？……ああ、変人的なアレか」
「アレかって……そんな仕事の心当たりあるの？」
「ない」
「無いんなら言うな！」
「あ、じゃああっちか」
「あっち？」
「うん。変態的な……」
ゴスッと言う、鈍い音が居間に響いた。
「痛ぇ……俺が何したってんだ」
頬を押さえながらそう問いかけてくる要。

「心当たりは？」
代はまた拳を固めている。
「……あります」
「じゃあそれよ」「ふーん……お茶飲んだだけで殴られるなんて、どんなルールがあるんだよこの神社」
「殴られた理由がお茶飲んだからだと思ってるの！？」
「いや、だってそれ以外に思い当たる節ないし……」
代の兄はあからさまに考えていますよというポーズを取った。
「本気で考えてないでしょ」
兄を横目でにらみつける代。
「いや……変人的なとか変態的なとかしか言った覚えないんだけど、他に何か言ったっけなー……」
「それだよそれ！覚えてるじゃん！」
「あ、それが気に障ったの？」
要はやっと気づいた。
「いやー……俺はてっきり代のぶんのお茶を飲んだからそれで殴られたのかと思ったよ」
「あっ！ほんとにない！このー！楽しみにしてたのに！返せお茶！結構高いんだぞ！」
また、さっきの音が居間に響いた。

「おぅ……二度はないだろ、二度は」
心なしか要の声が震えている。
「……ったく、また殴られたくなかったら変なこと言わないでよね」
怖いぞ、御社代！
「へーへー。我が妹ながら恐ろしい奴だ。……で、何でまたこんな神社でおくりびとやってんの？」
「……ねえ」
「お……おほん。あー……が、学校はどうしたん？」
「学校？……ああ、実は……辞め（させられ）た」

「辞め（させられ）たーーーー！？」
「うん……。事業に失敗して、借金取りから逃げてるお父さんとお母さんを助けるためだったから仕方ないんだよ……」
代はうつむいた。
「なあ、代……」
要はいつになく真剣な表情でそう話しかけてきた。
「な……なに？」
「その話だが……本当に信じてるのか？」
「信じてる……って？」
「父さんと母さんが逃げたって話」
「え……」
「どうやら、その様子だと信じ切ってたようだな」
要は薄笑いを浮かべた。
「じゃ…じゃああの話は全部う」
「実話だ」
「おいいいいいい！何だよさっきまでのタメは！変なこと想像したじゃないかぁ！」
代はまた兄につかみかかった。
その様子を影から見ていた少女が一人
「代って……あんな一面もあったんだ」
その様子をカメラで撮っていた。

代が要をボコボコにしていると、やっと白が戻ってきた。
「あ、白ちゃん。どうだった？」
代の下敷きにされたままの要がそう言った。
「うん。『神谷くろ』は、やっぱり姉上だったよ」
「……でもどうやって調べたの？」
代が口を挟む。
「どうやってって……電話で聞いただけ。ほら」

白は二人に携帯電話を見せた。電話の相手は『神谷九六』となっている。
「『かみやきゅうろく』……？誰？」
要が白の携帯の画面を見ながらそうつぶやいた。
「いや、だから要さんの彼女だって。これで『くろ』って読むの」
「へ～……意外だなぁ。俺はてっきり苦しい風呂で『苦呂』だと…」
「そっちのほうがないよ！」
代がズバッとつっこんだ。
「と言うか、白って携帯持ってたんだ」
意外なことにうんうんとうなずく代。
「そりゃ、持ってるわよ。最近はみんな持ってるんじゃなかったかしら？ほら、銀次さんとかは仕事の都合上すぐに連絡とれた方がいいからって、結構前から持ってるよ」
「携帯……携帯？」
要が何やら思い出そうとしている。代たちはそれを黙ってみていた。
「携帯……あ、思い出した。代、今日君に会いに来たのは他でもない。これを渡すためなんだ」
要はそう言うと、手のひらサイズの小箱を鞄から取り出し、代に渡した。
「何……これ」
「開けてからのお楽しみ。じゃ、当初の目的は達成したから、俺はこれでおいとまさせていただくよ」
要は鞄を肩に掛け、玄関に向かった。
「えっ……。もう帰っちゃうの？」
「ああ。午後から講義あるしな」
「もっとゆっくりしてけばいいのに～……」
「いや、いい。また代に殴られるのは嫌だからな」
振り返りざまに、要は代の額を指ではじいた。
「っ！？」

突然の攻撃に驚く代。
「はっはっは。いい顔だ。じゃ、またな」
要は颯爽と境内を後にした。

今に戻ると、白がさっきの箱をつついていた。
「お、代。早く開けてみて」
白はなんだか嬉しそうだ。
「……何で私より代の方がワクワクしてるの？」
「さあ。それよりほら、早く」
白がせかすので、仕方なく代は箱を開けた。中には黒い四角とコードが入っていた。
「なんだそれ？」
白は未確認物体に興味津々だ。
「これ……携帯の充電器だ」
代は少しがっかりした。

「ま、せっかく届けてくれたことだし、使ってみるか」
代は放置していた携帯を充電器に接続した。そのとたん、溜まりに溜まっていたメールの数々を一気に受信した。
「……。こりゃすごいや」
学校の友達からのメールもいくらかあったが、七割がた要からのメールだった。
「ほお……要さんはよっぽど代が心配なのね」
「いや、ただのシスコンってだけだよ」
代は苦笑いした。

「代ー！メール来てるよー」
しばらくして、居間の隣（パソコンのある部屋）から白がそう叫ん

だ。

「んー？今行くー」

送信者：バカ

件名　：＼（＾ｏ＾）／

内容　：電車止まった。講義に遅刻するｏｒｚ

姫と獣人

新月の夜。白山の周囲の民家はすでに静まり返り、闇と静寂のみが辺りを包んでいた。

そんな中、一人、白山神社に向かって歩いている者がいた。

「………懐かしき景色……」

そうつぶやくと、それは唯一明かりの灯っている、白山神社を遠くから見つめていた。

ピピピッピピピッピピピッピピピッピピピッピピピッピピピッピピ
ッピピピピッピピピピピピピピピピピピピピピピピがちゃん！

「むぅ………」

布団からのびた白の右手が、騒がしくしていた目覚まし時計を黙らせた。

「んぬ…………」

寝返りをうつ白。そこに

ピピピッピピピッピピピッピピピッピピピッピピピッピピピッピピ
ッピピピピッピピ

目覚まし時計の反撃。

「むぅ…………。うるさい」

手探りで目覚まし時計を探す白。が、どこにも見あたらない。うるささに耐えかねた白はやっと起きた。

「おはよう」

白の枕元には、鳴り続ける目覚まし時計を持った代が立っていた。

「うるさい、それ」

だるそうに立ち上がり、着替えを探し始める白。

暫くして、突然白が振り向いた。
「今思ったんだけどさ、代って癖っ毛だったっけ？なんだか代わり人って言うより西洋のお嬢様みたい」
「髪長いんだから仕方ないよ。……ちなみに私も今朝気づいた」
代もしきりに髪を気にしている。今まではストレートのロングだったのだが、今朝見てみると西洋のお嬢様の様になっている。
「やっぱり、お首様取り込んだ副作用かな？」
代は首をかしげた。
「えっ？困るよそれ～……ねえ、どーにかならないの？」
しきりに髪を指でぐるぐるやっている代。よほど気にしているようだ。
「ん～そうね～……ストパーかけるとか？」
白は適当に返しておいた。

「えーと、今日は……ああ、私の番か」
白はカレンダーを見てそうつぶやくと台所へ歩いていった。番、と言うのは朝食当番のことだ。
「じゃあ私は掃き掃除でもしてこようかな」
そう言ったのは代。朝食当番でないときは、毎朝必ず掃き掃除をする、というのが代のルールだ。

サッとサンダルを履き、倉から移動させておいた箒を左手に取り、右手で引き戸の鍵を外し、戸を開けた。
すると、戸の目の前には何やら純白の着物的な何かが転がっている。
「ん？何だろ…？」
しゃがんで、不審物を確認する代。布をちょっと動かすと、変な金色の帯が出てきた。
「これって……天の羽衣ってやつ？」
代はさらに調査を続ける。さらに布をどかす。見えたのは人の顔だ

った。
「うわぁぁぁぁぁ！白ぉぉ！人が！天人が倒れてる！」
代の叫びは山に響き、後で聞くと麓にまで届いていたらしい。
廊下を走る足音とともに、白が現れた。
「天人？どこ？」
白は代の目を見た。
「ここ……」
代は玄関の戸の前からどく。すると、白からも倒れている人物が見えた。
「こいつ……」
白の表情が緩む。
「代、ちょっと手伝ってくれない？」
白がそう声をかける。
「……？」
「こいつをお風呂まで運ぶから、足持って」
「う……うん。でも、いいの？知り合い？」
まだ不安そうな代。
「うん。彼女はね、疫病神よ。前にも話したでしょ？この時期になるとここに来るって。まあ、今回はちと遅いけどね」

「せーのっ！」
二人して疫病神を湯船に投げ込んだ。すると
「うばっ！」
と、知らない声がした。
「や、お久しぶり」
白がほんのり笑いながらそう言う。
「……もー……なんで羽衣ごと投げ込むのかな？これ乾きにくいんだから……」

白が疫病神と言った人物はまず服の心配をした。
「天の羽衣は月の光に当てないと乾かないのにー……」
天の羽衣は濡れたせいで疫病神の体に密着している。
「とにかく、何か着替えください」
疫病神は湯船からあがってきた。
「ったく、めんどくさいもの着てるわねー……。代、着替えでも持ってきてやんなさい」
白は疫病神にタオルを投げつけるとそう言った。
「着替えかぁ……わかった」
代はタンスのある部屋に向かった。

「あら、結構似合ってるじゃない。けど……」
言葉を止める白。
「何で真っ白なワンピースなの？」
すると疫病神は
「いや、そこの女の子が持ってきてくれたのを着ただけ」
と返す。
「この間ね、私の荷物の一部が届いたんだけど、その中にそれが入ってて、似合うかなって思って」
満面の笑みでそう言う代。
「でも……まだ冬よ？まあ、春には近いけどさ……」
苦笑いの白。対照的な笑みである。
「んー……まあ、とにかく座りなよ」
白はとりあえず疫病神を座らせた。
しばらくの沈黙。話題がない。
意を決して、代が口を開いた。
「疫病神さんは、なんて言うお名前なんですか？」
「名前？瀞って言います」

疫病神……瀞はそう答えた。
「トロ？」
「とろ」
「ふーん……。何だか変わった名前ですね」
失礼だぞ、代。
「ところで、あなたのお名前は？」
瀞は特に気にしていないようにそう言った。
「あ、御社代って言います」
「……こりゃまたずいぶん変わった名前ですね」
瀞も案外失礼だったが、両者とも気にしていないようなので良しとしよう。
「……で、あなたのお名前は」
瀞が白を見てそう言った。白は無言で瀞をたたいた。
「いたっ……。もー、ノリ悪いなぁ」
疫病神はぶーぶー言っている。何に不満なのかよくわからないがとりあえず不満なようだ。
「ところで、瀞さんはいつもはなにされてるんですか？」
代が興味津々で聞く。
「いつも？監視されてますよ？」
「……いや、そうでなくて、いつもは何をなさってるんですか？」
「ああ、そっちか。いつもはですね、幸せなところからちょっぴり幸せをいただいて、不幸なところに幸せを分けてあげる、そんな夢のある仕事をしてますわ」
瀞はニコッと笑う。が、その後に白が
「ま。幸せ持ってかれる方はたまったもんじゃないけどね」
と続けた。
「んん……まあ、そうなんだけど……」
瀞はちょっとつまった。
「ま、いいでないの。その幸せをこの神社にも分けてやってんだから」

「あ、そうそう。そう言えばさ、『狼男』って知ってる？」
白は突如そう瀞に問いかけた。
「ま……まあ。西洋のアレでしょ？」
目を丸くしてそう答える瀞。どうやら白が何を思っているのか皆目見当もつかないようだ。
「最近ね、巷で狼男が目撃されてるんだって」
「そんな情報どっから仕入れてきたの？」
「文明の叡智から」
「インターネットね」
「ご名答。さっすがバイオテロリスト瀞ちゃんですこと」

そんな会話を、代は一歩退いたところから見ていた。
「（ああ……会話に入れないや……）」
歳の差、というやつだろうか。

「でね、その鬼がかわいそうなのよ。好物が大豆らしいんだけど、ちょっと食べただけで体中ボツボツだらけになっちゃうんだってさ」
「ふーん……」
楽しそうに各地の話をする瀞。それとは対照的に、白はとてもつまらなさそうにしていた。
「あとね、西国の村にも行こうとしたらね、道祖神のやつが邪魔してきたから蹴っ飛ばしてやったら殴られた。ほら、ここ」
瀞は白に左胸上部を見せた。確かに青あざができている。
「あー……道祖神は穏便なくせにね、ちょっと怒ると手が着けられなくなるからね」
白はどうやらやっと楽しい話題を振られたようだった。
「ところで代ちゃん。代ちゃんは道祖神に何かされたこととかないの？」

瀞が突然代に話しかけてきた。
「んなもんあるわけないでしょ」
白が話題をつぶそうとするのを、代の声が制した。
「あるよ」
「えーっ！？」
驚く白。あんなに驚く顔を見たのは久し振りな気がする、代はそう思った。
「暗い森の中でね、気づいたら十二体の道祖神に囲まれてた」
「ソレ道祖神チガウヨ」
瀞がガクガクブルブルしながらそう言った。
「多分昔の強力な結界だよ。……で、取り囲まれてたってことは、地蔵さんはみんな代ちゃんの方向いて……たんでしょ？」
「うん」
「倒れてる地蔵とか、なかった？」
「確か、なかった気がする」
「じゃあ、代ちゃんは地蔵十二体てやっと封じ込められるくらいの妖魔がいたところと、同じところにいたわけだ」
「そう……なのかな？……そう言えば、一昨日あたりから何か背中痛いんだよね」
「背中が痛い？……代ちゃん、地蔵の円の中に入ったのはいつぐらい？」
瀞の表情は真剣そのものだ。
「えっと……確か一昨日」
代がそう言ったとたん、白と瀞が顔を見合わせた。
「代、ちょっと着物脱いでくれる？」
白が言う。
「えっ……」
「いいから早く」
「……」
代は着物を脱ぎ始めた。

「ちょっと背中見せて」
瀞が寄ってくる。
「これは……ただのひっかき傷じゃあなさそうね」
代の背中には斜めに三本、浅い引っ掻き痕が残っていた。

「かといって、危険な引っ掻き痕って訳でもないみたいだしなぁ……」
白はそう続ける。
「何か変な気感じる？」
「んー……。何か外国っぽい」
瀞は代の着物を元に戻しながらそう言った。
「で、結局のところは？」
やはり気になる代。が、答えは
「……さっぱり分からない」
白と瀞は両手を肩のあたりまであげた。
「とにかく、代。今から私をそこに案内してくれる？」
「いいけど……」
「あ、私も行くから」
白は何故か手を挙げた。

三人は神社を出ると、鳥居と反対側にある鎮守の森的立ち位置の木々の間を通り、山を登っていった。
歩くこと二十分。ようやく目的の場合に到着した。
「ほら、あそこ。お地蔵さんが十二体」
代はかろうじて地蔵と分かる程度の石が円を描くように並んでいる場所を指さした。
「これかー……。やっぱり封印だね……あ？何か一体倒れてるけど……」
瀞は倒れている地蔵を足でつつきながらそう言った。
「あー……。暗かったし、怖かったから……。もしかしたら蹴っ飛ばしちゃったかも……」

代は苦笑いした。
「ふーん……」
しかし瀞は一つ引っかかるところがあった。
「（この地蔵……蹴ったくらいで倒れるようなモンじゃないんだけどな……）」

少ししてから、白が恐る恐る近づいてきた。
「ど……どうだった？ここからじゃ妖気も霊気も感じないんだけど……」
動きがかたい。緊張でもしているのだろうか。
「どうしたの？と言うか、自分の山なんだからこんくらい把握してんじゃないの？」
痛いところを突く瀞。
「あ、いや……この山さ……ちょっと歩くだけでも必ず死体見つけちゃうからさ……あんまり歩きたくないんだよね……」
「（その割には変なみかん取って来たりとか、色々うろついてるみたいだけど……）」
代はそう思った。
確かに、この間の人面みかんを取って来たのは白本人だ。
「ん……じゃ、白が吐く前に神社に戻るかな」
瀞はそう言うと、白の背に手を回した。
「そう？じゃ、私も」
代も戻ろうとする。その時
「姫ーっ！」
と言う声とともに、狼が一匹代のそばに走り寄ってきた。
「きゃぁっ！」
代はその場に尻餅をついた。なんせ向こうからデカい犬が走ってくるのである。腰が抜けても仕方がない。
「姫。驚かせてしまい申し訳ありませぬ」
狼はそう言って代の前に座った。

「狼……？」
遠くで瀞がつぶやいた。

「あ……人違いじゃないですか？私……お姫様じゃないです」
まだ動揺している代。目があちらこちらに泳ぐ。
「いえ、人違いではございませぬ。あなた様は姫様でございます。匂いで分かりまする」
狼は代の目を見てそう言った。狼なのに喋る、と言う点は誰もつっこまなかった。
「でも、人違いですって……」
「いえ、あなた様の背中には失礼ながら私めが付けた印がございます。故に、あなた様は姫様に間違いございませぬ。ですからこれからは、姫様の身を、我が命を懸けてお守りしてゆきたいと思いまする」
狼はどうやら代に仕えたいらしい。
「そんなこと言われても……」
「私は、姫様に封印を解いていただいたご恩を忘れませぬ」
狼は退かない。
「……もしかして、あなたは封印を解いた人イコール主人だと思ってたり？」
「そうにございます」
「あー……そっか……。でもごめんね。うちワンちゃん飼えないんだ」
「いえいえ、たいていのことはできまする故、その点は心配ご無用にございます」
犬……ではなかった狼はそう言って胸を張った。
「ま、いいんじゃない？自分でいろいろ出来るって言うんだしさ」
遠くからそう言う白。
「ん～……じゃあいいよ」
軽いぞ、代！

「では、姫。これより我が生涯かけて姫を守りまする」
狼はそう言って頭を下げた。
「でも、そんな姿で代を守れるの？」
またもや白。
「うぬ、その点は心配ござらぬ。姫をお守りするときは元の姿に戻る故」
「元の姿？」
代は不思議そうな目で狼を見た。
「ならば、一度元の姿に戻りまする」
狼はそう言うと後ろ足二本で立った。上半身が突如膨れ上がり、手足には五本の指に鋭い爪、顔はしかし狼のまま、まさに、狼人間が姿を現した。
「すっごーい！」
代は狼人間を見上げてそう言った。と言うのも、狼が元の姿に戻ったせいで代との身長差が頭二つ分ほど出来てしまったからである。
「あれは……狼男？」
瀞が小さくつぶやいた。すると
「狼男か。麓に降りた時に出会った少年にも同じことを言われた」
狼に聞こえていたようだ。
「では、そろそろ変身致しまする」
狼男はまた狼に化けた。
「ところで、あなた名前はなんて言うの？」
代が狼の頭を撫でながらそう言った。
「名前はありませぬ。姫から頂戴できれば光栄にございます」
「ん～……そうだな～……。じゃあ、次郎とかどう？」
「次郎、でございますか。では、その名、有り難く頂戴致しまする」
狼の名前は次郎に決定した。一発オーケーだ。しかし、何故次郎なのだろうか。
「では姫、帰りましょうぞ。ささ、背にお乗りくだされ」
「え……でも、私重いよ？」

少し戸惑う代。
「心配ご無用にござる。万が一、拙者が潰れて死んだとしても本望にございます」
「あ～……そこまで重くないかも」
「では。ささ、お早く」
代は取りあえず次郎の背に乗ってみた。意外としっかりしている。
それにもふもふしていて気持ちがよい。
「うわ～……なんだかもののけ姫みたい」
代は感動した。

すぐに次郎は瀞達に追いついた。
「そこのお二方も乗られるか？」
次郎は実に紳士的だ。
「あ、そう？乗せてくれるなら、乗ろうかしら？」
瀞は少し嬉しそうだ。さすがに白を支えたまま神社に戻るのは厳しいらしい。
「あ～……もふもふの布団が……」
白はと言うと、歩く気はまるでないようだ。
「姫、構いませぬか？」
次郎は代の方を向いた。首がみよんと延びて見えるのは多分気のせいだろう。
「私は構わないけど、次郎は大丈夫なの？」
家来を心配する代。
「姫。もしも今拙者が潰れて死んだとしても、姫からそのいたわりの言葉をいただけただけで幸せにございます」
「さっきと同じ返し方しないの」
代は次郎の耳を引っ張った。
「ははは。では、そこのお二方もお乗りくだされ」

少女一人と、見た目は少女二人を乗せた大きな狼は、所々道を間違えながらも神社へ、ゆっくりと戻っていった。

三人と一匹が神社に戻った頃には、もう時計が三時過ぎを指していた。

「ありがとうね。次郎」

代は次郎の背から降りると、頭をなでた。

「いえいえ。これくらいのこと何でもありませぬ。……あー重かった」

「あれ？今最後小さい声でなんか言わなかった？」

瀞が敏感に反応する。

「ん？気のせいでござろう」

普通に返す次郎。

「あら～？おっかしいなぁ……」

「あ～疲れた」

「ほらまた！」

「ん？気のせいでござろう」

「いや、今のは絶対に言った。ねえ白。聞いてたでしょ？」

「ん？」

反応したのは代の方だった。

「あ、こっちの白ね」

瀞はぐだっている山の神様を指さした。

「あー……？」

白はそう反応する。

「その様子じゃ聞いてないわね……」

「ま、取りあえず中入ろうよ。次郎は足ふき持ってくるからちょっと待っててね」

代はそう言って神社の中に入っていった。

「我が姫は実に心優しいお方じゃ。そなたらも見習ってはどうかな

？そちらのおなごなどは儂の背中の毛をずっとむしっておったしな」
次郎はそう言ってぐだっている白に近づくと、前足で着物の背中にポンと足跡スタンプを押した。
「あら、随分ときれいにつくのね」
感心する瀞。
「うぬ。封印されている間、暇であったのでこの練習だけをしていたのでな」
次郎は目を細めて青空を見た。

まだ少し寒い風が吹く。

そんな空を、烏が一羽横切った。

めぐりあわせ

これは、代が代わり人になる、ちょっと前のお話。

「むぅ～……せっかく携帯買ったのに、音信不通ってどーゆーことよ～」

九六は携帯を見つめながらベッドの上で足をバタバタさせていた。

「ちょっ……ホコリたつからやめて」

要は九六にそう言った。

もうこの時点で二人は付き合っていたのである。

「えー……何で何で何で何でー！」

「どわーっ！もー！足バタバタすんの止めろっつったろーが！！」

「……悪い」

いつもは怒らない要だが、変なタイミングでものすごく怒るから怖い。

「でもさー、せっかく携帯買ったのに、妹から連絡いっさい来ない

んだけど。どう思うよ？」

「気にしない方がいいよ。俺も妹から連絡来ないし……。ところでさ、その携帯買ったのって昨日でしょ？」

「うぬ」

「妹さんはくろの電話番号とかメアドとか知ってんの？」

それを聞いた九六は少し固まった。

「電話番号って、なに？」

この後、要の二時間にわたる携帯電話講習が始まったことは言うまでもない。

「ふぅん、で、電話番号ってのを相手が知らないとかけられないわけだ」

九六はどうやら納得したらしい。

「そうだよ。できれば同じ質問を十二回もするのは控えてほしいけどね」

「ねえ、要。今度出かけてきていい？」

何だかもう普通の人間くさくなっているが、大丈夫か？神谷九六。
「しょっちゅう居なくなってるんだから、今更許可なんていらないんじゃない？」
「だよね。じゃ、今から行ってくるよん」
九六はそう言うとさっと起き上がり玄関から飛び出した。
「あっ！ちょ！俺も行く……」
要が玄関の戸を開けたときには、もう九六の姿はどこにもなかった。
その間約七秒。
「ったく……」
要はしぶしぶ玄関に入り、扉の鍵を回した。
「俺も連れてってくれたっていいのにな～……」
少し寂しい要は、携帯で大学の友人を呼ぶことにした。
「あ、もしもしー？」
『んー？』
「山崎かー？」

『さあー……』

「さあー、じゃねーよ。今暇か？」

『すんげー暇』

「じゃあうち来いよ」

『いいぜ。酒とつまみ買ってこうか？』

「おっ、気が利くねぇ。頼むよ」

どうやら、要の部屋は今夜は宴会場になりそうだ。

九六が要の家をでてから五分、九六はすでに白山神社の境内に来ていた。

「うー……っ。ひっさしぶりに来たわね～……」

辺りはうっすら陰ってきた頃だ。神社の本殿に灯りがともる。九六はうーっと伸びをすると、履いているサンダルの音を立てないようにそーっとそーっと玄関まで移動した。中の人たちにはまだバレていないようだ。

次に九六は引き戸をゆっくりと開け始めた。カラカラカラカラと小さな音が、薄暗い玄関に響く。開いた隙間から中をのぞき込む九六。

その時

「何をやっとるんじゃ」

背後からの声にびくっとする九六。こわばった表情だったが、後ろを振り向くとその表情もほぐれた。

「なんだ～……伊達さんかぁ。驚かさなくたっていいのに～……」

「フッ。コソ泥みたく帰ってくる方が悪い」

伊達、と呼ばれた白髪の老人はフッと笑うと九六より先に玄関へと入った。

「まあお入り。妹さんも待っとることだしな」

「えっ……あーあ、教えちゃったのかーつまんないなー」

九六は頬をぷーっと膨らませて見せた。

「未来のことが分かるなんてセコすぎるよ」

「セコくない。それよりも頬を膨らませるのをやめなさい。歳を考えよ歳を」

伊達はニコッと微笑むと九六の目の前で引き戸をピシャッと閉めた。

「わっ！……こらぁ！伊達ぇ！人の目の前で戸閉めんなぁ！」

九六は慌てて戸を開けた。

戸を開けると、伊達の姿はもうなかった。目の前には薄暗い廊下の壁があるだけだ。

「この壁、絵でも掛ければいいのに」

九六はそうつぶやくと靴を脱ぎ、神社の中にあがった。

「さて、どっちだったっけか？」

九六の両脇に薄暗く伸びている廊下。たしか、どちらかが風呂場方面への廊下でどちらかが居間方面への廊下だ。

悩むこと五分。九六は左側の廊下を選んだ。進む度にギシギシギシギシと床が鳴る。廊下の先がだんだん明るくなってきた。どうやらこちらが正解らしい。

少し歩いて、やっと居間についた。そこでは伊達と白がお茶を飲んでいた。

「姉上、何の用できたの？」

いきなり白から質問が飛んでくる。

「そこはさ、まあ座ってみたいなこと言うところじゃない？」

「座るより先に答えて」

「……ったく、怖い妹だねぇ。ほら、携帯買ったんだけど白の携帯の電話番号知らなくてさ」

九六は勝手に座ることにした。丸い机を三人で囲んでいる。

「なんだ、そんなことか。じゃ、今入れるからちょっと携帯貸して」

差し出された手のひらに、九六は赤い携帯を置いた。

「おや、くろなのに赤い携帯電話か」

伊達が反応する。

「いいじゃん色なんて何でもさ。それに私九六って名前嫌いだし」

九六はそう言ってお茶を一気に飲み干した。九六の正面では白が赤い携帯と白い携帯を近づけて何かしている。

「ほお、自分の名前が嫌いとな」

「名前自体は嫌いじゃないんだけど、字が嫌なんだよね～…。黒、ならまだいいのに何で九六、なんだろ。ほんっと気に入らない」

「父上と母上に聞いてみたら？」

白が携帯を返しながらそう言う。

「聞ける訳ないでしょ。あんな怖い人達……。で、さっき何やったの？」

九六は携帯をいじり始めた。特にさっきと変わったようなところはない。

「電話帳に私の番号とメールアドレス入れといただけ」

妹の口から発せられた聞き慣れない単語に

「白、メールアドレスって、何？」

「メールアドレスも知らないの？……そんなの彼氏に聞いたら？」

何と、この時点で白は九六が付き合っていることを知っていた。

「えーでもさぁ……」

「えー、じゃないの」

妹にあしらわれる姉。情けない。

「お二方よ」

さっきまで黙っていた伊達が口を開いた。

「わしは……代わり人引退じゃ」

そんな言葉に驚く姉妹。

「えっ！？」

「……次の代わり人は見つかってるの？」

白と九六がそういう。すると伊達はすっと立ち上がり、自分の部屋へ行ってしまった。

「……最近元気なかったのは、そう言うことだったのか……」

白が伊達の飲み残したお茶を見ながらつぶやく。

少しして、伊達が手鏡を持って戻ってきた。

「九六よ、お前はさっき、次の代わり人は見つけてあるのか聞いただろう」

伊達は手鏡を見ながらそう話す。それの返事として、九六はコクンとうなずく。

「ほら、この手鏡を見てごらん」

手に持っていた手鏡を机の上に置いた。鏡には若い、高校生くらいの少女が映っている。

「こいつが……次の代わり人？」

白は伊達の目を見た。返事は、頭の軽い上下運動のみ。

「この娘は、近いうちに必ずここにやってくる。わしの代わり人としての仕事は、その日までだ」

そういうと伊達はうっと立ち上がり、台所へ足を向けた。

「じゃ、飯にしようか。白、ちょっと手伝ってくれ」

「わかった」

伊達のあとを追う白。そして、居間にいるのは九六だけになった。

その当の本人は、机の上に置き去りにされた鏡を食い入るように見ていた。正確に言うと、鏡に映っている少女を食い入るように見つめていた。

「この娘……なんだろう、誰かにほんのり似てる気がする……。誰だ……？」

この時まだ九六はこの少女が恋人、御社要の実の妹だとは、知る由もなかったのである。

まあ、知ってても何もないけど。

九六が代のことを知るようになるのは、また、別のお話。

風鈴とお人形さん（イ）

時が過ぎるのもあっという間で、白山にももう夏が訪れた。アブラゼミのやかましい声が耳を刺す。そんな、夏の強い日差しの中でも、代は境内の掃き掃除をしていた。

「よく姫はこの灼熱の日差しの中掃き掃除なぞしておられますなぁ……」

木陰でだれている次郎。犬には確かにこの気温はつらい。

「まあ……暇だしさ……。でも長時間やってたら日焼けしちゃうなぁ」

代は被っていた大きな麦わら帽子をひょいと上に上げると、真っ青な空にどんと居座る入道雲を見上げた。遠くでは雷の音がする。もう少ししたら、この辺りもあの厚い雲の下に入るのだろう。

そんな代を、白は障子を開け放した居間から見ていた。

「よくもまあこんなに暑い日に外に出ようと思うもねぇ。熱中症になっても知らないんだから」

「人間の考えることはよく分からないもんね」

瀞も同感な様だ。ちなみに瀞は天の羽衣が乾くと神社から出て行ったが、一昨日また帰ってきたのである。

「ま、とりあえずスイカでも切ってこようかな。確か冷えてたはずだし」

白が立ち上がろうとする。それを瀞は

「あ、いいよ私やるから」

と言って座らせた。いいぞ瀞。白に切らせるとどうなるか分からない。

「そう？じゃ、私はお茶でも入れようかな」

「うん。それがいいよ。だってあんた昔それで包丁振り回して当時の代わり人の右手首をスパッと」

「その話はしないでっ！」

マジ顔になる白。自分の中でも淀んだ記憶のようだ。まあ、そんなわけで周囲の人たちは白に包丁を握らせたくないらしい。

白がお茶を淹れていると、次郎が息を切らしながらやってきた。

「どうした次郎？暑いのか？」

「姫がお倒れにならせられました！」

「えっ！？」

白は履き物も無しに居間から境内へと飛び降りた。少し向こうの陽(ひ)向(なた)には箒をつかんだままの代が倒れている。

「代！しっかりなさい！」

揺さぶってみたが、代は反応しない。するとそこへどこからともなく山嵐が現れた。

「あらん？熱中症？」

山嵐はそう言って代の顔をのぞき込む。やはり顔色は悪かった。

「どどどどうしよう……」

何をしていいのか分からなくてオロオロしている白を横目に、山嵐は代を日陰まで運んだ。

「そこの狼男。代の足が心臓より高くなるようにしてくれないか？」

そう言われた次郎は迷うことなく代の足を背中に乗せて伏せをした。

「山神、氷とタオルをたくさん持ってきてくれ」

「わ……わかった」

やり手の経営者のような指示が山嵐から放たれる。その指示は少しも迷いがなかった。なんか医者みたいだ。

「……っ。？」

ふと気付くと代はまたあの真っ白な世界にふわふわ漂っていた。

「またここか……」

ここにくるのは二度目。代はここがどこなのか分かっていた。とりあえず前方に見えているモノクロに見える神社へ向かってふわーっと移動した。

近づくと分かるのだが、この神社、本殿だけしかなく意外と小さい。賽銭箱をよけ、階段を上ってゆっくりと障子を開けた。

「……あり？」

障子を開けたにも関わらず、中から声がしないのに代は拍子抜けした。気になった代はそっと中を覗いてみた。中ではモノクロの『代』が横たわっていた。肩の辺りが動いているので、どうやら眠っているらしいことが分かる。

代はニヤッと笑った。サンダルを脱ぐと眠っている『代』に近寄った。そして耳元に顔を移動させ

「起きろーっ！」

「うわぁぁぁぁっ！？」

寝ていた『代』はばっと起きあがった。それとほぼ同時に鼻の辺りを抑えてうずくまる代。

「うぐぅ……」

代から呻き声が漏れる。状況が理解できていない『代』は少々戸惑っていたが、直に全てを理解した。

「……何やってんの？」

代に、少し心配そうに話しかける『代』。

「鼻が……」

代は目に涙を浮かべながらそう答える。どうやら『代』が急に起き上がったとき頭が代の鼻を直撃したらしい。

「バカな事するからよ。ところで、何でこんな所にいるの？」

「わ……わかんらひ」

「わかんらひ？」

「わかんらひ！」

「えっ？」

「……っぁぁ。痛かった……。わかんない、と言いたかったわけですよ」

「代……だっけ？」

『代』は首を傾げる。

「そうだけど……もう名前忘れた？」

代はほんのりと目を落とす。

「あ、いや、忘れたわけではないんだけど、自分と真同じな人間が居るとどうもね……」

そう言って顔をしかめる『代』。そう言えば『代』は、いつもここに一人で居るのだろうか、代はそう思った。

「あ、そうだ。だったらさ、あ」

『代』が何かを言おうとした、そこで代の記憶はとぎれた。

「う……んぬぐぐぐ……」

キラキラ光る何かが代の顔を照らしている。それが木洩れ日だと分かるまでに少し時間がかかった。気持ちが悪い。だるい。

「姫、お目覚めでございますか」

ふくらはぎの下で何か毛むくじゃらの生き物が動いた。少し頭を持ち上げ、目を声のした方に向ける。そこには次郎が居た。

「あぁ……」

代はまた目を瞑る。夏のむわっとした風が木の葉を揺らしながら吹く音に紛れて、足音が近づいてくるのが分かった。

「どう？」

男の声がする。この声は聞いたことがあるなぁ……。確か……山嵐さんだったっけ？

「お目覚めになられた」

この声は……次郎だよね。

「やあ。生きてる？」

あれ、なんかこの間会った時と比べると、なんか感じ違うなぁ……。

「ええ……なんとか……」

喋ると頭が痛い。何でだろう？ｗｈｙ？

「熱中症だよ。しばらく安静にしてなさい」

代はまた、妙な違和感を感じつつ、また眠りに落ちた。境内の木陰で。

「あのさぁ……あの山嵐、何かおかしくない？」

スイカにかじりつきながらそう言う白。隣では瀞がスイカの皮にかじりついている。

「そうねー……。確かになんか変だよねぇ。ノリとか。あいつも熱中症なんじゃん？」

スイカの皮を食べる、瀞。

「……あんた、実も食べたら？」

「私なぞ皮で十分でござんす」

白が差し出したスイカを瀞はさらっと断った。

「スイカの皮はね、一度食べ……」

瀞の言葉が途中で消えた。

「ん？どーした？」

白はふっと横を見る。横にいる瀞の目は境内をじーっと見つめていた。それに釣られて白も境内を見た。境内には三人と一匹がいた。三人……？

「えっ？」

代の動きが固まる。なんと、境内に山嵐が二人いるのだ。瀞が固まるのも、何となく分かる気がした。

その頃境内では……（代は眠っているので出てきません）

「やあ。何やってんの？」

山嵐に近づく山嵐。

「何って、看病さ。代ちゃん熱中症みたいでさ」

そう答える山嵐。

「ふーん……だったら自分の姿ででてくりゃいいのに」

「そりゃ無理さ。だって初対面の僕がいきなり出てっても『誰？』ってなるのは必至だろ？」

その会話を目を丸くしながら聞いている次郎。

「んー……。まあそうなるね。でも、何で代ちゃんを助けてあげようと思ったの？」

「それは……」

「それは？」

「それは……また今度、かな」

代の近くにいた方の山嵐は、そう言うとふわーっと、周りの景色にとけ込むようにして消えてしまった。

「ふぅ。全く、モテるってのもたいがいにしてほしいなぁ……」

本物の山嵐はそうつぶやいて、木陰で眠っている代に目をやった。

一段落つくと、山嵐は神社の縁側に近づいた。まだ白と瀞は固まっている。その固まっている瀞の手からスイカの皮をするりと抜き取るとかじり始めた。

「んー……やっぱ、スイカは皮に限るねぇ」

風鈴とお人形（ロ）

「うに……」

次に代が目覚めたのは自分の部屋（代わり人の部屋）だった。痛む頭を壁掛け時計の方に向ける。なんと既に深夜零時を回っていた。誰が布団を敷いたのだろうか？代は何となく気になった。そんなときスッ、と、部屋の障子が開き

「あ、起きたんだ」

タイミング良く白が入ってきた。そしてまたすぐ出て行ってしまった。

「……何しに来たんだろ？」

代が不思議がっていると、今度はスイカの乗った皿を持って戻ってきた。

「まあ今日はスイカ食べときなさい。里見先生曰わく、熱中症だねぇ、だとさ」

白はスイカを手に取るとそれにかじり付いた。

「まったく、代ももう少し」

ガリッ

「ぐっ……」

変な音がしたあと、白は空いている皿に砕けて四つになった種を吐き出した。

「……もう少し健康に気を使うべきよ」

「ああ、種噛んだんだね」

代はようやく気づいたらしい。ちと遅いぞ、代。

「……」

口を少し開け、何か言いたそうな顔のまま固まる代。

「……どうしたの？」

「……何か言いたかったんだけど何言おうとしたのか忘れちゃった」

「じゃあスイカでも食べて思い出しなさい」

白はスッとスイカを差し出す。

「うん。そうする」

しばらくの間、二人の居る部屋にはしゃくしゃくとスイカをかじる音が響いていた。

で、早くも翌朝。代はまた、昨日のように境内に出て掃き掃除をしていた。

「あの娘も物好きだねー……」

瀞は昨日と同じアングルから代を見ていた。昨日と代わって今日は湯飲みを持っている。

「うん……。それよりさ、気になることがあるんだけど」

白もまた、昨日と同じ所に座って代を見ていた。よほど心配なのだろう。

「アンタはいつまでここにいる気？」

白はふっと横を向いた。視線が代から瀞へと変わる。

「まあまあいいじゃん。どーせ人も来ないような神社、私の一人や二人居たって何も変わらないわよ」

「いや、疫病神が居る限り毎日が厄日になりそうな気がする」

確かにそんな気はする。

「だって、アンタが来てからまたここいらに生き物が寄りつかなくなったし。それにサボテンも枯れたし。一体何をまき散らしてんのよ」

と、白は続ける。

「いやいや、サボテン枯らしたのはそっちの責任でしょ。あれ水やりすぎると枯れるよ？」

瀞は慌てて片方だけ弁解する。身振り手振りもついているのでよほどパニクって居るようだ。

「それ、前にも聞いた。だから水はやらないようにしといた。なのに枯れたのよ」

「そら、いくら何でも水がなければ植物は枯れますわなぁ」

「水やるなっつったのは誰よ！」

「やりすぎ注意と言ったの。やるななんて一言も言ってないよ～」

「……とまあ、ろくな事がない訳なのよ」

白が言う。すると遠くから

「サボテン枯らしたのは白が悪いよ」

と言う代の声がした。なんという地獄耳だろうか。まあ、たしかに、サボテンに水をやらなかった方が悪い。と言うか何の話をしているんだね君たちは。

「そーそー。サボテンは水をやらなかった方が悪い」

近くにいないはずの山嵐の声がした。三人とも同じように辺りをキ

ョロキョロ見回す。見た感じどこにも山嵐の姿はない。

「……透明になってんの？」

と、白がつぶやいたとたん、賽銭箱からガタガタと音がし始めた。

「……成る程。そこにいた訳か」

目を細くして賽銭箱をじっと見つめる白。見ていると賽銭箱の上蓋が開き、中から手が出てきた。ズズッと音を立てながら手が蓋をずらしていく。するとその直後、バタンと大きな音を立てて蓋が境内の石畳へと落ちた。

「あっ」

少し焦ったような山嵐の声が聞こえる。どうやら蓋が落ちたのは予定外のことだったらしい。

「……っと。うぅーぃ……」

賽銭箱からひょこっと顔が出てきた。髪には埃がついている。

「アンタ、いつから居たの？」

白が口を開く。隣にいたはずの瀞はお茶セットを持ったまま建物の奥へ行ってしまった。

「いつって……昨日の夕方からかな。あー痛ぇ」

山嵐は首をぐるぐる回し始めた。

「ほら、昨日偽物出たじゃん？私の偽物を放っておくわけにはいきませんわ！」

「おーい、だいじょーぶかー？」

「もちろん。ただこの賽銭箱は確かに通気性抜群で丈夫だけど妖怪（ひと）が寝ることをちっとも考えてないな」

因みにここの神社の賽銭箱、結構昔の神主さん（本当は代わり人の他に神主が要る。今は何故か代わり人だけだが）のお手製なので、格子状の蓋を箱に取り付けただけと言う他と比べても手の込んでいない造りなのだ。

「そりゃ、素人の手作りなんだから仕方ないでしょ。それに賽銭箱は寝るところじゃないし」

「ああ、そりゃさいせん」

「……」

白が「えっ」みたいな顔で固まる。

「……すまん。悪かった。ハイそうですぜーんぶ僕が悪いですよ」

どんどん暗くなる山嵐。さっきまでひょこんと出ていた頭がまた賽銭箱の中に沈んで行くのを代は見ていた。

「あっ、よかった。元気になったんだね」
背後からの声に、代はゆっくりと振り向いた。そこには知らない浴衣の少年……見た感じ代の三つ上くらい……が立っていた。
「……あー……」
代は必死に目の前の少年が誰だったか思い出そうとした。が、思い出せない。雰囲気は何となく覚えているのだが。
「……まあ、判らなくて当然かな。ちゃんとした姿で君の前に現れるのは」
少年は髪を後ろで結んでいる頭を何気なく掻いた。多分癖なのだろう。
「初めてだからね」
すると代は何か思い当たったのか、目を大きく見開いた。
「もしかして……昨日の変な感じの山嵐さん？」
「おっ、正解正解。何で分かったの？」
少年はうれしそうな顔をして手をたたく。
「んーと……何か、感じが似てたから……かな？」
「へー……なかなか鋭いね……。あ、自己紹介まだだったかな？」

一回、深呼吸をして間をおく。

「僕は鈴之助。世にも珍しい、風鈴の憑喪神さ」

「鈴之助さんかぁ。鈴の憑喪神じゃないんだね」

代は笑顔でそう言った。それはもう、罪なほどのチャーミングな笑顔だった、と後に鈴之助は語る。

「おー、鈴之助！また来たのか！」

よっこらしょ、と山嵐が賽銭箱から出てくる。

「来ちゃいけないこと、あるかな？」

鈴之助は軽く微笑みながらそう返した。何だか迷惑そうだ。

「お前な、いくら代ちゃんが好」

「言うんじゃなーい！！」

「づぁ゛っ！」

鈴之助が投げた石が山嵐の眉間に直撃。山嵐は後ろに倒れて、今度は頭から賽銭箱に入ってしまった。縁から足だけが見えている。

「べっ、別に今のは気にしなくても……」

鈴之助は代の方を見た。代はぽかんとしていた。そのぽかんとした

顔がまた可愛かった、と後日鈴之助は語る。

「ま……まあ、今回はこれくらいという事で。……ね」

もの凄い動揺っぷりを披露してくれた憑喪神の少年はそう言い残すとあっという間に境内とつながる長い階段を駆け下り、どこかへ消え去ってしまった。

「何だったんだろう？あの人……」

鈴之助が去った後をぽつんと眺める代。

「あいつはね」

「うわっ！」

いつの間にか、背後に山嵐が来ている。

「あいつはね、代ちゃんの事を好いとるのじゃ」

「えっ？」

「気づいてなかった……の？」

「山嵐。代なんだから仕方ないわよ」

少し離れた縁側から白が口を挟む。

「ああ、まあそりゃそうか。代ちゃんだもんね」

おい、納得するな。まあ、いいけどさ。

「ん？どーゆーこと？」

やはり状況を理解していないらしい代。その後ろを、夏の蒸し暑い風が掃き集めた落ち葉をサーッと舞い上げた。

人形と鳥居（八）

代は夢を見た。またあの、モノクロ世界の夢だ。

「ちょっと、この間なんか言い終えないうちに消えたでしょ」

そんな声がする。振り返ると、そこには『代』の姿があった。

「……？」

首を傾げる代。覚えていないようだ。

「ほら、あの」

「あっ！思い出した。あれか」

ポンと手をたたいて『代』を見る。

「あなたの名前を考えたんだよ」

『代』を指差す代。

「名前……？」

「二号、なんてど」

「拒否」

「ひどいなぁ……。せっかく考えたのに」
「私に二号なんて名前を贈る方が酷いわよ」
「じゃあ、そうだなぁ……。マリアかなんかでいいんじゃない？」
「マリア……？」
そう言うと『代』はくるっと代に背を向けた。
「マリア……マリアねぇ……」
「えっ？もしかして気に入ったりしてる？」
代は素早く察する。こう言うときだけやたらと勘がいいのが彼女だ。
「なっ……べっ…別にそんなんじゃないわよ。まあ、仮の名前としてなら、そう呼ばせてあげてもいいわ」
サッと振り向く『代』の顔が少し赤く見える。この瞬間から『代』はマリアになった。どう見ても和服日本少女だけど。
「あら、そう言えばさっきまではそうじゃなかったけど、今なんかカラーになってきてない？」
キョロキョロしながら、代がそう言う。
「そう？私は何にも分からないけど」

『代』は……あ、いや、マリアはさらっとそう答えた。言葉にしてはいないが、やはり態度で分かるものだ。彼女は新しい名前を大層気に入っている。間違いない。

「いやいや、ぜっ」

「もう十時なんですけれどー」

代が目を覚ますと、顔の真ん前には白の顔があった。

「えっ？」

代は慌てて枕許の目覚まし時計を見た。四時半で止まっていた。

「えーっ……それはないよ……」

「無いのは代の寝坊でしょ！ほら！早く着替えないと大宮さん来ちゃうよ！」

そう言えば今日は定期見回りの日だった。すっかり忘れてた。

「あー……どうしようか？」

布団にぺたんと座りながら白を見上げる。

「んー……取りあえず風呂にでも入ってきなさい！」

白が代を蹴飛ばした。

「うわぉっ！」

ぼてっと倒れる代。普通なら倒れる先は畳の上だが、何故か脱衣所の床に倒れていた。

「……あり？」

めんどくさそうに立ち上がる代。

「まあ、いっか」

深いことは考えない。これが代のいいところだ。

ちょうどその頃、神社の前に車が一台とまった。運転席のドアが開き、中からスーツ姿の男が現れた。

「あー……疲れた。非常に疲れた」

男はダルそうな雰囲気を漂わせながら神社へ続く階段を上っていく。

「あー……暑い。なんでこんなに暑いんだ」

辺りでは蝉の声が夏を引き止めていた。

「あっ！大宮さん！」

男はすっと顔を階段の一番上に向けた。

「やあ、山神。元気だった？」

大宮がそう言うと白が階段をスタタタッと駆け下りてきた。

「あっ！大宮さんメガネじゃない！何かあったの？」

「ん？今修理に出してててね。当分はコンタクトレンズかな。ところで、鳥居はどこに行ったのかな？」

大宮は不思議そうに辺りを見回した。いつもなら階段の一番上か一番下に大きな石造りの鳥居があるはず（この時点でおかしいが）なのだが、今日はない。

「ああ……あの鳥居勝手に動き回るから面倒なんだよね」

と白。

「あっ、動くんだアイツ」

長い間この神社を見てきたつもりだったが、まさかあの鳥居が動くとは知らなかった。大宮は新たに学んだ。

その頃。
代は風呂場の戸を開けた。どうやら先客がいるらしい。
「あら、こんな朝から珍しいですね」
湯煙でよく分からないが、湯船から女の声がした。
「ええ……まあ……。ところで、どちら様でしょうか……」
代は不審そうな顔をした。
「どちら様って、ひどいですねぇ。ほとんど毎日会ってるじゃないですか」
「えっ？」
「……まあ、いつか分かりますよ。フフフッ」
広い風呂場に笑い声がこだまする。
早く先客の正体を知りたい代は、体をさーっと流すと湯船に飛び込んだ。ザバッと水しぶきが散る。
「うわっ！」
先客が小さく叫んだ。
「んー……確かに何か知ってるような気もしなくはないんだけどなぁ……」
まじまじと顔を見つめる代。彼女には失礼と言う言葉を教えた方が

よいのではないか。

「わっ……近いなぁ……。じゃ、ヒントあげましょうか？」

「ヒント？」

「私はね、代さんが階段から落ちたのも見てますし、境内で倒れたのも知ってるんですよ。あ、もちろん、半年前、代さんがここに来たのも」

監視カメラみたいだなぁ、代はそう思った。

「うーん……何だろ？私をよく見てるってことは境内の辺りにいるってことでしょ？……もしかして賽銭箱ちゃん？」

代のどやっと言うような顔。

「いいえ」

ニコッと返された。

「えーっ！絶対賽銭箱だと思ったのに！……じゃあ何だろ？鳥居とか？」

「あ、正解です」

鳥居は驚いたような表情で代を見た。

「やっぱり代わり人さんは勘がいいんですね」

「あ、当たったんだ。……まさか鳥居ちゃんだとは思わなんだな」
「えっ？」
「……まさか鳥居ちゃんだとは思わなかった」
代はさらにまじまじと鳥居の顔を見つめる。
「名前は何て言うの？」
「名前ですか？そんな物はないです。私には必要ありませんから」
鳥居はそう言うと縁に寄りかかって格子戸から見える空に目をやった。
「今まで長い間、特に誰ともお話しなかったんですよ。だから、名前は無いんです」
そう話す鳥居の目は少し、悲しそうに見えた。
「お話したくても私の声が聞こえる人は少ないんです。私は妖怪でも幽霊でも、憑喪神でもありませんから」
「……じゃあ、鳥居ちゃんは一体何なの？」
「わかりません。わかることと言ったら、私はただの鳥居だと言うことだけですかね」
外から木々のざわめく音が聞こえる。

「フフッ。おかしい」

代はくすくすと笑い始めた。

「だって、ただの鳥居が人間の姿になって動き回れるわけないよ」

すると怪訝そうな顔をする鳥居。

「それは……」

「まあまあいいじゃないですか。昔は昔今は今。少なくとも、今は私と話ができるでしょ？それじゃだめ？」

なぜこの代わり人はこんなに馬……楽天的なのだろうか。鳥居は不思議になった。

「……代さんは元気ですね。ちょっとうらやましいです」

鳥居は代に顔を向けた。

「まあ、私は人間だからこう思うんだけど、やっぱり人生愉しく過ごさないと。できるだけね。じゃ、私はお先に」

代はそう言うやいなや、湯船から飛び出すと脱衣所に向かった。やはり人間には少し熱すぎたようだ。

「……変な人」

鳥居は、少しだけ心が温まった気がした。元は石なのに、何故か、

そう感じた。

「それでいて……面白い人ですね。あなたに似ている気がします。そう思いませんか？ハジメさん」

鳥居は、また格子戸から見える青空にそうつぶやいた。

人形と封印と（二）

「やあ、代ちゃん。お風呂上りかい？」

スーツを着た眼鏡男が居間から顔を出して話しかけてきた。

「うん。そんなとこ。いらっしゃい」

代はバスタオルで髪を拭きながら居間にやってきた。それを見た白が呆れ返る。

「代・・・袴くらいあっちで着けてきなさいよ」

「いいじゃん、別に。大宮さんなんだし」

「え？どう言う事？」

ちょっと驚く大宮。

「いや、特に深い意味は無いよ」

そういうと代はバスタオルを次郎の背中に乗っけた。

「じゃあ次郎。このタオルも干しといてね」

「了解いたしましたっ」

次郎と言われた犬は長い廊下をツカツカ音を立てながら行ってしまった。それを見送るとたんすを漁る代。どうやら袴を探しているら

しい。

「・・・なんだかだんだんとあのワンちゃんの扱いが雑になってない？しかもあれ、狼じゃないの？」

少し苦笑いの大宮。まあ確かに犬にタオル干しを頼むのもどうかと思う。

「ま、いいんじゃない？あの犬は好きでやってるみたいなんだしさ」

白が大宮の持ってきた差し入れの『ひよっこ』の包装を雑に引き裂きながらそう言った。

「お、あったあった」

代の方は袴を見つけると隣の部屋に行ってしまった。

「それにしても代ちゃんがこんな時間に風呂なんて珍しいね。なんかあったの？」

「目覚まし時計が止まってて鳴らなかったらしいよ・・・・・・ムグムグ・・」

「ははあ、寝坊ってことか」

「そゆこと・・・・・・ムグムグ・・・・・。もう一個いい？」

白は箱の中のひよっこにまた手を伸ばした。このままではひよっこが全滅するのも時間の問題だろう。

『ウワータベラレチャウヨ！タベナイデヨ！タベナイデヨー！』

「・・・・・大宮さん！」

大宮の台詞のせいで少しひよっこが食べづらくなった白。

「あーん・・・」

『ウワァ！クワレルゥー！サヨウナラオカアチャン！サヨウナラキヨウダイタチ！サヨウナラ！！』

「うーっ！！大宮さん！やめて！」

ちょっと怒った白。

「ごめんごめん。早く食べないからちょっといたずらしたくなっちゃってさ」

「もー・・・・・。それじゃ、いただきます」

はぐっ

『グアアアアァァァァァァァァァァァァ！！！！！！！！！』

「むわっ・・・・もーみままん！！」

ひよっこを口に含んだまま何か言おうとしたため変な風になった。

「分かった分かった。悪かったよ」

そんな遊びをしていると、隣の部屋から着替え終えた代が戻ってきた。

「あれ、何やってたんですか？」

「今？ひよっこの気持ちを代弁してたところ」

大宮は代にもひよっこを投げ渡す。

「何か面白そうですねぇ」

「面白くないわよ！」

白はお茶を飲み干してそう言った。ちょっと機嫌が悪そうだ。

「ははは、ごめんごめん」

大宮が白の頭をなでると、たちまち上機嫌にもどる。やはり、山の神様の習性なのだろうか？

「・・・さて、じゃ、僕はそろそろ職場に戻るとするよ。そんなに長くいる予定じゃ無かったしね」

大宮はよっと立ち上がった。

「えーっ、大宮さんもう帰っちゃうのー？泊まってったらいいのにー！」

「ごめんごめん。夏場はエアコン故障が多くてこっちも忙しくって

さ。それじゃ、また来るよ」

そう言うと公務員は颯爽と帰っていった。

「あー・・・・帰っちゃったよ・・・。ところで代。ひよっこ、まだいる？」

箱の中のひよっこはあと三匹生存している。

「そうだね・・・あと一個ちょうだい」

「ほい」

白は代にひよっこを渡すとグフフと怪しげな笑いをしながら自室に戻っていった。そんなにひよっこが好きなのだろうか？

居間に一人残された代。時計を見るとまだお昼には程遠い。

「さて、お昼まで何しようかな～・・・」

ぐぅぅぅぅぅ

突然代のおなかが鳴いた。そういえば今朝から何も食べてない。

「・・・・まずはひよっこ食べるか」

代はひよっこの包み紙を丁寧に剥がした。そして

「いっただっきまーす」

ひよっこの頭からかじる。残りは胴体半分だけとなった。本物だったら多分即死だろう。変なこと考えさせるんじゃない。グロいだろう。

「んんーーー・・・・おいしい」

代は午前の至福の一時を満喫した。

代がお茶を飲んでゆっくりしていると、突然後ろの障子が開いた。

「いやぁ、こんにちは」

突然の訪問者は、神出鬼没の山嵐だった。

「うわ・・・・。びっくりさせないでくださいよ・・・・」

「いやいや、実は知らせたいことがあってねぇ・・・。よっと」

山嵐は下駄を脱ぐと縁側に飛び乗った。

「代ちゃん、君の体の中のお首様を開放しようかと思うんだね」

「・・・・・・というと？」

「君は自覚していないだろうけど、やっぱり代ちゃんの体には負担が大きすぎるんだよねぇ。で、このままほっとくと、多分君大変なことになるというかなんと言うか・・・・」

「大変な事って・・・？まさか、死ぬとか！？」

「うーん・・・まあ・・・・社会的に死ぬというかなんと言うか・・・・まあ、とにかく代ちゃんにとっていいことがない訳だ。で、なんとこの山嵐、一晩寝ずに考えました！で、その案というのがだな・・・その前にお茶ちょうだい」

代は急いでお茶を淹れて山嵐に手渡した。ゆっくりとそれを飲む山嵐。

「・・・・・・・・ふう。あー・・・・久々のお茶はうまいねぇ」

一気に和みムードの山嵐。

「で、山嵐さん、その案というのは・・・」

「案？・・・・ああ、あれね。代ちゃんの中からお首様を引きずり出して、別の人形に封じ込める。わら人形とか」

「藁人形？ちょっと酷過ぎませんか？」

「じゃあガンプラ」

「それはそれでかわいそうですね・・・・。まあ、とにかく聞いてみます。一応同意は取っといたほうがいいですよね？」

代は自分の胸の辺りをさすりながらそう言った。

「もちよ。同意取っといたほうが安全に事を進められるねぇ。途中

で暴れられたりしたら、多分代ちゃん内臓が飛び出し・・・」

「え〝っ・・・・・」

「までは行かないけど、多分一生昏睡状態になったりするんじゃないかな。というわけで交渉よろしく」

「了解です。まあ何とかやってみます」

「よしよし。それじゃ、また来週来るから。じゃね」

そう言うと山嵐はふっと消えてしまった。飛び去ったわけではないので多分妖術の一種か何かだろう。

「来週って・・・・遠すぎじゃないかなぁ・・・」

代は突然不安になってきた。今まではお首様とは一応いい感じに接してこれたが、この話をしたらどうなるのだろう。激怒されたら多分代では勝ちようが無い。

「（どうしよう・・・・）」

代は二匹目のひよっこに手を伸ばした。

「あづいーーーー！」

突然白が代の部屋にやってきた。代が居間から自室へ移動し、座って一息ついたらの状況だ。ちょっとタイミングが悪い。

「あれ、どうしたの？」

代が聞く。

「部屋のエアコン壊れたー・・・あづいー・・・」

「水風呂にでも入ってくれれば？」

「その手があったか！」

白は代の提案に乗っかることにした。確かにあの風呂の広さなら水を張れば軽いプール程度にはなる。白は部屋を飛び出していった。

「・・・・・・ほんと、どうしようか・・・」

代は悩んでいた。言うべきか、言わざるべきか。

「・・・・・・・・・・・・やっぱだめだ。どうしよう」

代は、今までもったことの無い、恐怖ににた感情を感じていた。途中で暴れられたら内臓が飛び散るとか言っていた。かなりグロいことになる。それだけは避けたい。

「言ったほうがいいのかな・・・・でもなぁ・・・」

「姫、いかがいたしました？」

椅子の下からにゅっと次郎が出てきた。どうやら話を聞いていたらしい。

「次郎・・・私どうしたらいいんだろうね」

「話してみては？何かございますれば、その時はその時でございましょう」

「・・・まあ、それもそうだね。話してみよっか」

代はほんの少しだけ心が軽くなった。この程度で軽くなるのはまあどうかと思うがそれが彼女のいいところ（？）なので特に口出しはしないでおこう。

時期

白はガラガラッと音を立てて浴室の戸を開けた。湯船で泳いでいた河童たちがいっせいに白を見る。

「うわっ、妖怪(ヒト)多いなぁ・・・」

だがそれも一瞬で、河童たちはまた泳ぎだしたり水を掛け合っていたり。

「やっぱこの時期だし、みんな考えること同じなのかねぇ」

「まあまあ、いいでねぇか。ここは皆の風呂なんだしよ」

久々に聞く声。これは狸の声だ。

「あら狸さん、お久しぶり」

白は体に水をかけながらそう言う。

「今日は銀次さんと幽次さん一緒じゃないの？」

さっと体を流し終えて水風呂に浸かった。

「ああ。あいつらは人界でも仕事してるからなぁ。多分そっちだろうよ」

「ふーん・・・。そう言えば狸さんはどんな仕事してるの？」

狸たちとの付き合いは長いはずなのだが、白はそんなことも知らないらしい。

「わしは何もしとらんだ」

「ほうほう、じゃあどうしてあんなにお酒調達できたりしてるの？やっぱ物々？」

物々、とは物々交換の意味だ。

「ご名答。さっすが、白山の神様だけあるねぇナメられてるけど」

「えっ！私ナメられてたの！？」

驚きの顔を隠せない白。まあ、ナメられても仕方がないとは思うのだが。

「・・・自覚しとらんかったんか」

「もちよ」

「（・・・こりゃ大物になる予感だな・・・・・）」

「・・・私そんなにナメられてた？」

おや、意外と気にしているらしい。

「んまあ、その話は置いといて・・・代ちゃんはどうした？」

狸はきょときょとと辺りを見回した。

「代？代なら多分自分の部屋に居るんじゃないかね。私の部屋エアコン壊れちって」

「そうか・・・残念。若い人間のオナゴの体が拝めると思ったんだがなぁ・・・」

「えっ」

「冗談じゃ」

「ですよね」

「ああ残念」

「このエロ狸め」

「何とでも言え。エロは人生の潤滑油じゃ」

「ほほう、じゃあ狸さんが毎晩飲んでるお酒は何なの？」

「あれはエロスの一種じゃ」

「嘘ォ！酒がエロスなんて聞いたことない」

「ん？何かエロい話でもしてんのか？」

向こうのほうから河童が一匹泳いでくる。どうやら白たちの会話を聞きつけたらしい。

「うわっ、面倒なのが来たよ・・・」
白はちょっとうんざりした顔をする。
「面倒って何だよ面倒って・・・。で、何のエロ話？」
この河童、エロへの食いつきが半端ではない。
「なんでもないぞ河助よ、エロの話はもう終わった」
狸が河童を落ち着かせる。
「何だ、つまんねぇの」
河助と言われた河童はしぶしぶ元の場所へと戻っていった。
「・・・まったく、河助も昔はあんなんじゃなかったのにねぇ」
狸の耳の近くで小さく白が喋る。
「同感じゃ。いめちぇんとか言うヤツじゃろう」
狸は小さい声でそう返した。
「イメチェン、ねぇ・・・」

場所は変わって代の部屋。
代は夏バテのせいか、日ごろの疲れのせいかは定かではないが、と

にかく座りながらうつらうつらしていた。今にも眠りそうだ。

「・・・・・・・・っ！？」

ヨダレが垂れそうになって慌てて目を覚ます。

「・・・・危ない、寝るとこだった・・・・」

自室の辺りを見回しながら、口から少し垂れたヨダレを袖で拭く。お行儀が悪い。

「姫、お行儀が悪いでござるよ」

代の後ろで声がする。

「うわっ・・・・・・・驚かさないでよ」

そう言うと代は赤面した。ヨダレの件の一部始終を次郎に見られていたからだ。

「姫、やはりヨダレは、はんかち、なる物で拭いたほうがよいのでは？」

「分かってるよ・・・・・もう・・・・。と、とにかく！今のは秘密だからね！」

「姫のご命令とあらば、誰にも話しませぬ。ご安心なさりませ」

一瞬、次郎の顔に黒い笑いが見えたような気がした。

「ま・・・・まあ、とにかく秘密だよ！」

「しかし姫も変わったお人でござるな。あの山神なぞヨダレをたらしながら堂々と居眠りしているというのに」

なかなか容易に想像できるシーンだ。

「私はそういうの、一応気にしてるからねぇ・・・・・」

よっ、と代は立ち上がる。

「まっ、やっちまったモンは仕方ないか！」

開き直る代。

「さて、境内の掃き掃除でもしてこようっと」

そういうと代はいつもより少し早足に出て行ってしまった。やはり少しは恥じているようだ。

「いやー、まさか代ちゃんも口開けて寝る族だったとはねぇ・・・・・・意外だね」

ガタッと音がして、代の部屋の天井の一部が開き、そこから山嵐が顔を覗かせた。

「むむっ、お主、覗きか」

次郎が反応する。

「まあ待てよ。別に今回は覗きする為に来てるわけじゃないんだ」
奥歯に物の引っかかったような言い方をする。いつもなら覗き目的できているのだろうか、と次郎は思った。
「次郎とか言ったな」
山嵐がそう話しかける。
「ああ」
「僕は今ね、代ちゃんが寝たときの様子を監視するために色んなところに隠れてる訳さ」
「（・・・・・怪しいな）」
目を細める次郎。これは疑惑の目だ。
「まあ別に、何か起きたとしても僕は何にもしてやれないんだけどね」
「姫に何もしてやれないというなら、なぜ監視しているのだ？」
「・・・・・言われてみればそうだ。確かに、何で監視してるんだろう？・・・・・・・・・よく考えたら監視とかいらないよな・・・。じゃ、僕帰りますわ」
「ああ。気をつけてな。あと天井きちんと元通りにしていけよ」

「分かってるよワンちゃん」

「分かればよろしい」

山嵐は結局何がしたいのか分からないまま山へと戻っていった。自分でも何をしているか分からないのはまあよくあることではある。

「まったく・・・・・最近は騒々しいのう」

次郎はボソッとつぶやくと、代の部屋の座布団の上にとぐろを巻いて昼寝を始めた。まだ昼ではないが。

境内に、風で落ちてきた葉っぱを竹箒で掃くサッサッという音が響いている。いかにも神社っぽい音だ。

「うん。やっぱり代ちゃんが掃き掃除をするときの音はいつ聞いても心地がいいね」

聞き覚えのある――――多分鈴之だろう――――声が上から聞こえた。代は掃く手を止めて、自分の上にある木の枝を見上げた。

「あら、鈴之助さん。そんなところで何してるの？」

「決まってるよ。また代ちゃんが熱中症で倒れたりしないか見守っているのさ」

なんだ、こいつもストーカーもどきか。

「そう。ありがとう」

ニコッと笑う代。この笑顔はもう天使のようだった、と後に鈴之助は山嵐に語っている。

「いやいや、とんでもない。大事な恋・・・じゃなくて、代わり人が熱中症でまた倒れたりしたら、妖界への扉を開こうと狙ってる奴らに絶好の機会を与えることになるからね」

「え？妖怪への扉？」

聞きなれない単語が代の耳に飛び込んできた。まあ妖怪自体普通は聞かない単語なのだが。

「あれ？山神から聞かされてなかった？妖界への扉の話？」

鈴之助は意外だ、というような顔をする。

「うん」

「・・・・まあ、ちょっと話すくらいならいいか。この白山には、人界と妖界をつなぐ」

「ああ、ヨウカイって、妖怪の世界で『妖界』なんだね」

やっと納得の表情を見せた代。

「・・・・そうだよ。で、話を戻すけど、まあその二つの世界をつなげる扉がこの白山にあって、でその扉が開かないようにする、いわばつっかえ棒的存在なのが、『代わり人』って訳さ。代わり人が

ここから離れてしまうと、その扉を押さえる存在が居なくなってしまうから外部から容易に扉を開けることが出来てしまうんだ。もし妖界への扉が開いたら・・・」

「ハイそこまで～」

鈴之助の声を遮るように山嵐が境内の反対側から声を発した。鈴之助の話が中断されたのを確認すると、ゆっくり歩いて来る。

「・・・代ちゃん、今君はお首様を説得することだけを考えて。ほかの事はきにしなくていいよん」

「でも・・・・今鈴之助さんが」

「その話は忘れろ」

一瞬、山嵐の目が鋭く光った。ほんの一瞬の出来事だったが、代は恐怖で言葉が出なかった。

「まあ、時期が来たらこっちから話すから、別に代ちゃんが何か気にするようなことじゃないよ」

もとの優しそうな目に戻っている。さっきの、あの鋭い眼光は気のせいだったのだろうか。

「ほら、鈴之助も代ちゃんに変なこと教えちゃ駄目じゃ～ん・・・」

「・・・・・すまない・・・・・・・」

鈴之助は山嵐と目を合わせようとしなかった。やはり何かあるのだ

ろうか。

「それじゃ、説得がんばってね～」

山嵐はそういうと、手を振りながらさっき来た方向へと戻っていった。

「・・・・じゃ、僕も帰るとするよ。ほんと、ごめんね」

鈴之助も身軽な動きで、あっという間に代の視界から消え去っていった。境内には代一人、取り残されている。

夏場にもかかわらず、冷たい風が境内を走りぬけ、代が掃き集めた落ち葉を遠くへとさらって行った。

冷たい風に乗った一枚の木の葉が、とある山地の薄暗い廃神社にたどり着いた。苔むしてつちに埋もれかけた境内に落ちようとする木の葉を、白くて、細い指が捉えた。

「御社・・・・代・・・・・・・。あの人の同じ名前だわ・・・・・」

怪しげな女は指に挟んだ木の葉を嘗め回すように見ている。

「フフ・・・・・・フフフッ・・・・・・・・・フハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハ！」

狂気の高笑いが、陽の届かない、忘れ去られた地に響き渡った。

客人

「これは・・・・・・っ！？まさか・・・・・・・。早いとこ知らせないと！」

白山神社より遥か遠くの山。何かを聞きつけた一人・・・いや、一匹の天狗が黒い羽を広げまさに飛び立とうとしていた。

「あらあら天狗さん。何処へお出かけかしら？」

怪しげな女の声。天狗ははっと振り向く。

「これはこれは・・・ご本人自ら登場とは、どう言う事ですかな？」

天狗は手を軽く握りなおした。

「ウフフッ・・・。身構えちゃって。天狗って生き物は本当にカワイイわね」

女は瞑っていた目をうっすらと開けた。光を反射しない、漆黒の瞳。心の闇よりも暗く、醜い色をしたそれははっきりと天狗を捕らえていた。

「これから知らせに行くんでしょう？あのヤマアラシとか言う憎たらしい天狗に」

「人間の暮らしを脅かそうとする貴女には関係の無い事です」

冷静に言い放つ天狗だが、心の中ではこの怪しい女の事を恐れてい

た。戦えば勝ち目の無いことなど目に見えている。

「そう？なら・・・」

女は一歩、天狗に近づく。それと同時に天狗は大きく後ろに飛び退いた。

「やっぱり、そうみたいねぇ。・・・・・クスクス」

女はまた小さく笑う。

「・・・・何が可笑しいのです？」

天狗は戦う構えをとった。今飛び立ったところでもう逃げ切れない。

「何が可笑しい？アハハ！笑っちゃう！何が可笑しいかなんて・・・・・これから死ぬ貴方には関係の無いことよ」

冷たい風が吹いた。

「説得、と言われましてもねぇ・・・」

代は自室にある椅子に腰掛けて、お首様を説得する台詞を考えていた。

「ええと・・・何て言おうか・・・」

『おーい・・・』

「えっ？」

ふと『代』の・・・あ、いや、マリアの声が聞こえた気がしてあたりを見回す代。だが、目に映るのは普通の世界だ。

『やっぱりマリアって名前はナシね。私に合わないわ』

さっきよりもはっきり聞こえる。

「・・・どこにいるの？・・・・まさか！」

代ははっとして天井を見た。

『・・・馬鹿じゃないの？そんなところにいないわよ。第一、私がアンタの中から出られないの、知ってるでしょう？』

「ああ、そういわれてみればそんな気もするね」

独り言のようにつぶやく代。

「ってことは、私の中から私に話しかけてるってこと？」

『そういうこと。もちろん、あなたが見聞きしたこともぜーんぶ知ってる』

「・・・じゃあ、マリアを何か人形っぽいのに移し変えるって話も？」

『もちろん』

「ああ・・・聞いてたんだ・・・・・・」

『私は別に構わないわよ』

「えっ？」

意外な答えに、ふと不安になる。

「もしかしてよからぬ事をたくらんでたり・・・？」

『・・・・・さあね』

「えっ！？」

『フフッ。冗談よ』

「怪しいなぁ・・・・」

『・・・・ふ～ん。そんなこと思ってるんだ』

「え？」

『「もしかしてどうにかして私の体を乗っ取ろうとしてるんじゃないか」って思ったでしょ』

「すげぇ！なんで分かったの！？」

『あなたの考えてることも全部分かるわよ』

「じゃあ、私がしゃべらなくても思っただけで会話できるって事？」

『ま、そうなるわね』

「もー・・・・そういうのは早く言ってよ・・・・・」

『まあいいじゃないの。それより私、器を変えるなら、ほら・・・・・アレ。アレがいいわ』

マリアが指示語で何かを言っている。アレってなんだ？

「アレ？」

『ほら、あんたの部屋の隅にあるあの変なヤツよ』

代は自分の部屋の四隅を見渡した。居間との間にあるふすまの端のほうに、一体大きなぬいぐるみが座っている。

「アレ？」

代は『りらっ熊』のぬいぐるみを指差した。

『そう、アレ。アレがいいわ』

「何？あの『りらっ熊』がいいの？」

『そうよ。しつこいわね』

「分かった。じゃあ山嵐さんにそう伝えておくね」

『それじゃ、よろしく』

マリアはそう言うと黙り込んでしまった。どうやらあの白黒世界に戻って行った様だ。

「・・・案外すんなり終わったなぁ・・・・・・・・・・・。あ、もうこんな時間か・・・・。夕飯つくらなくちゃ」

代は壁掛け時計を見ると、ゆっくり椅子から腰を上げ、居間へのふすまをすっと開けた。

居間では白が、代に背を向けながらテレビを見ている。

「誰と話してたの？」

テレビを見たまま、白はそう言った。

「あ、聞いてた？お首様と、ちょっと話してた」

すると代はゆっくり振り返り

「あ、そうなんだ・・・。私はてっきり電話だと思ってたよ」

「ああ、やっぱり私以外には聞こえてないのね」

「・・・・みたいだねぇ。何かあったの？」

代は白にさっきあった事を事細かに説明し始めた。

白はしばらくそれを聞いていたが、一言

「・・・・代の説明、何言ってるか全然分からない」

その言葉は代に大ダメージを与えた。

「ほうほう。じゃあ、交渉はうまくいったという訳ですな」

居間に山嵐の声が響く。そのすぐ後に、天井からなにやらガタガタという物音がしてきた。

バキッ　と、何か、木製の物が折れたような音がした。天井の一部がススと開く。天井に空いた畳半畳ほどの暗闇から埃まみれの山嵐が軽やかに下りてきた。

「天井裏から参上、山嵐～」

居間が一気に埃っぽくなる。

「・・・・ねえ、山嵐よ」

白が天井を見ながらしゃべる。

「お前、天井裏で何か壊さなかったか？」

「壊した？・・・・ああ、これね」

山嵐は懐から、ちょうど真ん中で折れている木製の札を取り出した。

「ああっ！！それ！壊しちゃったの！？」

白の表情が一気に悲しげなものへと変わる。（白にとっては）なかなか深刻な状況のようだ。

「まあいいじゃん。かわいそうな妖怪を一匹逃がしてやったと思えばさ」

打って変わって、山嵐はまったく気にしていないようなそぶりを見せる。

「あー・・もうやばい・・・・私死ぬかも。ねえ、代・・・・どうしよう・・・・」

何か心配そうな顔をしている白。何か、白にとってまずい状況なのは間違いなさそうだ。

「まあまあ、落ち着いて・・・・。一体、アレは何なの？」

代は気になっていたことを聞いてみた。

「アレ・・・・あのお札は、ちょっと前に・・・と言っても、二百年くらい前の話なんだけどね・・・。境内をうろついてた結構強そうな鬼をね・・・・その、なんと言うか・・・背後から襲ってそのまま封印しちゃったと言いますかなんと言いますか・・・」

「要は不意打ちして鬼を捕まえたと言うわけですな」

代は一人で納得する。

「で、それがどう問題なの？」

すると山嵐が口を挟んだ。

「知ってる？鬼って言うのは、本当はフェアが信条な生き物なんだ。名のある鬼はみな気高く、フェアプレー精神を持っている。それゆえに、アンフェアなことは絶対に許したりしない。そういう奴らなんだよ」

「へー・・・。つまり、鬼と戦うときはフェアにいかなくちゃダメなのに白は不意打ちを入れたと」

「そゆこと」

山嵐は代のお茶を勝手に飲んだ。

「あーヤバイ。境内にいるよこれ・・・・どうしよう・・・」

白は部屋の隅でガタガタ震えている（イメージ的に）。

「・・・・・仕方ないから、私が行って話してくるよ」

代は白の分のお茶を一気に飲み干すと、玄関へ向かって歩き出す。

「あ、そう？気をつけてね」

山嵐は特に白を心配するような素振りは見せなかった。

代は、玄関の戸をそっと開けると、境内のほうを覗き込んでみた。なるほど、確かに鬼がいる。

暗くてよく分からないが、皮膚の色が少々赤黒い。鬼というからトラのパンツを穿いているのかと思っていたが、服装はなんだかサムライみたいな感じだ。体型はなんかこう、筋骨隆々としている。まさに鬼。

代は覚悟を決めて境内へ飛び出す。そして

「やあやあ、我こそは、白山神社が代わり人、御社の代である！」

と、声高々に名乗った。

すると鬼は目を丸くし、少し間を空けてから

「はあ・・・・・そうですか」

と言った。あれ、意外と反応薄いな。

次に何を言おうかと考えていると、いつの間にか鬼が目の前に立っていることに気がついた。その瞬間、代は何とも言えない恐怖を感じた。

「うわっ・・・・・」

小さく声が出る。代は腰を抜かして石畳に座り込んでしまった。さ

っきはなんとかなるだろうと思っていたが、冷静に考えてみるとそんなに甘く事が進むはずが無い。

鬼の身長は代の二倍ほどある。やろうと思えば片手だけで代の体を握りつぶすのも容易だろう。

「お主」

鬼がそう話しかけてきた。代は恐怖で何も言えない。

「お主・・・御社元をしっているか？」

「・・・・・・えっ？」

「だから、御社元を知っているかと聞いているんだ」

「・・・・・い・・・いえ・・・・・」

「・・・・そうか。手間をかけたな。また出直すとしよう。もしも、そいつが戻ってきたら『八郎が会いにきた』と、一言伝えてくれ」

そういうと、鬼は境内を戻り、階段をゆっくりと下りていった。

「行っちゃったねぇ」

代の背後から山嵐の声がした。

「まさか、鬼に向かっていきなりあんな風に名乗るとは思わなかったよ」

すると、山嵐が来たのと、鬼が去ったことによって緊張の糸が切れたのか、代は

「・・・う・・・・・うぅ・・・・・・・怖かったよぉぉぉ！！」

と、座りこんだまま山嵐に抱きついて泣き出した。

「あーはいはい。よしよし・・・・・・・ったく、面倒な娘だな・・・」

山嵐の口から、ボソッと本音がこぼれた。

接触

山嵐、代、白の三人は代の部屋に集まっていた。

「そいじゃ、よござんすか？」

山嵐が二人の表情を見る。少し前にもあった光景だ。

「うん。始めてください」

布団に仰向けになっている代がそう言う。その隣にはりらっ熊のデカいぬいぐるみが寝ている。

「本当に大丈夫なの？ねえ、大丈夫なの？」

落ち着きの無い白。

「大丈夫だって。なんかあってもこの山嵐が片付けてやるからよぅ」

山嵐はそう言うとなぜか持ってきていた刀を鞘の上からそっとなでた。

「うわぁ・・・・と、とにかく、失敗とかそう言うのしないでくださいね！」

代もなんだか不安になってきているようだ。

「大丈夫。じゃあ、はじめるとするか」

そう言うと山嵐は硯で筆に墨を付けた。

「もしかしてアレですか？丸書いてぐるぐるとか言う催眠術」

代はちょっと期待している。が、山嵐は

「いや、あれは面倒だから今回はもっと楽な眠らせ方にする」

「え？」

山嵐は無言で代の鳩尾（みぞおち）に肘鉄を食らわせた。

「ぐぁ・・・・・・・・・・・・・・・・」

代は悶絶した。

「ちょ！・・・・今の大丈夫なの！？」

白が山嵐の肩を強く掴む。

「大丈夫だから、落ち着きなさいよまったく・・・・」

なんとなく、眩しい。この感じは・・・・朝・・・・なのだろうか。
代はゆっくりと目を開けた。胸に痛みが走る。

「うっ・・・」

鳩尾を押さえ、一呼吸した。どうやら代は布団に寝かされているらしい。掛け布団の模様で自分の布団であることが分かった。

「あら、起きたのね。意外と早かったじゃない」

聞き覚えのある声。代は頭と目だけを動かして部屋を見渡す。が、人影は無い。

「こっちよこっち。横よ」

耳元で声がした。

「うわっ・・・・うぐぅ・・・・」

驚いて布団から飛び起きようとするも鳩尾の痛みですぐにうずくまる。痛みを紛らわせるためか呼吸も荒くなっている。

「そんなに驚くことないじゃない」

見てみると、そこには自立しているりらっ熊のぬいぐるみがいた。

「あ・・・・・・そういえば昨日そういうのやったね・・・」

やっと思い出したようだ。

「うまく行ったの？アレ」

「もちよ」

代の問いに答えたのは山嵐の声だった。声は天井から聞こえる。

「いやあ、悪かったねぇ。本当はいつもの方法でもよかったんだけど、なんとなく試してみたくなっちゃってさ」

天井の板の一部をはずしてするすると山嵐が下りて来た。

「でもまあ大丈夫そうで何よりだね」

にこっと笑う、天狗。

「こ・・・・これのどこが無事なんですか・・・・」

相変わらず苦しそうにしている代。左手はやはり鳩尾を押さえていた。

「そんなに強かったっけ・・・？ちょっと見せて」

山嵐は代の着物の胸の辺りを広げて鳩尾付近を見た。普通だったらただの猥褻行為なのだが代は特に嫌がる様子も見せない。まあ、これも相手が人間に興味なしということが分かっているから気にしないでいられるらしい。

「あら～・・・・痣になってるねぇ・・・」

山嵐はしまった、というような表情をしながら自分のあごをなでる。
「これ、結構まずいですよね・・・。かなり痛いんですけど・・・」
苦い顔のままの代。このままでは代の眉間に皺の痕がつきそうだ。
山嵐はしばらくそのままの姿勢でいたが何を思ったか急に
「・・・・・・そうだ、じゃあもう一発いっとく？」
などと訳の分からないことを言い始めた。代が呆れて物も言えない時
「あのさ、さっきから私のこと、忘れてない？」
ぬいぐるみが口をきいた。
「あっ、忘れてた。そのぬいぐるみの着心地はどう？」
山嵐はりらっ熊のぬいぐるみを両手で持ち上げた。
「お名前、何でしたっけ？」
そういえば山嵐はこいつの名前を知らないんだったっけ。
「そうね。マリアとでもお呼び」
カワイイ熊のぬいぐるみは偉そうにそう言った。偉そうに。
「了解。マリオね」
「マリアよ！」

マリアの声の変化で彼女が少々怒っているのが分かるが、人形の表情はまったく変わらなかった。

雪のように白く、冷たいイメージを与える肌をした女が廃れた寺の縁側に腰掛けている。
夏だと言うのに、彼女の周りにはひんやりとした空気が流れていた。

「妖呼(ようこ)様、終わりました」

地に片膝をついてそう報告する、大柄な天狗。山嵐の二倍はありそうな背丈だ。
すると妖呼はゆっくりと天狗のほうを向き

「あら、五月雨(さみだれ)、意外と早かったわね。ちゃんと、手厚く葬ってやったの？」

「はい。あの天狗は丁重に葬りました。・・・・・・しかし妖呼様、なぜ敵方の天狗をあのように丁重に・・・？」

妖呼は読んでいた本を静かに閉じ、自分の隣にそっと置いた。

「死は皆に平等よ。たとえ敵であったとしても、骸は丁寧に扱わなければ、死者への冒涜(ちゅう)でしょう？・・・・それより、あの天狗の団

扇、ちゃんと持って帰ってきたでしょうね？」

目を細める、妖呼。その様子は威圧的にも見える。

「勿論でございます。こちらを・・・」

五月雨と呼ばれた天狗は低い姿勢・・・・と言っても、屈んでいても優に頭が妖呼より高い位置に来るのだが・・・・を維持したまま妖呼に近寄り、団扇を手渡した。烏の羽で出来ている、黒い団扇だ。が、よく見ると、赤茶色の染みがいたるところについている。

「・・・・ふむ。ご苦労さま。もう下がっていいわよ」

妖呼は受け取った団扇で自分に風を送る。

「は、承知いたしました。・・・・・ところで、妖呼様はその団扇を一体どのような事にお使いになるおつもりで・・・？」

五月雨は不思議そうな顔をした。それを見た妖呼はフッと笑うと

「別に、ただ仰ぐために使うわけじゃないわよ。・・・・・これから、この団扇をあの天狗に届けてやるのさ」

「妖呼様、でしたら私も・・・・」

「駄目。あなたはあの天狗と、仲が悪いでしょう？私一人で行くわ。それに、あの御社代とかいう娘、あの娘と少し話もしたいしね」

妖呼は白い雲の塊が迫ってくる空を見つめ

「雨が降るわね・・・・」
と、小声でつぶやいた。
「それじゃ、行ってくるわ」
そう言うと妖呼は立ち上がった。彼女の足元で風がまだ青い落ち葉と共に回っている。
「では、お気をつけて・・・・・・」
五月雨はそう言って頭を下げると妖呼から少し離れた。
「あ、そうそう。夕飯は魚がいいわ。何か適当に作っておいて頂戴」
夕飯についてのことを言い残すと、妖呼は今までが幻であったかのように、スーッと消えてしまった。

先ほどの寺を離れ、一分と経たないうちに妖呼は白山神社の境内に現れた。妖呼は目を細め、懐かしむように神社全体を見渡した。夏の日差しが妖呼の白い肌に降り注ぐ。
妖呼は境内の端に移動し、木陰を通りながら本殿に近づいて行く。
すると、本殿の障子が勢いよくひらき、山嵐が姿を現した。山嵐は本殿から境内を見渡し、首をかしげた。どうやら妖呼の居場所が分からないらしい。

山嵐が障子を閉めそうになったのを見て、妖呼はとっさに

「お久しぶりね」

と声をかけた。驚いて振り向く山嵐。しかし、山嵐は境内の中央部分しか見ていない。

「あの声は・・・・・隠れていないで出てきたらどうです？」

山嵐は境内の中央をキッと見据えたままそう言った。どうやら妖呼が姿を消してひそんでいると思っているらしい。

「こっちよ、こっち」

二回目の声で、山嵐はやっと妖呼の居場所を把握した。

「そんな端っこで何やってるんです？」

不思議そうな顔をしてそう言う山嵐。しかし妖呼はそれを無視し

「これ、なーんだ？」

と、山嵐によく見えるように、あの天狗の団扇を見せた。すると山嵐の表情が変わる。

「その団扇は・・・・・」

「ええ。私に内緒であなたに会いに行こうとしてたから、ちょっとね」

そう言って妖呼は団扇を石畳に投げ捨てた。

「御社代、いるんでしょ？話がしたいわ。呼んでくださらない？」

「・・・・・・・・あの娘と話して、どうしようと言うんです？」

警戒モードに入った山嵐。目つきが鋭くなった。

「あら、別に何も。ただ、ちょっとお話してみたくなったのよ。それだけの理由じゃ駄目なのかしら？」

妖呼は薄紫色の着物の袖をヒラヒラさせながらそう言った。多分この行為に深い意味は無いだろう。

「・・・・・・・・・・・」

山嵐は無言のまま本殿に引っ込んだ。ほんの少しして、少女がひょこっとこちらを覗き、またすぐに引っ込んだ。多分、今の娘が御社代だろう。

ガラガラ・・・と、戸の開く音がする。少しして下駄のカラカラという音と共に代わり人の格好をした、さっきの少女がやって来た。

「あ・・・・・どうも。御社代です」

少女はそういって頭を下げる。

「・・・・・知ってるわ。あなた、妖界（こっちがわ）じゃ、有名人だもの」

と、言いつつ妖呼は心の中で、この娘と自分はどちらの方が背が高

いのだろうか、と思っていた。

「それで・・・・・あなたは？」

「私？私は妖呼よ」

「歳はいくつくらいですか？」

代の質問タイムが始まりそうになる。

「歳？そんなものは忘れたわ。それよりも、あなたとちょっと話がしたいと思ってね・・・・」

妖呼は途中で言葉を止め、目を閉じて上を向いた。

「・・・・・・あら、思ったよりも早く雨になりそうね」

「あ、じゃあ中でお話ししましょう」

「そうね。そうさせてもらうわ。日光はお肌にもよくないしね」

代と妖呼はとりあえず社務所の中で話をする事にした。

らびっと?

代が社務所の戸を開け中に入った。明かりの無い玄関はうっすらと暗く、昼過ぎであると言うのに気味の悪いほど静まり返っている。二人は無言のまま履物を脱ぎ、代の部屋へ向かう。二人が歩くたびに長い間踏まれ続けている床がギシギシと音を立てた。代はとある一室の前で止まり、障子を開けると

「さ、どうぞ」

と言って妖呼を部屋に入れた。妖呼は無言のまま部屋に入ると、小さな机の近くにあった座布団の上に勝手に座った。座り方はなかなかきれいである。

「この神社もさっぱり変わってないみたいね。まあ、内装の大まかなつくりは、だけれど」

天井を眺めながら妖呼がそう言う。代はふすまを閉じると、妖呼と向き合うように座った。

「妖呼さん・・・・でしたっけ?今日は何をしにきたんですか?」

突然の大物の出現に特に臆するような素振りも見せず、普通に接する代。この娘はもしかしたら相当なバ・・・・大物かも知れない。

「何をしにって・・・・。ちょっと、代わり人と話がしたくなってね。話によると、あなた、あの白となかなか」

「あ、今お茶淹れて来ますね」

代は妖呼が話の途中だったのにも関わらず席をはずした。突然だったので妖呼もただ唖然とするだけだった。少し動揺する妖呼。人界にいる妖怪を統べる妖呼の前でこのように振舞えるのは多分、妖界で探しても二、三人程度だろう。

「おやおや、いきなり代ちゃんペースにのまれてるみたいですね。ククク・・・」

天井裏から山嵐の声がする。どうやら覗き見をしているようだ。

「・・・・・・・・・・別に。それにしてもあの娘、なかなか面白いわね」

妖呼は机に目を落としたままそう言った。

「・・・・・・・・・・今までに会った事無いわ。あんな身の程知らずな馬鹿な娘」

「あらあら、代ちゃんを舐めてかからないほうがいいですよ？あのコ、なかなか力持ってるみたいですし」

小さな音がして天井の板が少しだけずれた。天井裏の闇の中で赤い点が二つばかり光っている。

「それは分かってるわよ。人間嫌いのあなたが、あの代わり人をそこまで気にしてるみたいだし」

妖呼は天井裏の隙間に目をやった。するとその隙間から

「いやいや、ナイスバディじゃない人間は好きじゃないってだけですよ。まあ、代ちゃんはナイスバディとは言いがたいですがね」
と言う言葉が返ってきた。それからしばらく、会話のない時間が続いた。

「ふう、お待たせしました～」
そう言うと代はマグカップを二つ持って戻ってきた。
「・・・・・・？何、この妙な匂いは」
妖呼は顔をしかめた。
「え？コーヒーですよ。豆茶って言えば分かります？」
代はニコニコしながらカップを一つ、妖呼の前に置いた。もしかしたらこれは代の計画的犯行なのではないだろうか？
「こー、ひー・・・・・・・・？」
妖呼は置いてあるカップに顔を近づけ匂いを嗅いでいる。が、やはり顔から曇りの色は取れない。
「なかなか美味しいですよ？ま、一口飲んでみたらどうですか？」
コーヒーを勧める。なんだかわざとらしくも感じられなくはない。
妖呼はしばらくためらっていたが、恐る恐るカップに手を伸ばした。
そして、ゆっくりとカップを口に近づける。

「・・・・・うっ！！」

妖呼はまさに苦い！と言うような顔をして、持っていたカップを雑に机の上に置いた。代はその様子を見て少し喜んでいるようだ。

「ぐっ・・・・・・・・」

「そんなに苦いですか？」

不思議そうな顔をしながら、コーヒーを飲む代。妖呼は袖で口元を拭うと

「あなた・・・・・まさか、毒でも盛ったんじゃないの？」

と、疑惑に満ちた目で代を見つめる。それを聞いた代はコーヒーを吹き出してしまった。

「そ・・・そんなこと・・・・そんなことぁはははははははは！あーおかしい！ははははははははは・・・・・・・・・っ・・くっ・・・・くるしっ・・・・はははははははは！」

何がおかしいのかよく分からないが代は突然大笑いを始めた。頭がおかしいのかそれともよほど今のが面白かったのか。もし、これを計画してやっていることだとしたら、代は相当なやり手であるだろう。

コーヒーが苦いと聞くや否や笑い転げる代を見ていた妖呼は少し悔しいと思ったのか、もう一度、こーひーとやらに手を伸ばした。が、味はやはり苦いままだった。

「ははは・・・・・・・・・ふう、すみません、笑っちゃって。じゃあ、普通の緑茶淹れてきますね」

笑い終わって少し落ち着いた代は、また先ほどと同じように部屋から出て行った。

「・・・・・・・ったく、最初から緑茶にしなさいよ・・・・・」

ボソッと小さくつぶやく妖呼。するとまた天井裏で物音がした。

「あら、妖呼様はコーヒーも飲めないんですか」

山嵐の声だけがする。まだ覗いていたらしい。と言うことはさっき妖呼がコーヒーを飲んで苦い顔をしていたのも見ていたのだろう。

「別に。こんなもの飲まなくたって生きていけるわ」

妖怪相手には冷静に答える。やはり、代が相手だと少々やりにくそうだ。多分、お互いに警戒しあっているためだろう。

「それより山嵐さん、あなたの奥さんは元気かしら？」

あら、奥さんいたんだ。

「もちろん。どこかの怖い義姉（おねえ）さまとは比べ物にならないくらいいい妖怪（ヒト）ですよ」

山嵐はそう言うと天井に空いた穴から頭を逆さまして顔を覗かせた。この状態では頭に血が上る。

「・・・・・・あなたもさっぱり口数が減らないのね。妖音(ようね)も大変な夫を持ったものだわ」

目を閉じながらそう言う妖呼。今までの会話を聞く限りではこの二人、一応親戚同士らしい。多分、妖呼の妹が山嵐の奥さん、と言うことで間違いはなさそうだ。

「そんなの、前々から分かっていたことでしょう。それに」

「それに？」

「妖呼様も賛成しましたよね」

「そんな昔のこと忘れたわ」

「いいえ、覚えているはずです。あなたとハジメさんが結ばれた日に」

「その話、今はやめてくれない？」

妖呼は冷たい目で山嵐を見た。これは本気っぽい目だ。

「・・・・・・・・・・・・・・・」

山嵐は言葉をそれ以上続けなかった。蛇ににらまれた蛙、と言うわけではない。ただ単に空気を読んだだけであるのだが。

その、なんとなく気まずい空気を裂くように障子がさっと開かれた。

「妖呼さんと山嵐さんって、義姉弟だったんですね」

ニコニコしながらそう言う代。何か、今日の代は様子が少し変な気もする。

「・・・・・・聞いてたのね」

「ええ。まあ。それよりお茶、はいりましたよ」

代はそう言うと妖呼の飲みかけのマグカップの横に湯飲みを置いた。今度は普通のお茶のようだ。

「・・・・・・・・・・・・・・。普通のお茶ね」

一口飲んで味を確かめる妖呼。さっきのことをどれだけ気にしているんだろうか。

「そうですよ。普通のお茶です。それで、お話と言うのは？」

代は妖呼に対面するように座った。妖呼はふと、そう言えば代と目があまり合わないことに気がついた。

うわさに聞いていた『代わり人』像とはちょっと違う。

「ねえ、一緒にお風呂に行かない？」

妖呼は代にそう提案した。急なことで少々戸惑う代。

「えっ？あっ・・・・・・・」

「この部屋、落ち着かないわ」

落ち着かない、とはつまり山嵐が気になる、ということだろう。

「は・・・はあ・・・・。じゃあ、用意してきますから・・・・・、ちょっと待っててもらえますか？」

そう言うと低い姿勢で立ち上がる代。

「私は先に行ってるわ」

「あ、じゃあ場所だけでも・・・」

「場所くらい知ってるわよ。だってあのお風呂、私が作ったんだもの」

妖呼はへへんというような、得意げな顔をすると代とは反対方向の廊下を進んでいった。

薄暗い廊下を進み、数回右に左に曲がる。そうすると、突き当たりに風呂場の戸が見えてくる。

格子戸には曇り硝子がはめ込んである。どうやら誰かが取り付けたようだ。脱衣所の戸を開ける。昔のままだ。見た感じは古い作りの銭湯、と言ったところか。思い返すとここもずいぶんと長く使われている。

「・・・・・・昔のままね」

妖呼は脱衣所の柱を撫でながらそうつぶやいた。とても懐かしがっ

ているのが見て取れる。

妖呼は少しの間、昔を思い出す様に目を瞑っていた。そしてしばらくすると、背中に手を回し着物の帯をといた。床に落ちる帯。その上に、鶯色の着物がはさっと被さった。

予告

妖呼は湯に浸かっている。
この感じはいつ以来だろうか。この神社を離れてからまともに風呂に入ったことは無かったような気がする。妖呼はちょっとした喜びと、ほんのりとした懐かしさを感じていた。夏という暑い季節だが、湯の温度は妖呼にとって心地よく感じられた。
代はまだ来ない。が、脱衣所のほうでなにやら物音がしているので多分じきに入ってくるのだろう。
浴場には湯の落ちる音と、雨が神社を囲むように茂っている木々の葉に当たる音が響いていた。

雨の音に聞き入っていたせいか、代が浴場に入ってきたのに気づかなかった。妖呼は代が湯船の外で体を流している音でやっと代が入ってきていたことに気づいた。

「ねえ、ここのお風呂は前と変わらなくて、いいわね」

妖呼は天井を見ながらそう言う。さすがにここの天井までは山嵐と言えど来たりはしない。

「え・・・あ・・・・・・・・・・・そうなんですか・・・・？」

代はそう返すと、ゆっくりと湯船に入ってきた。妖呼とは距離を保っている。

「あなた、本当に御社代なの？」

妖呼は思っていたことを率直に聞いてみた。噂に聞いていた人物像

と、なんとなく違う気がしたのだ。

「え・・・？ああ、まあ・・・・・・・そうです」

代はまたさっきと同じように答えた。やはり、妖呼と目をあわせようとしない。

「・・・・話によれば、どんな相手でも差別なく接する面白い人間だって聞いてたけど・・・・。全然違うのね」

そう言う妖呼。代に揺さぶりをかけて本心を知ろうとしているようだ。

「違・・・・・・・いますか・・・・・」

代はそうつぶやくと、深く、ため息をついた。

「私、怖いんです」

水面を見つめながらそう言う代。

「今まで見てきた妖怪さんたちはみんな優しい感じの方々でした。だから、妖怪って皆こんな感じなのかなって思ってたんです。でも、この間、ハジメさんって方を訪ねて、鬼がやってきました。なんだか、今までに見てきたのと違うと言うか・・・・・何と言うか・・・・・。怖いって、初めて思ったんです」

代の話を、妖呼は黙って聞いている。

「それで・・・・・・。人間と妖怪の力の差は大きいです。仲良く

してもらってる山嵐さんだって、次郎だって、やろうと思えば私なんか一捻りじゃないですか」

「一捻り、って、そう簡単に妖怪に人が殺せると思う？」

意外にも妖呼が口を開いた。

「人間も妖怪も、種は違えど感じ方は皆同じよ。喜び、悲しみ、怒り、憎悪・・・・・。人間同士で戦っても、相手や自分の体が四散するようなことはまず無いわ。でも、妖怪は違う。戦えば必ずと言っていいほど、負けた方はそのままの形ではすまない。不必要な力を持っているからこそ、そういうものを持っていない人間に憧れるのよ。まあ、私は別だけど」

一言多い妖呼。

「それに、やろうと思えば私ならあなたをこの場で殺してしまうことも出来る。あなたもそれは承知の上だったでしょう？でも、ここにきた。普通だったら、見知らぬ妖怪（ひと）と一緒に風呂なんて入らないものよ」

「それは・・・・」

「したかったんでしょう？今の話」

それを聞いた代の目が、一瞬はっと大きく開いた。

「何で・・・・」

「なんとなく、かしらね。『噂』によると、あなたは優しい人間ら

しいじゃない。優しいということは常に周りに対して気を配っているでしょう？それに、性格的に誰かに心配をかけたくないから自分の困っていることとかも相談しにくい。・・・・とまあ、こんなところかしら？」

「その・・・・・・通りです」

代は、今度はうっすらと笑いながら水面を見つめた。

「でも、どうしてそこまで分かったんです？私は何も言ってなかったのに・・・・」

「噂、よ。うわさ。それに・・・・・・・・あなたによく似た人間を、私も知ってるから」

妖呼がそういった時、大きな雷鳴が浴場に響きわたった。

「わっ！」

雷鳴に驚く代。妖呼はそれを見て笑っていた。

「そろそろ来る頃だと思ってたわ」

「分かってたんなら教えてくださいよ・・・・」

代はちょっと恥ずかしそうに笑った。多分、さっきまでの彼女の笑顔ではなく、この笑顔・・・・とまでは行かないが・・・・が彼女の本性なのだろう。妖呼は、すこし満足した気分だった。

「ところで、そのお話って何なんです？」

さっきとはまったく違う雰囲気で代がそう話しかけてきた。

「ああ・・・・・話ね。この空気だと話しづらいんだけど」

「どうぞなんなりと。私はかまいませんよ」

「分かったわ。じゃあ話すけど。私はあなたを殺さなくちゃならない」

一瞬、場の空気が凍った。

「と、言いますと・・・・・・・？」

戸惑う代。

「それか、あなたは私を殺さなくちゃならない」

「・・・・・・・・・・・・・」

妖呼は語りだした。

「私は人間が憎いわ。まあ、全員って訳じゃないけれど。それでも、人間が憎い。あんな奴らがいた人間界が憎い」

「それで、人間である私を殺したい、と・・・・・？」

「そんなんじゃないわ。私の目的は魔界への扉を開くこと。あの扉さえ開くことが出来ればこの世界は一瞬にして妖魔が溢れかえり、人間どもはみな死ぬわ。でもその扉を開くには、扉の鍵ともいえる

『代わり人』を殺さなくちゃいけない。ま、あなたがこの地から去ってくれるって言うんなら、私はあなたを直接殺さなくて済むのだけれどね」

「私は・・・・・・どこへも行きません。行くところないし」

「でしょうね。となるとあなたに選択肢は二つ。おとなしく私に殺されるか、逆に私を殺して計画を阻止するか」

「妖呼さんを説得して・・・・・・ってのは？」

「無駄よ。私は行動を起こす。絶対にね。まあ、絶対なんて言葉、あんまり使いたくないのだけれど」

「じゃあ、どうしましょうかね・・・・。困りました」

「ちなみに言っておくけれど、あなたがもし私を殺せたとしても、どのみちあなたは死ぬ定めにあるわ。私はこれでも人界の妖怪達を束ねる頭。私を殺せば、あなたは死罪を免れない。・・・・まあ、人界（こっち）ではただの行方不明扱いになるでしょうけれど」

妖呼はそう話すと、不気味な笑みを浮かべた。

「・・・・・・つまり、どうやっても私は助からない、と」

代はそう確認した。

「ええ。そうよ。これはあなたの運命。逆らうことは出来ないわ。たとえどんな手を使おうとも、あなたはあと一月生きられない」

「一月!?ってことは、妖呼さんはもう・・・・・」

「ええ。計画の準備は既に整っているわ。後は、あなたに予告しておくだけだったのよ。さすがに、何も知らされずに殺されると言うのは嫌でしょうし」

だからと言って死の宣告をわざわざしに来るのもどうかと思うが。

「・・・・まあ、そう言われたらそうですけど・・・。でも、どうしてですか?人間が憎いって」

「・・・・あの人間は、人間どもは、私の最愛の人を殺したわ。村ぐるみであの人を殺したのよ。・・・・・・まあ、もう昔の話だけれど」

「でも、どうして今更?やろうと思えばいつでもその扉を開ける事だって出来たでしょう?」

「魔界への扉を・・・・・正確には門なのだけれど、それを開けるには並大抵の力では不可能。それを私一人であけることなんて・・・・・。だから、各地を回って強力な妖怪たちを手下として増やしていっていたのよ。それに少し時間がかかった。・・・・・・・・・それと、御社代。私はあなたに興味があるわ」

「興味・・・・・・?」

眉間に少し皺を寄せる代。

「ええ。前の代わり人はよく分からない爺さんだったわ。そんな爺さんを私がわざわざ殺しに行くなんて、つまらないでしょう?でも、

あなたは若いし、何か・・・よく分からないけれど何か、力がある。それで、少し面白そうだなと思ったの」

「・・・・・・・・・・」

「自覚はしてないけれど、もしかしたら心のどこかで『あなたなら私を止められるかもしれない』って、思っていたのかもね。・・・・・まあ、それはほとんど無いだろうけれど」

妖呼はそう言うと代の目を見た。深い黒色をした、それでいて綺麗に澄んだ瞳だった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8949i/

妖しろ

2011年10月6日05時47分発行